
Blue bird

kko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blue bird

【NZコード】

N6761M

【作者名】

kk0

【あらすじ】

スーパー口ボット大戦EXショウの章をベースとした物語。捏造有。ネタバレも考慮しておりません。

プロローグ

怒号。閃光。爆音。

後に訪れる静寂。暗闇。

やがて上がる歓声。

ああ、ようやく。

彼はひとりごちた。

眼前には、先の戦闘の勝利を讃え合う者達。

勝利の悦びをどこか遠くに聞きながら、彼は笑った。

彼の異変に、最初に気が付いたのは誰だつたのだろう？

ようやく見つけた。

歓声が静まる。

誰もが、彼を見つめていた。

先刻まで共に戦つた者達。その瞳に宿り始めたのは、驚愕、恐怖、そして敵意。

私の、敵。

「さあ、“終わり”を始めましょう。」

静かに呴いた彼の、内に渦巻く感情は歓喜。

待ち望んだ“終わり”。

願い続けた“破滅”。

心地の良い“恐怖”。

貴方もさぞかし満足でしょう？

闇に囁く。

返る答えは虚空の彼方へ、閃光と共に消えていった。

籠の鳥

My mother has killed me,

My father is eating me,

My brothers and sisters sit
under the table,

Picking up me bones,

And they bury them under the
cold marble stones.

Kewit, kewit,

What a beautiful bird I am

!

杜松の木の上で小鳥が歌う。
それは断罪の歌。
それは贊美の歌。

あの鳥が、自分であつたなら良かつたのに。

「シユウ！ 手前H－！」

聞き慣れた声で我に返る。

相変わらず、品の無い声だとシユウは思つた。

「マサキ・・・その言葉使い、何とかなりませんか？」「品ですよ。」

「つるせえ！」

乱暴な言葉と裏腹に、マサキの駆るサイバスターは優美さそのものだ。

「何でこんな事をする、何の得があるってんだ！？」

彼の言つ“こんな事”が、地球を滅ぼすと言つた事なのか、それともそれを止めてみろと戦いを挑んだ事なのか、シユウは一瞬判断に迷つた。

が、しかし、そんな事はどうでも良いこと思い直す。どうりで返答は一緒だ。

「損得などではありませんよ、マサキ。私はただ、自分の心の命じるままに行動しているに過ぎません。」

破滅を。恐怖を。破壊を。

闇が騒ぎ立てる。

ええ、そりですね。そりしましょ。

シユウは笑つた。

ねえ、愁。生まれ変わつたら何になりたい？
えつとね、鳥になりたい。

あら、どうして？

鳥になつて、自由に空を飛ぶんだ。それで、意地悪な大臣とか威張り散らしてゐる学者達の悪口をたくさん歌つてやるんだ。
ふふ、それは楽しそうね。

勿論、母さんも一緒に。だって母さんは僕の母さんなんだから。

ええ、そうね。その通りだわ。一人でうんと悪口を言つてやりましょ。

笑い合う母子。

それは遠い日の想い出。

叶わなかつたさみやかな幸せ。

籠の中の鳥は、自身の破滅を願い、歌う。

警報がけたたましく鳴り響く。

モニターもその大半が役割を果たさず、ノイズばかりを映し出していた。

「“終わり”……ですね。」

どこか満足気に、シユウは呟いた。

辛うじて生きている通信機能を開く。

「……見事です。このネオ・グランゾンをも倒すとは。」

突然通信を開かれたマサキは、どこか面を喰らつたような顔をしていた。

「……これで、私に悔いはありません……戦えるだけ、戦いました。」

間抜けな顔だ。シユウはそう思った。

「……なんて顔をしているのですか、マサキ？“予言”的“魔神”を倒したのです。もつと……誇らしげな顔をして下さい。」

「何でだ！シユウ！何でお前は……！」

感情のままに叫び散らす彼の、頬を伝うのは涙だろうか。

ノイズだらけのモーターからほ細かい表情までは読み取れそうもなかつた。

「全てのモノはいつかは滅ぶのですよ、マサキ。それが、私の番で
あつた。それだけの・・・そう、ただそれだけの事です。」
この世に生を受けて21年。その間、あらゆるモノが彼を縛り続け
た。

自由になりたい。

大空を見上げて、飛ぶ鳥を羨んだ。

それも、もう終わる。

計器が限界を訴えてショートし始める。機体が爆発するのも、時間
の問題だつ。

「・・・これで、ようやく全ての鎖から・・・解き放たれる事が、
でき・・・ま・・・した・・・」

瞳を閉じる。

破滅を。破滅を。破滅を。

彼を包みこんだ闇が、壊れたテープレコーダーの様に同一の単語を
繰り返す。

ええ、最高の破滅をプレゼントしますよ。

墮ち行くネオ・グランジンの中で、シコウは微笑んだ。

ようやく、自由だ。

長年待ち望んだ瞬間だった。

追憶の風

フランスの哲学者ジャン＝ポール・サルトルは言った。

“人間は自由という刑に処せられている”と。

宗教家達は声高に詠う。

神は人間を創り賜うた、と。

科学者達は一様に唱える。

人間最大の発明が神である、と。

神が人を創つたとするならば、人というモノの本質は神によつて決定されている筈である。

サルトルはこれを“本質が存在に先立つ”と表現した。彼は問う。

では、人が神を創つたのだとしたら、どうなるのかと。

本質を決定されないままに、ただ存在だけが孤立してしまつているのではないか、と。

“存在が本質に先立つて”しまつてているのではないかと。

彼は主張した。

人間とは、彼が自ら創りあげるものにほかならない。

自分の本質を自ら創る為に、本質を思い描き実現に向けて行動する

“自由”を持つてているのだと。

ただ、その“自由”は自ら思い至つた行動において、全ての責任の所在は自身に返る事を覚悟しなければいけないものもある、と続ける。

そして締め括る。

自由であることは、自由であるよ！」 呪われている事である。

読んでいた本を閉じて、少年は立ち上がった。
時計を見る。

もうすぐ母親に会える時間だ。

本を元の棚に戻し、鏡の前で少し身嗜みを整えた。
扉をノックする音が、本棚で埋め尽くされた室内に響く。
迎えの女中だらう。

「どうぞ。」

少年の声に応える様に扉が開いた。

「クリスマス様、お時間で御座います。」

いつもの女中が恭しく頭を垂れる。

「ええ、早く行きましょ。」

逸る心を抑え、彼は落ち着き払った様子で歩き出す。
開け放つていた窓から風が一陣舞込んで、彼の黒髪をふわりと揺らした。

初夏といつても差し支えない季節。

だが、吹く風は穏やかで未だ春の気配を残していた。
母親に会つたら、さつき読んだ本の話をしよう。
廊下を歩く少年の心は春風の様に躍っていた。

母の手に引かれて、暗闇を進む。

不安は無かった。

そこに母がいる。

それだけで少年の心は穏やかだった。

どこに向かっているのかすら、聞かなかつた。

二人でお出かけしましよう。夜中にこっそり。

微笑む母に、少年は満面の笑みで応えた。

母親と一人きりの時間が持てる。

少年にとつて、それは何ものにも代え難い程の誘惑だった。

やがて、暗闇の中にはんやりと明かりが灯る。

ここが目的地なのか、母親は歩みを止めた。

木々の間に隠れるように、洞窟があつた。明かりはそこから漏れて
いる。

洞窟から見知らぬ男が現れた。

「ようこそ。お待ちしておりましたぞ、ミサキ様。」

母の名を呼んで恭しく頭を垂れる男に、少年は一瞬恐怖を感じた。

母の手を強く握る。

母が優しく握り返す。

「さあ、行きましょう、愁。」

男に続いて洞窟の奥に進む母親。

母親に手を引かれ、進む少年。

そこから先の事は、よく覚えていない。

声が聞こえた。

ひどく聞き覚えのある声だ。

彼の内側でずっと騒ぎ立てていた声。

その声が、今は彼を包む闇となつて“そこ”に存在していた。

願イハ叶エテヤツタハズダ。

サア、破壊ヲ。

破滅ヲ。

恐怖ヲ。

我ニ捧ゲヨ。

全テノモノニ甘美ナル死ヲ！

闇が、彼に迫る。

彼を飲み込もうと、うねり、蠢く。

彼は抗う。

闇が内側にいた時から戦い続けてきた。

そして、彼は勝った筈だ。

勝つたからこそ、今ここにいる筈なのだ。

今更、負けてなどやるものか。

闇を見据える。

私は私だ。何人にも犯させはしない。

それは決意。

或いは信念と呼ぶもの。

永い間、彼と闇とは対峙していた。

もしかしたらそれは一瞬だったのかもしれない。

不意に、名前を呼ばれたような気がして、彼は振り返った。

闇の中に一筋、光が漏れ出していた。

愁。

光が、彼の名を呼ぶ。

光はゆっくりと人の形を取り始める。

愁。

手を差し伸べられた。

少し戸惑いながら、彼はその手を取る。

愁。

私の、可愛い、子供。

光が優しく微笑む。

さあ、目覚めなさい。

彼が闇の中で最後に見たのは、穏やかに微笑む黒髪の女性だった。

目覚め

薄暗い天井。

最初に目に入ったのはそれだつた。
ぼんやりとした意識の中、寝台のような物に寝かされている事だけ
は何とか把握できた。

「お目覚めになりましたかな、シユウ様。」

寝台の横に男が佇んでいた。

「…ル…ルオゾール…？」

シユウは男の姿を認める、確かめるよつて名前を呼んだ。

「左様、私めに御座います。無事のお目覚め、何よりで、シユウ様。」

男は満足そうに口元を歪めると、恭しく頭を垂れる。

「私は…私の、名は…愁…シユウ＝シラカワ…。」

頭痛が酷い。

ようやく“思い出した”自分の名前を呟く。

「…そして、貴方が…ルオゾール＝ゾラン＝ロイエル…。」

ルオゾールが肯いた。

なおも痛み続ける頭を押さえながら、シユウは記憶の糸を手繰つて
行く。

「…しかし…ここは、何処ですか？何故、私は…此処に…？」
手繩つた糸は、しかし途切れどぎれど、彼に正確な情報をもたらし
てはくれそには無かつた。

何とか起き上がろうと腕に力を入れてみるが、神経すらも彼の意思
を巧く伝えてくれない。

僅かに身じろいだシユウを見咎めて、ルオゾールが声を出す。

「おお、そのままそのまゝ、まだ体力が完全では御座いませぬ故、
無理はなさいませぬ様。ここは、ラ・ギアスの我等が神の祭殿の中。
ご心配には及びませぬ。」

「祭殿…ヴォルクルス…様の、祭殿ですか？」

破壊神サーヴァ＝ヴォルクルス。辛うじて繋がっていた糸の中に名前を見つけ出す。

「左様で。」

「…少し、記憶が欠けている様です…。何か、何か重大な事があつた気がするのですが…。」

瞳を伏せるシユウに、憐憫に似た表情を作つてみせるルオゾール。

「無理も御座いませぬ。貴方様は一度死んでおられるのですからな。我が蘇生術と云えど、完全に元には戻せませぬ。」

言葉の端に、どこか咎める様な響きがあつたのは気のせいだろうか。『時が経てば、自然に思い出される事も御座いましょう。今は『ゆつくりお休み下さい。』

ルオゾールの口から低く呪文が紡がれる。

それは眠りの魔法。

ゆつくりと薄らいで「行くシユウの意識。

意識が闇に落ちるまでの僅かな時間。

それでも、彼の頭の中では幾つもの疑問符が浮かんでは消えていった。

眠りに落ちる直前、シユウは誰かの声を聞いた。

優しそうな女性の声。

聞こえてきたのは子守唄だろうか。

確かめる術もなく、シユウの意識は完全に闇に沈んでいった。

少年が、母の異変に気付いたのは春先の事。

母の田線が、少年に向けられる時間より、虚空を見つめる時間の方が長くなっていた。

それでも、少年が呼びかければ、母親は彼の許に戻つて来てくれた。

「ごめんね、ぼーっとしちゃつてたわ。」

少し困った様に笑いってくれる母は、少年からみても美しかった。

「お爺様とお婆様の事を考えていたの？」

少年の問いかけに、母親は答えない。

ただ、寂しそうな笑顔を向けてくるだけだ。

「母さん、お家に帰りたいの？」

少年は常々思つていた事を口に出した。

母が遠い田をして見つめる先。

動かない太陽の更に上。

母の、故郷。

「ねえ、愁。愁は、ここが好き？」

問い合わせで返された問い。

しかし、それは母の明確な答えたど、少年は理解していた。

悲劇が母子を襲つたのは、それから少し先の事だった。

それは夏も近づいたある日の事だった。

少年はいつもの様に女中に連れられ、母親の部屋へと向かっていた。
女中が部屋の扉を数回叩く。

いつもならすぐに返り返る篠の声が、その口はなかなか聞こえてこなかつた。

「ミサキ様？」

女中が怪訝そうに呼びかけながら、もう一度扉を叩いた。

「ミサキ様、クリストフ様をお連れしました。」

ノックの音だけが廊下に響き渡る。

「ミサキ様、いらっしゃらないのですか？」

恐るおそる、女中は扉を押した。

特に抵抗もなく扉が開く。

部屋の主は窓辺の椅子に腰掛け、外の景色を眺めていた。
母親の姿を認めて少年は駆け出す。

「母さん！」

呼びかける声は喜びに満ちていた。

少年の声を聞いて、みづやく気付いた様に部屋の主はゆっくり振り向く。

「母さん、何を見ていたの？」

母親の手を取り、少年は問いかけた。

彼女はきょとんとした顔で少年を見つめる。

「…母さん？」

何も答えない母に異変を感じる少年。

「母さん、どうしたの？」

必死に呼びかける少年に、彼女はようやく言葉を返した。

ゆっくりと、しかし、はつきつと。

「……あなた……誰なの？」

悪い夢に急き立てられて、シユウは田を覚ました。
汗を拭い、荒くなつた息を何とか整えようと奮闘する。

「……また……ですか……。」

誰にともなくシユウが呟いた。

ルオゾールの手により常世から現世に引きずり戻され数日経つ。
その数日、シユウは毎晩の様に悪夢に魘されていた。

おそらくは毎回同じ夢。

しかし、どんな夢だったかを思い出そうとする度に、拒絶するよつ
に頭痛が襲つてくるのだった。

不完全な蘇生術の後遺症なのだろうか。

未だ儘ならない身体を、無理矢理動かし起き上がる。
汗で髪が肌に纏わりつするのが鬱陶しかつた。
シャワーを浴びたい。

そう思つた。

頭の片隅にある夢の残照」と、全て洗い流してしまつたかった。

闇と欠片と少年と

ぱらぱらと捲つていた本を閉じ、シユウは立ち上がる。

何不自由なく生活できるようになつたのはつい最近の事。

結局、シユウが完全に体力を取り戻す為に要した時間は一ヶ月近かつた。

相変わらず、記憶は穴だらけのままだつたが。

それにもしても、この論文は面白くない。

先刻まで読んでいた本を本棚に戻しながら、シユウはそう思つた。著者欄に刻まれている名前は、白河 愁。

よくこんな論文で博士号が取れたものだ、と半ば感心した。その論文は哲学についてだつたが、どうにも主張が幼すぎる。

書かれた日付を見れば、まだ自分が17歳だった時の物だった。

自分の書いた文章も第三者視点で読めるのは、記憶喪失者の特権に入るのだろうか。

同じ様に、今の彼から見れば、拙い文章で綴られた論文が十数冊。つまり、同じ数の博士号を取得している、という事らしい。

どれも彼が20歳になる前の日付だった。

少しでも記憶が戻る助けになれば、と紐解いてはみたものの、どれも数頁読んだだけで本棚の中に戻してしまった。

解つた事といえば、自分が地上に出たのが17歳の時だったらしい、という事。

そして、17歳から19歳になるまでの2年間何かに取り憑かれたかのように、博士号をはじめとし様々な資格を取り続けていた、という事だった。

：取り憑かれた？

思考の整理をしながら、シユウはその単語に妙な引っかかりを感じた。

そう云えば、自分は何故、地上に出たのだろう。

素朴な疑問で終わる筈だった。

机に戻り、パソコンを立ち上げる。

ネットワークに繋ぎ、目当ての情報を探し出す。

セキュリティを掻い潜り、侵入した先はラングラン王国外務局のメインコンピューター。

「記憶は失つても、こんな操作は覚えているものですね…。」

“トップシークレット”と書かれたファイルを見つけて出し、管理の甘さにため息を吐きながら、シユウは呟いた。

ファイルを開く。

ちょっとした知的好奇心を満たすだけの行為。

その筈だった。

千々に散った記憶はあるでパズルのピース。

其処此処に散らばって、見つけ出されるその日を待っている。

穴だらけの記憶は、ピースの抜け落ちたジグソーパズル。

ただそこに在りながら、ピースが埋まるその日に焦がれている。

ぱちり。

軽い音を立てて、ピースの1つが空いた記憶の穴に填まり込む。

シユウは、ただ黙つてパソコンのモニターを眺めていた。

少年の父親が死んだのは、少年が15歳になつて間もなくだつた。
葬儀の場に、正妻である筈の母の姿は無かつた。

父の死を、少年は冷めた目で見つめていた。

側妻と数人の妾が父親の亡骸を囲んで泣いている。

白々しい。

少年はそう思った。

踵を返し、少年は葬儀場を後にした。
自室に戻り、喪服を脱ぎ捨てる。

少年は、そつと自分の左胸に触れた。
それは丁度心臓の真上。

痛々しく残るのは、深々と抉られた傷跡。

服を着替えて、浴室を出る。

サア、ソロソロ始メヨウ。

闇が、少年を蝕み始めていた。

ある朝、気が付いたら“ソレ”はそこにいた。

「ご主人様ー！おつはようございまーす！！」

凄まじいテンションで挨拶をしてきたソレは小鳥。

青を基調とした外見は可愛らしいの一言に尽きるのだが・・・。

「いやー、今日もいい天氣でございますよー！清々しい朝つて感じですね！…やっぱり天氣が良いと気分も良いってモンですよ！ねえ！」

兎に角喧しい。

シユウはその小鳥に一瞥しただけで、読んでいた本に視線を戻してしまった。

「あれー！？ご主人様、ノーノーメント＆ノーリアクションですか！？？折角の感動の再会じゃありませんかー！アタシも久々にご主人様に会えるつてんで念入りに毛繕いしてきたんですよ！ほら、見て下さいよ、この見事な毛艶！そんじょそこらの鳥には出せない艶ですよ！！」

シユウの周りをパタパタと飛び回りながら、小鳥はなおもマシンガントーク。

シユウは諦めた様に本を閉じ、サイドテーブルに止まつた小鳥に視線を向けた。

「・・・どちら様ですか？」

声は不機嫌そのものだつた。

あまり感情を表に出すタイプではないシユウだが、流石に朝っぱらから甲高い声で騒がれては不機嫌にならざるを得ない。

しかも、相手は超絶ハイテンション。

「ご主人様！アタシの事まで忘れちやつたんですか！？そりゃああんまりじゃないですか！！」

今度は怒り始めた小鳥。

「タダでさえ、『ご主人様が地上に出た時に置いてけぼり喰らつたつてーのに！』

小さな身体の小さな羽根をバタつかせ、必死のアピール。

「ほら、アタクシでござりますよ、『ご主人様！使い魔の鑑！・ファミリアの中のファミリア！チカちゃんでござりますよ！』

小鳥の名前を聞いて、ようやくシユウが反応を示した。

「チカ……ああ、貴女でしたか。」

記憶の、小さなちいさなピースが埋まる。

「ご主人様、反応薄つ……」

「……貴女の反応がオーバー過ぎるだけでしょう。」

「そんな事ないですよー！今頃読者の皆様はチカちゃんの登場にスタンディングオベーションせんばかりの喜びようですよ、きっと！

！」

「……読者？」

（あ、こり。それ言つちゃダメでしょ。）

「あ、何でもないです、ハイ。」

「？・・・そうですか。」

（ギリギリセーフ。）

（チカちゃん、あまり余計な事を言わない様に。）

「はあい。」

（・・・こほん。）

チカは気を取り直して飛び上ると、ちょこんとシユウの肩に止まつた。

「いやー、やつぱり『ご主人様の肩が一番落ち着きますねー。』

ふーやれやれ、とでも言わんばかりにチカが息を降ろす。
かと思えば。

「あー！忘れる所でした！……」

突如として大声を上げた。

「一体何ですか、いきなり……。」

耳元で呼ばれたシユウは、やや顔を顰める。

それでチカが言つた事といえば、

「この間お貸しした1000クレジット、返して貰つて良いですか

？」

だつた。

「・・・チカ、余りふざけないで下さいね。」

チカに返されたのはお金ではなく、シユウの静かなしずかな低い声。その声に何か恐ろしいモノを感じとつて、チカは思わず身を硬くした。

「しつつれいしましたー。」

ただでさえ小さいチカが、更に少し小さくなる。
と、大人しくなつたのもつかの間。

「あーーー！忘れてた！！！」

先刻よりも大きな声で叫ぶチカ。
勿論、シユウの耳元で。

「・・・チカ・・・」

呼ばれた方は堪つた物ではないようで、彼女の主人の声は静かに怒りを湛えていた。

「あ、いや、ほんとに、ほんとに重要な事だつたんですねって。本気

と書いてマジと読む程！」

必死に言い繕うチカ。

静かに睨み付けるシユウ。

「・・・」

「・・・」

「・・・で、今度は何ですか？」

諦めた様に溜息を吐いて、シユウが沈黙を破つた。

「えーと、その・・・ですね・・・」

ちらちらと、主人の顔色を窺いながらチカが喋る。

「・・・ルオゾール様が、お呼びでした。」

「・・・」

「

「・・・・・」

またもや沈黙。

「・・・チカ。」

「は、はいい！」

急に名前を呼ばれて慌てて返事をする。

「・・・そういう事は、早く言つて下さい。」

今までの無駄な遣り取りを思い出して、ショウは盛大に溜息を吐いたのだつた。

「おお、これはこれはシユウ様、お待ちしておりましたぞ。」

「チ力を伴つて祭殿を訪つたシユウを、ルオゾールは恭しく出迎えた。
「随分と、遅くなつてしまつた様で。」

「ちらり、とチ力を見遣るシユウ。

口笛を吹いて誤魔化すチ力。

それで大体の事情を察したのか、ルオゾールは特に突つ込む事もなく続けた。

「何、御気になさいますな。その後の御加減は如何ですか？」

「ええ、悪くありませんね。衰えていた体力も、よつやく元に戻つたようです。」

「それは何よりで御座いますな。」

不気味に口元を歪めるルオゾール。

「では、シユウ様。そろそろ“例の計画”を実行に移す時かと…。

「例の…計画？」

さも当然の様に囁くルオゾールだが、シユウの記憶はその言葉と過去とを未だ繋いではくれていない。

「済みませんが、その計画について少し説明して頂けますか?どうも記憶が完全ではないようです。」

「おお、これは気が付きましたで、失礼を致しました。」

簡単な謝罪の言葉の後に、ルオゾールは計画について、滔々と語りだす。

ここ、ラ・ギアスにはヴォルクルスを封じた神殿が五箇所ある事。その封印を解除し、ヴォルクルスの分身を復活させ、ラ・ギアス全土を混乱に陥れる事。

そして、最終的には、ヴォルクルス神を現世に蘇らせる計画だ、となるほど、ヴォルクルス様が遂に復活なされるのですか…全

くもつて、楽しみな事です・・・。」

くすくすと妖艶に微笑みながら、シユウは呟いた。

「私はソラティス神殿に赴き、計画の障害になりかねない大神官イブンを始末して参ります。」

五箇所ある封印の一つ、ライオット。

丁度、封印の真上にソラティス神殿は建てられている。

四大精靈を祀つた神殿と、ラ・ギアス屈指の大神官。

なるほど、計画には障害としかなり得ない組み合わせだつた。

「シユウ様はモニカ王女の入手をお願い致します。ヴォルクルス様復活の儀には王族の生贊が必要不可欠ですので・・・」

「モニカ・・・？」

王女と言つからには面識が有るのだろうが、生憎と今は忘却の彼方に埋もれてしまつてゐるらしい。

「詳しい事はチカにお聞き下さい。貴方様の記憶の欠けた部分を補つてくれる事でしょう。」

話題にされて、得意気にチカがその小さな胸を張つた。

「はいはい、チカちゃんにお任せ下さいー！じゃんじゃんぱりばりお役に立ちますよー！！」

シユウの肩の上で、一生懸命自己主張。

「とりあえず、王都までの案内料は500クレジットでいかがでしょう？」

お約束。

「チカ！いい加減にせんか！」

ルオゾールに怒鳴られて、チカはこそこそとシユウの後ろに隠れた。

「ちえ、みんなノリが悪いなー。ちょっとボケただけじゃないですか・・・まあ、この面子にノリを求めるだけ無駄なんですかねー。」

シユウとルオゾールを交互に見て、チカは溜息を吐く。

「そいじゃ、ご主人様、参りましょうか。」

ぱたぱたとシユウの肩から飛び立つチカ。

「ああ、チカ。」

呼び止められる。

「はいな。何ですか、ご主人様？」

振り向いたチカに、シユウが真顔で告げた。

「お金は払いませんよ。」

「今頃！？」

のつてくるの遅くね！？

と、心中で突っ込みながら、チカは、さも愉快そうに笑う主人を見つめるのだった。

何が起きたのか、理解するのに少しかかった。

男に案内され、洞窟を母と共に進み、そして・・・。

そして。

意識が一度、途切れた。

目覚めた時には、神殿の様な所にいた。
祭壇のような場所に寝かされて。

傍らに母が居た。

男は、少し離れた所から、こちらを見て、晒つていた。

「・・・か、か・・・あ、ひ・・・ん・・・?」

巧く喋れない。

身体は、何かに縛られた様に動く事を頑なに拒む。
母さん。

もう一度、少年は必死に呼びかける。
母が、ゆっくり振り向いた。

これまで、少年が見たことも無いような、笑顔で。
その手に、握られていたのは・・・。
握られて、いたのは。

目の前の女は、それ以外の表情を忘れてしまった様に、ただ、笑っていた。

少年の声は・・・届かない。

「「」ひしゅじんさまー、着いて来てますかー？」

「ええ、問題有りませんよ、チカ。」

一時間近く、それも木々が生い茂る森の中を歩き続けてきたにもかかわらず、シユウは息一つ乱さず答えた。

「相変わらず、ご主人様は色々と人間離れしていらっしゃいますねー。」

「・・・褒め言葉として、受け取つておきましょうか。」

「やややややや、嫌だなあ、ご主人様、褒めたに決まってるじゃないですかー！」

溜息混じりのシユウの言葉に、ようやく失言に気付いたチカが慌てて言い繕つ。

「あ、ご主人様、見えてきた、見えてきましたよー！」

話題を逸らす様に、チカは必死に見えてきた壁をアピールした。

「「」ひ、ですか。」

「はいな！えーと、スイッチは何処だつたかなー。」

ここでもない、そこでもない、と飛び回るチカを傍目に、シユウは迷わず壁の出っ張りを一つ押した。

ガコン。と硬い音がして、壁に一つ扉の様な物が現れる。

「あれー、もう見つけちゃつたんですか！？流石ですねーご主人様！」

「一つだけ、不自然な出っ張り方をしていましたからね。」

シユウは事も無げに言うが、一般人が見たら何処が不自然なのか、理解できないだろう。

やっぱ、色々人間離れしてゐるなー、この人は。

そう思いながら、チカは、さつさと扉の中に入つてしまつた主人を

追うのだった。

中は、簡単な格納庫になっていた。

最奥に、濃紺の巨兵が聳え立っている。

シユウは、ほう、と声を出した。

「グランゾン……ですね。」

「何だ、ご主人様つてば、ちゃんと覚えてるじゃないですか！ そうです、何を隠そう、こちらがご主人様の愛機、その名も武装機甲士グランゾンですよー！」

お前が作ったんじゃないだろ？、と突っ込みたくなる程坦々とチカがグランゾンの紹介をする。

「ところで、チカ……その“武装機甲士”というは何ですか？」

「え、グランゾンにも“魔装機神”とか“妖装機”、“咒靈機”みたいな呼び名が欲しいじゃないですか！ それで、アタクシが考えました！ どうです、格好良いじゃないですかー！ 武装機甲士…うーん良い響き！ 貴公子と機甲士を掛けてる辺りにセンスが窺えませんか？ ねえねえ、どうですご主人様！？」

シユウ、ノーコメント&ノーリアクション。

「さて、モニカ王女の居場所に向かいましょうか。」「・・・はあい。」

チカはちよつぴりいじけていた。まあ、そんな事を気にするシユウではないが。

「で、そのモニカ王女は今、何処にいるのですか？」

「えーとですねー、モニカ王女は・・・現在シユテドニアスに占領されてる、王都ラングランにいらっしゃるみたいですねー。まずは王都に忍び込まなきやですね、こりや。」

さつきまでのいじけた表情はどこへやら、活きいきと喋り始める。

「そう言えば、知つてました？ モニカ王女つてば、どうにもご主人様に気があるみたいなんですよねー。あのお姫様つてほら、昔から

メンクイでしたからねー。」

「お喋りはそこまでにしましょう。乗り込みますよ。」

「はいはい！いやー、主人様とグランゾンに乗れる日が来るなんて！アタクシ感激でござりますよーーー！」

ゆっくりと、グランゾンに歩み寄るシユウ。

そつと、機体に触れて、呟いた。

「・・・貴方も、死に損なったのですね・・・。」

ならば。

シユウは少し笑った。

「・・・もう少し、お付き合いで頂きますよ。今度こそ、本懐を遂げる為に。」

武装機甲士は、ただ静かに佇んで、しかし、確かに主人の帰りを待つていた。

「クピットが、音を立てて開く。主人を、シユウを迎える為に。

ラ・ギアスに、蒼い魔神が蘇ろうとしていた。

シユウがコクピットのシートに座ると、待ち侘びていたかのようにグラントンに灯が燈つた。

各計器が正常を示す数字を次々に映し出す。

チカはグラントンの計器を忙しく確認しながら、精靈レーダーとナビゲートの設定始めた。

シユウの指は滑らかにコントロール上を踊り、全ての機能が正常である事を確かめる。

「グラントン、異常なしで御座いますよ、ご主人様！」

「ええ、それではモニカ王女をお迎えに上がりましょ。」

コントロールクリスタルに意思を込める。

ゆっくりと、濃紺の巨兵が動き始めた。

「えーと、今いるのがドレント州だから・・・カラタミー州を抜けて・・・」

チカが一生懸命ルートを確認している。

「チカ、その作業は一旦中断して下さい。何か近づいて来ますよ。」

「えつ！？ホントですか！？すみません！？気付きました、敵ですか！？」

レーダー映った反応数はおよそ10機。

「ええ、敵意を剥き出しにしていますよ。尤も、私達に殆ど味方など居ない筈ですから、近づく者は全て敵・・・なのですがね。」
冷ややかに、しかし、少し楽しそうに、シユウは笑っていた。

ザレス＝クワイヤーは焦っていた。

簡単な偵察任務だつた筈だ。

突如現れた反応は、しかし、たつた一機。

こここの所、地上の兵器とそのパイロットが大量に召喚される事件が相次いでおり、今回もそれ絡みだと思つていた。

念の為、と隊を率いてやつて来たのは幸か不幸か。

既に眼前に迫つたその兵器。

ザレスには見覚えがあつた。

「・・・グランゾン・・・」

紡がれた名に纏わり付くのは、恐怖。

冷たいものが背筋を滑り落ちていく感触があつた。

「ク、クワイヤー大佐！・・・い、如何致しましよう！？」

部下達が、明らかにうろたえているのが分かる。

“大佐”。その肩書きに恥じぬだけの武勲をあげてきた。ザレスは額の汗を拭うと、冷静を装つて部下に命じた。

「構わん。敵は一機だ、破壊せよ。」

指揮官の動搖は、部下の士氣に関わる。

背教者クリストフ。その名はシュテドニアスでも広く知られていた。特に、恐怖の対象として。

だからこそ、ザレスは冷静を装わなければいけなかつた。

それに、とザレスは思う。

あの悪魔を、これ以上野放しにしておくのは危険だ、と。祖国を守る為、軍に入った。

ならば。

闇色を纏つた悪魔を見据える。

ならば、ここで戦わずして、何処で戦おうといつのか。

一呼吸置いて、ザレスは隊を展開させた。

「あつれー、シュテドニアスの偵察部隊ですね、ありやあ。」
チカは、グランゾンのデータベースから該当機体を探しながら、小

馬鹿にしたように笑う。

「こつち見てビビりますよ、『主人様！』

隊の展開の遅さを見れば、その恐怖の大きさを窺い知る事が出来た。

「えーと、指揮官機が・・・『ゴリアテ』で、レンファアが四機。あとは無人偵察機つて感じですかねー。うつわ、グラフ・ドローンとかまだ使つてるんだ。ダサいなー。」

「ふむ、リハビリには丁度良いかもしませんね。お相手して差し上げましょう。」

久方振りの戦場の空気。
死と隣り合わせの緊迫感。

生の、実感。

軽い興奮を覚えながら、シユウはゆっくりとグランゾンを前進させた。

もし、この光景を他に見ている者が居たならば、きっといつ言ったであろう。

地獄の様だ、と。

其処此処に散らばるのは、無残な姿の元兵器達。

グラフ・ドローン郡は、何か圧倒的な力で押し潰された様に、大地にその亡骸を埋めていた。

レンファー一機は、手足を切断され、芋虫のよつた姿で無様にその身を横たえている。

「フフフ、この程度ですか？」

物足りない。

嘲笑う様なシユウの言葉は、暗にそう伝えていた。

「この程度でこのグランゾンに向かつてくるからですよ。さまあみやがれってんです！」

チカが自慢そうに胸を張る。

・・・お前は何もしてないだろ？が。

「チカ、ブラックホールクラスター発射準備を。」

「あら、ご主人様つてば、雑魚相手にサービスし過ぎじゃないですか？」

言いながらも、チカは器用に羽根を使い、コンソールを操作し始める。

「このグラソゾンに向かつてきた勇気だけは、賞賛して差し上げようと思いましてね。」

くすくすと、晒う。

その妖艶な横顔は、悪魔と言つより墮天使と言つた方が相応しい様に思えた。

「はいな、ご主人様。お待たせしました！ブラックホールクラスター、いつでも発射OKですよーーー発バーンとぶちかましちゃって下さい！！」

「・・・チカ、下品な物言いは控えて下さい。」

溜息混じりに使い魔を奢めながら、それでもレンファ一機をサイトに入れ、トリガーに指を掛けるシユウ。

「ブラックホールクラスター・・・発射。」

静かに呴かれた言葉は、まるで死刑宣告。

胸部の装甲が音を立てて開いた。

封印を解かれた心臓部に、闇が収束する。

それは、光すら脱出を許されない、闇。

レンファのバイロットが、最期に見たのは何だつたのだろうか。闇に喰い尽くされ、存在の一欠片すら現世に残す事なく、彼の全ては喪われた。因果地平の彼方へと。

その光景を呆然と見つめていたザレスは呴いた。

「・・・バケモノ・・・か・・・？」

言葉の端々に滲むのは絶望。

話には聞いていた。その狂氣の力。

それが目の前に居る。

ここまで圧倒的なのか。

ザレスは歯噛みした。

絶望が、ゆっくりとザレスに、その血色の眼を向ける。

嫌な汗で湿った掌に、それでも意思を込めた。

ここで退く訳には。

それはシユテドニアス軍大佐としての意地なのか、ザレス＝クワイヤーとしての意地なのか。

ゴリアテはその意思に応え、蒼色のバケモノに対峙する。

「ありやま、まだやる気なんですかねーあの人。」

呆れた様に呟くチカに、何を思うのかシユウは告げた。

「チカ、指揮官機に通信を繋いで下さい。」

「はいはい、通信ですね・・・って、え、通信ですか、ご主人様！

？」

「聞こえませんでしたか？」

「い、いえ、通信ですね。繋ぎます。・・・でも、何でですか？」

「フフフ、勇敢な指揮官殿と、少しばかりお話をしたくなりましてね。」

「はあ・・・。」

主人の意図を測りかねるチカ。

それでも、命令通りにゴリアテに通信を繋ぐ。

「ご主人様、繋がりました。」

「ご苦労様です、チカ。・・・初めてまして、指揮官殿。私は、シユウ＝シラカワと申します。其方のお名前をお聞かせ頂けますか？」

突如入った通信に、ザレスは戸惑つた。

悪魔にしては、穏やかすぎる声に。

そして、相手が名乗った名前にも。

「・・・シユウ＝シラカワ・・・だと・・・クリストフではないのか？」

暫しの沈黙の後、返ってきた答え。

シユウは少し笑つた。

「・・・クリストフ・・・。懐かしい、名前ですね。もう、その名前の男は死にましたよ。」

「・・・ご主人様？」

チカが訝しげに、主人の言葉を聞いていた。

シユウは構わず続ける。

「それで、貴方のお名前は？」

「・・・ザレス。ザレス＝クワイヤー。シユテドニアス、陸軍大佐

だ。」

「ザレス＝クワイヤー大佐ですね。・・・覚えておきましょ。」

「・・・クリストフ・・・いや、シユウ＝シラカワ、何が目的だ。」「目的・・・ですか。そうですね、我が本懐を遂げる事・・・とでも申し上げておきましょうか。」

「・・・本懐・・・?」

「さて、それでは出会つたばかりで恐縮ですが・・・。」

そう言つうと、シユウはコンソールパネルに指を走らせた。

「お別れの時間です。」

グランゾンが、右手を掲げる。

空間が、ぐらりと歪んだ。

歪みの中から、一振りの巨大な剣が現れる。

身の丈程もある大剣を、軽々と片手で引き抜くグランゾン。

「チカ、ワームホールを開いて下せい。」

「いえっさー！」

「それでは、参ります。」

グランゾンが、大剣グランワームソードを構える。

応える様に、ゴリアテも臨戦態勢を整えた。

それを見届けて、シユウはグランゾンを加速させる。

「ワームホール、てんかーい！」

チカが、その羽根を広げて叫ぶ。

シユウが、笑つた。

「逃げても無駄ですよ。」

瞬間、グランゾンの姿が焼き消えた。

「何！？」

慌てて精霊レーダーの索敵範囲を広げるザレス。

しかし、反応は何処にも無い。

何処だ。

振り向いた瞬間だつた。

血色の、瞳が見えた。

次に見えたのは、闇の色。

せりに、次いで衝撃。

最後に見えたのは、ノイズだらけのモニターだつた。

「・・・ク、クワイイヤー大佐！」

最後に残つたレンファのパイロットが悲痛な声を上げる。

「・・・おや、まだ残つていらつしゃいましたか。」

ずしゃり、と大地を踏んで、グランゾンがレンファに向き直る。

「・・・つひ！」

パイロットが恐怖に負け、戦線を離脱する。

「あー、逃げた！」

チカが、馬鹿にしたような声を上げるが、シユウは取り合わない。

「構いませんよ。好きにさせましょう。」

「えー、逃がしちゃうんですかー？資金と経験値がもつたいないな

ー・・・。

また、言つちやいけない事を・・・。

「・・・資金は解りますが・・・経験値は何ですか？」

「あ、いや、何でもないですよ。何でも。ええ。」

慌てるチカに、シユウはそれ以上突っ込みはしなかった。

レンファが、レーダーの範囲から外れようとした瞬間だった。ズドン。

空気を震わせ、最後のレンファが大空に散った。

「おや？」

「ありや、落ちちゃいましたね。どうしたんだりつへ・エンジントラブルつて一訳でもなさそうですし……。」

疑問符を浮かべる二人の前に、鮮血の色を纏つた魔装機が、ゆっくりと降り立つた。

「あー！ あれは……もしかして……。」

チカの顔が青褪める。

追い討ちをかけるように、通信が入った。

「チカ、繋いで下さい。」

「は、はい……。」

渋々、という言葉が似合つ返事をしながら、チカは通信を繋げる。モニターに映つたのは、魔装機に負けない程、鮮やかな赤に彩られた美女だった。

「うふふ、ダメねえ、敵に背中を見せるなんて……あら。」

通信が繋がったのを確認して、美女は妖艶に微笑んだ。

「シユウ様、ご無事の帰還、おめでとう御座いますわ。お待ちしておりましたのよ。」

鮮血よりもなお赤い髪をかき上げて、うつとりと言葉を紡ぐ。

チカはシユウの陰に隠れるようにひつそりとモニターを見つめていた。

「……失礼ですが、どちら様でしょう？ 少々記憶が欠けておりまして……。」

「あら、そうですの？ ……そつ言えば、ルオゾールがそんな事を言つてたかしら……。」

赤い髪の女性は、少し思案顔をして、思いついた様に手を叩いた。

そうして、モニターに視線を移すと、恍惚とした表情でとんでも無い事を言い始める。

「・・・それにしても、あんまりですわ、シユウ様・・・。一人で過(?)した、あの甘い夜の事も・・・忘れてしまいましたの・・・?」

身体をくねらせ、色気たっぷりに囁く美女。

堪えかねてか、チカがシユウの陰から飛び出して抗議した。

「いい加減な事言わないで下さい、サフイーネ様!」

「あら、居たのチカ。」

子供の嘘がばれた時の様に、女性は小さく舌を出した。

「でも、アナタに他人の事言えて?・・・どうせ、貸してもいいお金、請求したんでしょ?」

その通り。

「・・・・。」

「どつちもどつちだとでも言いたそつに、シユウは小さく溜息を吐いた。

「改めて自己紹介させて頂きますわ。私、サフイーネと申します。」
言つて、ウインク一つ。

「・・・サフイーネ・・・紅蓮のサフイーネ・・・ですか?」

「思い出して頂けましたの!?」

「・・・いえ、思い出せたのは、その通り名だけです。」

「まあ・・・でも、気にしませんわ。思い出なんて、これから作つて行けば良いんですもの!」

「なーに言つてんだか・・・。」

小さくちいさく突つ込むチカ。

幸い、サフイーネには気付かれなかつたようだ。

「シユウ様、今王都は警備が厳しゅうござりますわ。私が居れば、多少お力になれるかと。」

「え、!?」

チカが、なんとも言えない声を上げる。

「・・・サフイーネ様・・・一緒に、いらっしゃるんですか・・・

？」

恐るおそる、訊ねるチカに、さも当然だと言いたげにサフィーネは応えた。

「当たり前じゃないの。 . . それとも、チカ、私について来て欲しいないとでも？」

「いいいいいい、いやいや、そそそそんな事ないですよーうれしーなー・・・。」

「そういうわけですわ、シユウ様。 よろしくお願ひ致します。」

再びウインク。

「やだなー、この人、怖いんだもん・・・」

チカの小さな溜息を他所に、闇色と血色の機兵は並んで歩み出したのだった。

力

「おーつほつほつほーほーら、仔猫ちゃん、靴をお舐め!!」

嬌声と共に振り下ろされた一撃が、レンファの胴体を両断する。

「うふふ、アナタを天国に連れて行つてア・ゲ・ル。」

続けて撃ち出されたレー・ザーが遠方にいた改良型グラフ・ドローンを撃墜した。

「・・・なんて言つか・・・相変わらずだなあ、サフィーネ様・・・」

鮮紅の魔装機、正しくは妖装機、ウイーゾルの暴れっぷりをグラソングのコクピットから眺めていたチカは、若干呆れ気味に呟いた。
「・・・余所見をしている暇はありませんよ、チカ。ワームスマッシュ・ヤー発射準備を。」

「あ、スミマセン!ワームスマッシュ・ヤーですね!!」

ゴリアテからの攻撃を、歪曲フィールドで弾きながらシュウはチカに指示を出す。

コソールを操作するチカを横目で確認しながら、グラソームソードを振るう。

グラソングの攻撃をかわす為に、一旦機体を引くゴリアテ。狙つたようなタイミングでチカが声を上げた。

「発射準備オーケーでっす!」

「・・・ワームスマッシュ・ヤー・・・発射。」

回避行動が終わつたばかりのゴリアテに、グラソングの心臓部から発生した歪が迫る。

なす術無く歪に飲み込まれたゴリアテは、次元と共に引き裂かれた。

「はー、王都に着くまで、あーゆうのがいつぱい出てくるんでしょうね。うつとーしーつたらないですよ。ホントにー。」

何度もシュウテドニアス軍の襲撃を退け、チカは溜息を吐いた。

「仕方ありませんよ、チカ。それに、私にとっては良いリハビリになるので・・・そう悲觀した物でもありません。」

「いやー、でも・・・あたしゃ、こうやつてご主人様が生き返つてくれて本当に嬉しいですよ。ご主人様が亡くなつたつて聞いた時は心臓が止まりましたよ！いえいえ、例えじゃなくて本当に、です！ご主人様が死んじやうと、その無意識であるアタクシも消えちゃいますからねー。」

精靈レーダーを確認しながら、チカは滔々と喋り続ける。
喋るか寝てるか食べてるか。チカの行動は主にその三つに限られるような気がする。本当にシュウのファミリアなのか、疑問の声が上がつたのは一度や二度ではない。

「もうすぐラングラン領内ですわね。・・・シュウテドニアスの連中、まだきつと襲つてきますわよ。」

「・・・チカ、レーダーに異常はありませんか？」

「はいはい、えーと・・・はいな、レーダー、異常ありますせん！レーダーに何の反応も無い事を確かめると、チカはその羽根で敬礼のようなポーズをとつて見せた。

「・・・そうですか。」

「どうしましたの、シュウ様？」

「・・・いえ、何か気配を感じるのですが・・・気の所為、という訳では無さそうですね。チカ、サフィーネ戦闘準備を。」

「え？え？・・・あ、ホントだ！ご主人様、敵です！所屬はシュウテドニアス軍！数は十四機！！」

レーダーに現れた反応をチカが報告する。

「・・・チカ、アナタ、レーダー手の意味無いじゃない・・・。」「違います！ご主人様の魔力が凄過ぎるんです！！ホント、亡くなる前より強くなつてるんじゃないですか！？」

サフィーネの厭味に、必死に自分の無力さを自身でフォローするチカ。ただ、シュウの魔力が並々ならぬのもまた、事実だった。

「シユウさま、お下がり下さい。この程度、私一人でも充分ですわ。」

「すい、と前へ出るウイーゾルに、しかしシユウは首を横に振った。

「いえ、私も戦いますよ、サフィーネ。まだまだリハビリ不足です
のでね。」

ゆっくりと戦闘態勢を整えたグラランゾンは、その血の眼を瞬かせた。

「ふむ、レンファにグラフ・ドローン＝レイ、ナグロット・・・そ
して・・・あれば・・・パーソナルトルーパー？いえ、アーマード
モジュールでしょうか・・・？しかし、何故ここに・・・？」

敵データを参照していたシユウが、驚きの声を上げた。

「あ、説明してませんでしたっけ。ここ最近なんですけどね、誰か
が強力な召喚魔法を使つたらしくって、地上の兵器が次々にラ・ギ
アスにやつてきてるんですよ！」

「お陰で、シユウテドニアスの連中や、ラングランのカーケス軍なん
かが強化されちゃつて・・・やり辛いつたらないんですよ、最近。

言葉とは裏腹に、少し楽しそうな口調なサフィーネ。

戦うのが楽しい。そんな感じだ。

いや、自分の力を試せるのが、と言つた方が良いのかも知れない。

「地上の・・・ではブルー・スウェアの皆さんもいらっしゃつてい
るかも知れないとですね・・・フフフ、楽しみですね・・・。」

「あれ、ご主人様、記憶戻つたんですか？」

シユウの咳きを、耳聴く聞きつけてチカが問う。

「・・・私は今・・・ブルー・スウェア、と言いましたか・・・そ
う、ですね。何となく思い出しました。ある時は敵、またある時は
味方・・・だつた気がします。・・・ただ、誰が居たかまでは思
い出せませんね・・・。」

知つている筈の事が、思い出せない苛立ち。そんな物を、少なから

ずシユウは感じていた。

「シユウ様、大丈夫ですわよ。そういう事は、時間が経てば自然に思い出せますわ。焦らないで下さいまし。」

サフィーネが、シユウを慮つてかそつと囁いた。

「まあまあ、なんにせよ、あんな連中、ザコですよザコ。ぶわーつとやつちやいましょう! ぶわーつと! …」

暗い雰囲気を嫌つてか、チカが一際明るい声を出す。シユウは、そんなサフィーネとチカが一際明るい声を出した。

「ええ、そうですね。ぶわーつと、とは言ひませんが…やつてしまいましょう。」

フレッド＝ショーカーは、大尉昇進後初の出陣に逸つていた。

小隊を任されての初任務。その隊には地上の兵器も含まれており、偵察とはいえ重要性の高さを窺わせた。

フレッドの腕には真新しい階級証が輝いている。

この任務で成果を挙げれば、この階級証の星がまた増える事もあるだろう。

指示された偵察地点に着いたフレッドは、見た事が無い兵器一機が並んでいるのを確認した。

「…何だ、アレは?」

「…さあ…。」

「カーカス軍の新型魔装機か? データを照合してみる。」

部下に、機体の確認作業をさせる。

「…データ照合。…該当機体、有りません。」

「…地上の兵器か? …まあいい。相手は高が一体だ。無傷で手に入れろ!」

新しい地上の兵器だとすれば、無傷で手に入れれば相当な手柄になる筈だ。

階級証の星を一気に増やす事も、夢では無い。

「・・・了解致しました。」

余り乗り気でなさそうな部下の言葉など、彼には聞こえていなかつた。

もつともつと、権力を。
力を。

フレッド＝ショーカーの心は、権力への、力への執着に囚われ始めていた。

左胸に感じるのは、痛みではなく熱。

熱い。

ただ、そう感じた。

熱い。あつい。アツイ。

見開かれた瞳に映るのは、艶やかな黒髪。

これは・・・誰だ。

左胸から、熱が流れ出す。

それは、生命。

ゆっくりと、命が、流れて行く。

嫌だ。嫌だ。嫌だ。

否定した。全てを、否定した。

この身体の、なんと無力な事か。

力が欲しい。

全てを否定しきるだけの、力が。

ここから逃げ出す為の、力が。

誰でも良い。

誰か。

それは、生命の悲鳴。

闇が、目を覚ました。

ゆっくりと、差し出される手。

闇の手招き。

闇の囁き。

チカラヲ、ヤロウ。

全テヲ否定スル、チカラヲ。

闇が笑う。

サア、選べ。

闇に呑まれ、死ぬか。

闇に包まれ、生きるか。

差し出された手に縋つた少年を、一体誰が責められるといつのか。

彼はただ、生きたかつただけなのだから。

「シユウ様、どうされましたの？」

怪訝そうなサフィーネの言葉で、シユウは我に返った。

「やっぱり、お疲れなのではありませんか？ここは任せて頂いても・
・・。」

「・・・いいえ、大丈夫ですよサフィーネ。心配には及びません。」

軽い頭痛。

一瞬目を伏せたシユウの脳裏に、様々な画像が飛び交った。

先刻まで見ていた記憶のピース。

しかし、それらは完成図の見えないただの欠片。

記憶のパズルは遅々として進まない。

「お、ご主人様、敵さん攻めてきましたよ！戦闘開始つてヤツですねー！くー！チカちゃんまたまた活躍しちゃいますよー！」

チカが、グラランゾンの中で忙しく飛び回る。

「各計器、異常無し！歪曲フィールド、展開準備おつけー！ブラッシュホールエンジン、対消滅エンジン共に異常なつしーご主人様、いつでもいけてますよーーー！」

いつもはその騒がしさに苦言の一つも呈するシユウだが、今は何故か、チカの騒がしさが有難かつた。

「・・・それにも・・・」

サフィー・ネが目の前の敵を見据えながら呟く。

「私達の事、知らないのかしら？あの程度の戦力で、真正面から挑んで来るなんて・・・命知らずも良い所ですわね。」

彼女の言葉に含まれている呆れの色。

隊の展開の仕方から見て、あまり場数を踏んでいないのだろう。出会ってしまった事。ただそれだけが、彼等の不幸だつた。

フレッドは代々軍人の家系に産まれた。

曾祖父と祖父が将軍だつたらしい。

父は婿養子だつた。その父は、戦場で死んだ。

殉職で二階級特進。准佐の階級証が虚しく、もう袖を通す者の無い

軍服に、輝いていた。

ショーカー家の面汚しが。

葬儀の場で、祖父が呟いた言葉を、フレッドは忘れられなかつた。

その後、無言の圧力の中、彼は育てられた。

階級証の星を、一つでも多く。

理由など、当時の少年に分かる筈もなかつた。

偉くなりなさい。

母親の言葉で、覚えているのはそれくらいだつた。

少年に植え付けられた歪んだ思想は、やがて成長と共に権力への執着へと変わり始める。

執着は、妄執へと。

青年になつた彼は、軍に入った。

順調に出世して、次第に権力が自分の物になって行く。肩書きが持つ力を、軍で目の当たりにした時、青年の中の何かが壊れた。

権力を。権力を。力を。力を。チカラを。壊れたそれは、或いはブレーキと呼ばれる物。坂道を転がり落ちる石の様に、彼は突き進む。例え、その先に待つているのが破滅としても。彼には、もう止める術など無いのだから。

隊が壊滅しかけても、彼は止まれなかつた。

「た、大尉！ 戦力が違います・・・撤退しましょう！・！」

部下の一人が、悲痛な声を上げる。

フレッドには、そんな言葉は届いていない。

ただ、目の前にある二つの力に、魅入られていた。

「・・・何だ、あの力は・・・まるで噂に聞く、魔装機神の様だ・・

・・」

フレッドは呟いた。

魔装機神。

ラングランが産み出した、四つの強大な力。

それに勝るとも劣らぬ力が、目の前に、在る。

「大尉！ 大尉！ ・・・これ以上は無茶です、撤退しましょう！・！」

部下が、再び悲痛な声を上げる。

「うるさい！ 司令官は私だ！・・・あの力・・・手に入れてみたい・・・。」

「そんな！ 無茶です、大尉！！」

「煩い、五月蠅い！さつさと行け！…」これ以上言つのであれば、敵前逃亡とみなし、軍法会議にかける…！」

それは、死ね、と言つ命令。

その言葉を、部下達はどんな想いで聞いたのだろうか。

フレッドは、壊れた。人間として。

もう、そこに居るのはフレッド＝ショーカーでは無く、ただ力に取り憑かれた亡靈だった。

「・・・愚かですね。いつの世も、人と云う者は・・・」
不意に、主人が呟いた言葉はどこか寂しそうだった。

「どうしたんですか、ご主人様？」

「・・・いいえ、なんでもありません。」

モニターの端では、ウイーゾルが一機、また一機と敵兵を屠つて行くのが見えた。

十四あつた敵影は、もう片手で数える程しか残っていない。

「・・・サフィーネ、少し下がりなさい。」

「はい、シユウ様。あれをなさるのですね。」

命令の意図を察し、ウイーゾルを後退させるサフィーネ。

「チカ、グラビトンカノン発射準備を。」

「いえつさー！」

絶え間なく降り注ぐ砲撃を、歪曲フィールドで防ぎながら、グランゾンは徐々に前進して行く。

「グラビトンカノン、チャージ完了！ぶわーっとぶちかまして下さいご主人様！！」

「チカ、下品な物言ひは控えなさいと言つたでしょう。」

敵陣のど真ん中で、グランゾンは立ち止まつた。

なおも降り注ぐ砲撃を物ともせず、シユウは静かにトリガーを引いた。

「グラビトンカノン…・・・発射。」

闇が、広がる。

それは、質量が持つ暴力。

亡靈達への、せめてもの鎮魂歌。

歌い手は、重力。

潰れて行く機体の中で、フレッドは恐怖していた。

眼前に在るのは、力ではなく、死。

「な・・・何だ、まるで歯が立たないといふのか！？」

コンロールクリスタルに意思を込める。

死にたくない。

ただ、その想いだけを、込める。

「動け・・・この、動けえ！！」

重力は、なおも彼等を押し潰そうと、暴れる。

機体は、びくりとも動かない。

「・・・グランゾンに向かって来た。その勇気だけは、賞賛して差し上げましょう。・・・ただ、力を求める行為は・・・時として酷く危険な行為なのですよ・・・。」

「グ・・・グランゾン・・・？」

聞き覚えのある名前に、フレッドの血の気が引いた。

「で、では、貴様は・・・背教者クリストフ！－」

やつと、自分の過ちに気付いたフレッド。

しかし、遅すぎた。全てが。

「・・・せめて、貴方々の魂が、安らかで在ります様に。」

冷たく囁かれた死の宣告。

重力が、彼等の悲鳴すら喰らい尽くし、闇に帰る。

墓標代わりとなつた拉げた機体の群れを、シユウは見つめる。

「ご主人様？」

チカが、主人の異変を感じて問い合わせた。

「・・・力を求めるのは、罪なのでしょうか？」

「・・・『主人様・・・。』

シユウにしては、珍しい疑問。

でも、きっと答えは彼の中で出でているのだろう。

証拠に、彼の無意識ははつきりとした声で答えた。

「力を求める事 자체は、きっと本能的なモノんですよ。動物、植物でさえ、上を上を目指しますから。だから、罪じゃありません。きっと。罪になるのだとしたら、それを求める動機なんじやないでしょうか。うーん、ゴメンナサイ言い出してはみたものの、難しいですねー。あははははー、これじゃ『主人様のファミリア失格かなー?』

最後は明るく笑つて見せる。

シユウもつられて少し笑つた。

「・・・そう、ですね。フフフ、チカ、貴女は私のファミリアですよ。」

「ふふ、チカが眞面目な事言つなんて、珍しいわねえ。明日は雪かしら?」

サファイーも、笑う。

混沌の信徒達が、穏やかに笑い合つ。

見る者から見れば、何とも、不思議な光景。だが、知らぬ者から見れば、ごく自然な光景。

そんな光景の中で、シユウは小さくちいさく呟いた。

「・・・十を数えたばかりの少年が、生きる為に力を求めた事は、罪なのでしょうか・・・。」

自身すら、その言葉を発した事に気付いてはいなかつた。

最初はまたブラックホールエンジンの暴走かと思った。

激しい振動からきた眩暈を、リン＝マオは軽く頭を振つて追い払う。新型ヒュックバインの起動テストの最中に、それは起こつた。バニシングトルーパーと不名誉な渾名を戴いたこの凶鳥も、改良を重ねるうちに、主は選ぶものの、なんとか戦場に出せるだけの安定性を備えてきた。

そして、最終起動テストの為、リン自ら乗り込んだ。

それから……。

リンは、溜息を吐いてヒュックバインの計器に異常がないか確かめる。

モニターの電源を入れて、リンは我が目を疑つた。

「……なん……だ、これは……？」

月のマオ社に居たはずだ。

しかし、モニターに映し出された風景は、縁が広がる大地。それだけならば、沈着冷静なリンの事、それほど驚かなかつたかもしれない。

「……地平線が……無い……？」

彼女を驚かせたのは、その大地の形状。

本来、地平線と呼ばれるべき場所は天に向かつて湾曲し、しかし丁度目線の高さで霞がかつて空へと溶け込んでいる。

「……ヒュックバイン自体には、異常なし……か。」
さて、どうしたものか。

思案する彼女の耳に、聞き慣れた声の通信が飛び込んできた。

「あつれー、そこに居るの、もしかしてリンちゃん！？」

世界で唯一、自分を“ちゃん付け”で呼ぶ人物。

「……腐れ縁も、ここまで来るのはな……。」

呆れたように呴いて、リンはその人物、イルムガルト＝カザハラの

姿を探した。

「リンちゃん、ここにいる。」

呼ばれて振り返ると、見慣れた機体が目に入つてくる。

亡靈の名を冠した、漆黒の機体。

「……なんでゲシュペNSTなんだ、イルム？」

「いや、グルンガストは親父が改造するつつてステラ研に持つてかれちまつてや。しかたなく、ここに乗つてたら、気が付いたり」の世界さ。」

「……ふむ……。」

リンは、もう一度周囲を見渡す。

「イルム、ここは何処だと思つ？」

真剣なリンの言葉に、イルムはいつも通り、少しおどけた口調で応える。

「さて……ね。少なくとも、用でも地球でも無いつて事くらいしか分かん無いな。ま、俺はリンちゃんと一緒に居れば、何処でも天国だけどね。」

「……その言葉を、何人の女に言つたかは知らんが……ふざけている場合では無さそうだ。」

本気なんだけどな。そう思いながらも、リンの言葉から芳しくない状況を察知して、イルムも身構えた。

「……敵か？」

「……分からん、所属不明。データ該当機体無し。機影多数。・・・

・囮またたな。」

「さて、どーしたモンでしうね……。」

流石のイルムも、溜息を吐いた。それでも、口調は明るい。リンと二人だからだろ？。

「ま、ちょっとややつとの相手に、俺ら無敵コンビが負ける筈ないけどね。」

「コンビを組んだ覚えは無い。」

「リンちゃん、相変わらず冷たいな。・・・ま、そこが可愛いん

だけど。」

「馬鹿言つてないで、さつさと戦闘体制を整えろ。」

言葉では冷たくあしらいながらも、リンは自分の中の不安が薄れていくのを感じていた。

・・・腐れ縁、か。

それも良いかも知れない。

リンは少し笑つた。女性らしさに満ちた、美しい笑顔だった。

こうして、亡靈と凶鳥は導かれ、精靈の大地へと降り立つた。

地球の内部に存在する世界、ラ・ギアス。

彼等がそれを知るのはもう少し後の事だった。

「「」ア、しゅじんさまー、王都まで色々なコースありますけど……どうやつて向かいます？」

ナビゲーターのチェックをしていたチカが口を開く。

「このまま、ヌエット海を突っ切るのが一番の近道ですわね。」

後方から追走してくるウイーゾルから通信が入る。

「では、ヌエット海を横断して王都へ向かいましょ。」

「了解でっす！」

羽根で敬礼紛いのポーズを取り、チカはナビゲーターをいじり始めた。

「そういえば、このコースって、カーカス将軍のヌエット海横断作戦と同じコースですね。」

ナビゲートされたコースを見て、チカが呟いた。

「カーカス……ああ、ラングランのバルチザンを指揮している人物ですね。」

カーカス＝ザン＝ヴァルハレビア。

名前だけは、シユウのデータベースに存在している。

しかし、顔がどうにも浮かんでは来ない。

「うーん、シユウ様、それは少し古い情報ですわね。今では立派な正規軍になつてますわよ。」

「私は、そのカーカスとは……会つた事があるのでしちうか？」

「ええと……いえ、一度も無い筈ですよ。」

チカは、シユウがラングランにいる間は常に一緒に居た。そのチカが言うのだから、会つた事は無いのだろう。

「大体、あのカーカス将軍つて、戦争が始まるまでは……チカの長い話が今まさに始まるつとした瞬間。

ドオーンー！

突然の爆発音。

軽い振動。

「きやつ！！」

サフィー・ネが小さな悲鳴を上げる。

「なななな、なんだなんだ！？」

チカはグラグランゾンの中で右往左往。

シユウは冷静に、周囲の状況を探っていた。

「対空ミサイル・・・気配が無い所を見ると、ブービートラップですね。先刻言っていたカーラクスが仕掛けている物でしょう。被害はどうです？」

チカが手早くコンソールを叩く。

「えっと、大した事ありません。良かつたー。」

殆ど被害が無いのを確認して、チカは安堵の息を吐いた。

「・・・チカ、安心するのは早いですよ。トラップの中に信号弾が混じっていた気がします。」

カーラクスが残したブービートラップならば、何の為に設置したのか。答えは簡単だ。

後方からの奇襲を避ける為。或いは挾撃になるのを避ける為。ならば、対空ミサイルと合わせて信号弾が入っているのは当たり前のこと。

「・・・どうやら、シユテドニアスの偵察部隊に見つかったようですね。」

レーダーが反応を示す前に、呟くシユウ。

サフィー・ネは、ウイーゾルのレーダー索敵範囲を広げる。

レーダーの端に、シユテドニアス軍の反応を見つけてサフィー・ネは溜息を吐いた。

「あらあら、全く、うつとーしい連中ですわね。」

それでも、彼女はすぐに笑う。

反応数が少なすぎる。

レーダーが捉えた数を、サフィーネは哀れそうに見つめたのだった。

ヌエット海の海上で謎の信号をキャッチして、ディック＝シャイエルは隊を向けた。

ラングランのカーラス将軍が、シュテドニアスに攻め込んで来たコース。

信号が発信された位置を確認して、ディックは思い出した。

この戦争が始まってから、突如として頭角を現した男。カーラス＝ザン＝ヴァルハレビア。

今のシュテドニアスにとって、一番の敵と言つても良い。

しかし、その男が仕掛けたであろう信号弾に、自身の軍がかかる筈は無いだろう。

では、一体何が。

その答えを、彼はすぐ知る事になる。

「シャ・・・シャイエール中尉！！」

戻候に出ていた兵士が、血相を変えて戻つて來た。

「どうした、何があった？」

「グ・・・グランゾンです！！」

部下が告げた名前に、ディックは驚きを隠せなかつた。

「何つ！？グランゾンだと！？」

自身から、血の気が引いて行くのを感じる。

ディックは一度だけ、グランゾンと合間見えた事がある。

二年前の事だろうか。

自分はまだ指揮する側ではなく、される側だった。

当時のシュテドニアスは、まだ魔装機を開発し始めたばかりで、機体のスペックは左程高くは無かつた。

それでも、今率いている隊の何倍もの戦力を持つて、挑んだ。

結果隊は全滅。

既に損傷が激しく、行動不可能な機体にまで振るわれる、理不尽なまでの力。

その時に味わった恐怖は、戦場、と言つ程生易しい物では無かつた。地獄。

そう呼べば、相応しいだろうか。

結局、その戦闘で生還したのは彼一人だけだった。

「最寄の基地に、急いで増援を要請しろ！グランゾン相手にこの戦力では・・・。」

ディックは声を張り上げる。

果たして、増援が来るまで隊が持つだろうか。

当時に比べて、魔装機のスペックは飛躍的に上昇した。地上の兵器も、ある。

それでも、あの強大な力に対抗するには数が足りない。地獄から生還して一年、自分自身の能力も上がった。

上がったからこそ解る、戦力の違い。

慎重に、彼は隊を展開させた。

部下を無駄死にさせない様に。

それでも、戦わずに逃げる事が叶わるのは、軍人の性なのだろうか。

せめて、この美しい海が、死の海に化けませんように。

美しい海上に浮かぶ、一機の不気味な影を見て、ディックはそう祈らずにいられなかつた。

急に、外が慌しくなったのをイルムは感じた。
エマージョンシー「ールだらうか。

その後、シユテドニアスなる国の軍に囲まれ、半ば脅される様に連行された。

そして、簡単に事情を説明されて、協力を要請された。

喰つてかかるリンを宥め、考える時間をくれ、とだけ軍のお偉いさんに告げ、至現在。

「おやおや、何かあつたのかね？」

相変わらず、能天氣そうな声を上げる相手を、リンは軽蔑を持つて見つめた。

宛がわれた部屋の一一番死角が少ない場所に彼女は陣取つていて。正反対とでも言つように、ベッドに大の字で寝転がるイルム。

「・・・貴様は氣楽そうで良いな、イルムガルト＝カザハラ。」

「いやーん、リンちゃんこわーい。」

リンが自分をフルネームで呼ぶ時は、大抵機嫌が悪い時だ。

それでも、イルムはおどけて見せる。

彼女が不安がつているのが、解るから。

クール・アズ・キュークを地で行くような彼女だが、時折ガラスの様な脆さを見せる。

その脆さが、愛しい。

言えば全力で否定するだらうが。

本人は必死で隠しているのだらう。弱い自分を。

だから、イルムもそれを無理に暴こうとはしない。

ただ支えてやるだけだ。自分のやり方で。

するいのは判つている。

それでも、イルムは自分を偽る。リンと同じ様に。打算と計算で生きてきた冷徹な自分を、隠す。

それはまるで道化師。

それでも良い。彼女が、リンが、笑ってくれるなら。
お気に入りの曲を口笛で吹きながら、イルムは考えていた。
機体を取り返して、尚且つ馬鹿馬鹿しい戦争に加担しなくて済む方法。

何より、地上に戻る方法。

思考を巡らすイルムの耳に、切羽詰まつた足音が聞こえてきた。
チャンスかもな。

イルムは不敵に口元を歪めた。

「ありやりや、敵さん、増援呼んだみたいですよご主人様。
通信を傍受したチカが、面倒臭そうに言い放つ。

「・・・余計な戦闘をする羽目になつてしましましたね。」

呟くシユウの脳裏に、一つの考えが横切る。

あれは、ラングランの信号弾だった筈だ。

ならばシユテドニアスが察知して、当のラングランが察知しない訳
が無い。

考えを裏付ける様に、シユテドニアスとは別方向から魔力の揺らぎ
を感じた。

数は多く無なさそだが、面倒が増えるのは確かだ。

「おそらく、ラングランからも来ますよ。」

「どうから何が来ようが、シユウ様は私がお守りいたしますわ！
一人、張り切るのはサフィーネばかりであった。

てつくり、シユテドニアス軍がトラップに引っかかった物とばかり
思っていた。

少数の部隊で来たのは間違いだったかも知れない。

「・・・まさか・・・グランゾンだと・・・？」

ラテル＝ザン＝アクロスは苦々しく咳いた。

グランゾンと対峙する形で、シュテドニアス軍もいる。

「アクロス少佐、我々はどちらを相手にすれば！？」

困惑しているのは部下達も同様。

「・・・仕方あるまい・・・危険だが、双方を相手にする！クリストフは危険過ぎる・・・それに紅蓮のサフィーネも一緒とあつては・・・。」

苦虫を噛み潰した様な顔で、ラテルは命令を下した。

「・・・今、余りラングランと事を構えたくは無いのですが。」「やれやれ、とでも言いたそうにシュウは溜息を吐いた。

「え、何ですか、ご主人様？」

「そうですわよ、あの程度の戦力、やつてしまえば良いんですね。」「チカ、サフィーネ、気持ちは分かりますが・・・混乱、と言いつのは戦力の均衡が取れてこそ、長続きするものです。今はシュテドニアスに天秤が傾いている状態ですから・・・。」

「じゃあ、説得して、隊を退いてもらつたらどうですか？」

チカの言葉に、シュウは軽く苦笑した。

「そう、ですね。上手くいけば良いのですが・・・。」

「では、私はシュテドニアス軍をしばし足止めしますわ。その間に、シュウ様はラングランの指揮官にコンタクトを取つて下さいませ。」

言うが早いが、サフィーネはシュテドニアス軍の真つ只中に単身突つ込んで行く。

元来、好戦的な性格なのだ。

「お一つほつほつほ！紅蓮のサフィーネ、参りますわよー。」「真紅の機体が、群青の海に美しく舞つた。

突然の通信に、ラテルは少々面食らつたようだつた。

「ラングラン、カーキス軍、ラテル＝ザン＝アクロス少佐をお見受けします。」

穏やかな声で語りかけてくるこの青年は、本当にあのクリストフなのか。

「……如何にも。貴様はクリストフ＝ゼオ＝ヴォルクルスだな……？」

愚問だ、とラテルは感じた。

それでも、問わずにはいられなかつた。余りにも、イメージが重ならない。

魔神、と呼ばれたあの男と。

「……クリストフ……ですか。」

懐かしむような、グランゾンのパイロットの声。

「残念ながら、私はクリストフではありませんよ。シユウ。シユウ

＝シラカワと申します。」

「シユウ……シラカワ……？」

シラカワと言う名前に、覚えがある気がした。

ただ、地上人の魔装機操者の中にはそんな名前は無かつた筈だ。何処で。

思考は、シユウと名乗る青年の声で遮られた。

「失礼ですが、隊を退いて頂けますか？今はラングランと事を構えるつもりはありますん。」

やはり穏やかな声。

記憶にあるクリストフとは……。

重ならない。そう思つて、ラテルは気付いた。重なるクリストフを、知つてゐる、と。

それは、十年前。

彼がまだ、クリストフ＝マクソードであつた頃。

「クリストフ……殿下……？」

ラテルは思わず呟く。

「……さあ、何方の事でしょう？」

モニターの向こうで青年は、少し笑っているようだった。

「ともかく、今は無益な争いをするつもりはありません。隊を退いて頂けますね、アクロス少佐？」

穏やかだが、底に得体の知れない物を潜ませた声。

「・・・分かった・・・。今回は、隊を退こう。」

「感謝しますよ、ラテル。」

モニター越しに微笑む青年。

やはり、彼はクリストフ＝ゼオ＝ヴォルクルスでは無く、クリストフ＝グラン＝マクソードであるように思えた。

「・・・クリストフ殿下、貴方は・・・。」

去り際、ラテルは青年に呼びかけた。

青年は、ただ黙つて、少し寂しそうに、笑つただけだった。

「さて、説得は上手くこきましたね。」

「ラングラン軍が隊を退いたのを見届けて、シュウは呟いた。

「なーんか、ああ言う神妙な空気、苦手なんだよなー。」

やつとこ喋れる、とばかりにチカがぶはーっと息を吐いた。

「貴女が喋るとややこしくなる一方ですので、私はその方が有難いですね。」

「じ主様・・・ヒドイ・・・。」

「さあ、サファイーネの援護に向かいましょう。そろそろシュウテー・アスの援軍が来ないとも限りません。」

「・・・はあーい。」

拗ねるチ力を完璧に無視して、シュウはグランゾンのバー・アペダルを踏み込んだ。

「・・・おい、イルム・・・どうつづもりだ?」

傍受されないよう、接触通信でリンはイルムに呼びかけた。

「ん? 何が、リンちゃん?」

あくまでお気楽な口調のイルムに、リンは溜息を吐く。

「・・・何のつもりがあつて、こんな奴等に手を貸す!?」

「まーまー、リンちゃん、落ち着けって。」

露骨な舌打ちが聞こえて、イルムはちょっと苦笑した。

「・・・グランゾンが、出てきたらしい。」

「なん・・・だと・・・?」

「あの状況で、アイツが生きてたとは思い辛いが・・・グランゾンを操縦できるのはアイツしかいない。それに・・・。」

「・・・それに?」

「ゲシュペNSTとヒュックベイン、取り返せたろ?」

してやつたり感の漂うイルムの言葉に、今度はリンが苦笑する番だつた。

「フン、そういう事か。」

「ああ、そー ゆう事だ。あわよくば、」このままトンズラいへせ。」

「全く・・・お前らしい。」

「それ、褒め言葉つて事で良いー?」

「勝手に解釈しろ。」

「了解!」

「これ以上は、怪しまれる心配がある。離れるぞ。」

「ほいよ、んじやまた。」

亡靈と凶鳥が距離を取る。

向かうべき戦場は目の前だつた。

ディックの駆る魔装機、ギルドーラに通信が入る。

「シャイエール中尉、無事か! ? 」「かうはゴドル=ノーランドだ。」

「これは、ノーランド少佐! 」

ディックの声が喜色ばんだ。

「少佐に来て頂けるとは・・・ おお、それに新しい地上の兵器ですな、それは。」

ディックがヒュックベインとゲシュペンストを見て感嘆の声を上げる。

「うむ、この度、協力して貰う事になった地上人の方だ。グランゾンの事を話すと急に乗り気になられてな。・・・ 何か、因縁がありの様だ。」

ゴドルは通信チャンネルの関係でか、やけに謙つた言葉遣いでリンとイルムの事を紹介し始める。

そんな会話を他所に、リンはグランゾンの姿を見据えていた。

「・・・ イルム、見えたか? 」

「ああ、バツチリ。間違い無く、グランゾンだな、ありや。」

「どう思う？」

「あの状況で、生き伸びた可能性は低いと思うんだけどね。実際、目の前に居られちゃうと、なんともコメントし難いな。」

「ともかく、本当にシュウ＝シラカワなのか、確認するのが先だな。」

「だな。んじゃま、久々ですが、俺ら“ラブラブ無敵コンビ”的実力、お見せしますか。」

「後ろから撃落とされたくなれば、今すぐコンビ名を変更するんだな。」

「いやーん、リンちゃんつてば、相変わらず照れ屋さんなんだからー。」

「ほざけ！」

二人は同時にヌエットの海を駆けた。

「あの地上人達は、アテになるのですか？」

「機がある程度遠ざかってから、ディックはゴドルのギルドーラに接触通信を入れた。

「・・・分からん。が、今はあの力に頼る他あるまい。」

吐き捨てるように言い放ったゴドルの言葉は、何処か忌々しげな空気を纏っている。

昔程ではないが、ラ・ギアスの人間は地上人を軽蔑している節がある。

科学技術に傾倒し過ぎて、精神的に未熟なまま強大な力を振るう野蛮人。

そんな認識が未だに大半を占める。

数年前にラングラン王国が、魔装機計画の一環として地上人の召喚を公に始めてからは多少その認識も薄らいだが、それ以前は酷いものだった。

時折、何かの事故に巻き込まれた地上人がラ・ギアスに偶然迷い込

んでしまう事もあつた。

彼等に待つていたのは、差別。

そんな環境からか、地上人とラ・ギアス人のハーフというのは中々誕生しなかつたが、極稀に存在する例もあつた。

魔力と精神力が高いラ・ギアス人、プラーナと力が強い地上人。そのハーフである子供は、全てにおいて極めて高い能力を誇る。ラ・ギアスの王族の血筋を受ければ、なおのこと。

ただ、産まれた子供が受けれる差別は、両親の比ではなかつたそうだが・・・。

「ふえーくしょい！」

「・・・チカ、風邪ですか？」

「ファミリアでも、風邪つて引くんですかねえ・・・。」

「さて、前例が無いので分かりませんね。それより・・・あのパーソナルトルーパー、見覚えがある気がします。」

シユウがゲシユペNSTとヒュッケバインを指して呟く。

「あらま、地上でのお知り合いですか？仲間になつてもらえませんかねえ？」

「どうでしょう・・・お話してみない事には、なんとも言いかねますね。」

そう言いながら、グランゾンは一機との距離を詰める。

「サファイーネ、そちらは大丈夫ですか？」

「ええ、シユウ様！ご心配には及びませんわ。こちらは私にお任せ下さいませ。」

サファイーネの言つ通り、他の魔装機はウイーゾル一機でも充分そうだった。

「・・・では、お言葉に甘えて・・・そちらはお任せします。」

「リンちゃん、ちよいと下がつてもらえるかい？」
「どうするつもりだ、イルム・・・。」

「なーに、ちょいとあちらさんとコントクト取るだけぞ!」

言つが早いが、イルムはgeschützを加速させた。

「よひ、グランゾンさんー中にいるのはショウ=シラカワ博士かい?」

威嚇射撃をしながら、イルムはグランゾンに通信を入れる。

「・・・おや・・・私をご存知なのですね。」

返つて来た静かな声は、紛れも無く、ショウ=シラカワの物だった。

「イルムガルト=カザハラ。階級は中尉。アンタの死に際も看取つた筈だけどな!」

ガチャリ、とグランゾンの頭部に銃口を向ける。

返答までに、少し間があった。

「・・・ああ、カザハラ中尉でしたか。お久しぶりですね。」

「ああ、久しぶりだ。まさか生きてたとはな。・・・んで、こんな所で何してんだ?」

「それは、こちらの台詞ですね。地上人の貴方が、こんな所で何をしているのです?」

「どつかの誰かに勝手に呼び出されたらしくてね。お陰でしがない傭兵生活になりそうだよ、全く。」

「おやおや、それは災難でしたね・・・。」

通信機を通してだが、彼の声は微かに笑つてゐる様に聞こえた。

「・・・もし、よろしければ、地上に帰して差し上げましょうか?」

余りにも唐突な提案に、イルムは一瞬耳を疑つた。

「はい?」

「地上に帰して差し上げても良い、と言つてゐるのですよ。イルム

ガルト=カザハラ中尉。」

「・・・どうも、話が旨すぎるな。」

イルムの声が鋭くなる。

「信用して頂けないのですか?」

「言い話にや裏があるってのは、昔からのお決まり事だからね。」

「・・・では、こつしましよう。貴方々の力を、しばらくお借りし

ます。その見返りとして、事が済んだら地上に帰して差し上げる。これで如何です?」

「なるほどね・・・んで、アンタは俺達の力を借りて何しようつてんだい?」

「そうですね・・・完全なる自由を得る・・・ヒドも申しておきましょうか。」

「イマイチ、ピンとこねえな・・・。リンちゃん、どうゆうの?」

後方で待機しているリンに意見を求める。

「・・・信用しかねるな。」

「おや、確かにそちらはリン=マオ社長ですか。お久しぶりですね。」

「ああ、よもやまた会う事になろうとはな。」

リンの言葉は警戒心に満ちていた。敵として対峙していた時間が長いのだろうか。そんな事をシユウは考えていた。

「・・・ではお一人にお約束します。貴方々の不利になるような事は、一切強制いたしません。いつでも、断つて頂いて結構です。・・・私は約束を破つた事はありませんよ。」

「フン・・・確かに、な。」

「それに、カザハラ中尉、貴方は最初から、この下らない侵略戦争に加担する気など無かつたのでしょうか?」

「ありやま、ご明察。」

「・・・良いだろう。イルム、シユウに協力しよう。」

「オーケー。リンちゃんとなれば何処へでも!」

イルムはリンに向かつてウインクして見せた。
勿論、スルーされたが。

「つて、事でゴドルさん悪いね。俺等、アンタ達の敵になるわ!脅されて戦うのは、性に合わなくてね!」

言つて、グラソゾンの頭部に向けていた銃口を先刻まで味方だった者達に向ける。

ディックは苛立たしげに叫んだ。

「やはり、地上人などアテになりません!」

「・・・そのよしだな・・・。
呟く、トドルの言葉は、何とも苦々しかった。

「さて、シユウ＝シラカワ。今は貴様と行動を共にするつもりだが・

・・もし、以前の様な事があれば、その時は・・・。」

リンの棘を含む言葉に、しかし、シユウは首を傾げてみせる。

「以前の？」

「あの時の事だよ、シラカワ博士。アンタが死んだ筈の時の事さ。」

「ああ、済みません。言い忘れていましたが、私は蘇った際に記憶の大部分を失つておりまして。」

「ほう・・・？」イルムがぴくりと片方の眉毛を吊り上げた。

「蘇った、と言つ事は・・・やはりお前は一度死んでいるのだな、シユウ？」

確かめる様に、リンが問う。

「ええ、確かに一度命を失いました。以前の私は・・・。」

言いかけて、シユウは軽くかぶりを振った。

「・・・いえ、やめておきましょう。今の私を信用して頂くしかな
いですね。」

「まあ、こっちも・・・アチラさん裏切っちゃった以上、アンタに
くつついて行くつきやないんだけねえ。」

イルムは悪気も無く言い放つ。最初から、こうするつもりだったの
だから当たり前だが。

その時、残りの敵を掃除し終わつたサフィーネが、ウイーゾルから
軽やかに降り立つた。

「お！美人！！」

すかさず喰い付くイルム。間髪入れず、その足を思いつきり踏みつ
けるリン。

「いつてえ！－リンちゃん痛い、痛い！－！」

「フン！」

「あら、先程仲間になつて頂いた方達ですわね。私、サフィーネと

申しますわ。シユウ様の忠実な僕ですの。」

言つて、ウインク一つ。イルムは、さつとサフイーネの横に移ると、さりげなく肩に手をまわす。

「俺はイルムガルト＝カザハラ。イルムで良いぜ。君みたいな美人と知り合いになれるなんて……この世界に来てよかつたよ。」「まあ、お上手ですね。ウフフ、イルムさん……好い男ねえ……。」

満更でもなさそうなサフイーネ。

「……でも、良いのかしら。彼女、行つちやつたわよ?」リンを指して言うサフイーネに、慌てるイルム。

「あ、ちょ、リンちゃん! 愛してるのは君だけだつて……!」「……どうだか……。」

その様子をちょっと離れて見ていたシユウは、微かに笑っていた。

「フフ、一気に賑やかになりましたね、チカ。」

「ですねー。ああ、アタシの陰、薄くならないといいなー。ほら、ただでさえアタクシって陰薄いじゃないですか。物静かな性格なモンですからねー。」主人様のファミリアって感じでございましょ? シュウ、ノーノーメント&ノーリアクション。

「ご主人様……せめて突つ込みを……。」

「おや、突つ込まれる内容だと自覚していたのですね。安心しました。」

「……。」

常世の旅路を引き返してから、主人はよく笑うようになった。変わつた、と言おうとしてチカは気付く。変わつてなどいない、と。

「……ご主人様、戻りましたね。」

少し迷つて、口にした言葉。

シユウは無言で、しかし、柔らかく笑つて見せた。チカの言葉を肯定するよひに。

リューネ＝ソルダーク

誰から聞いたかはすっかり忘れてしまったが、一つだけ、ずっと覚えてる話がある。

メーテル＝リンク、幸せの青い鳥。

魔法使いに頼まれて、色んな世界を巡って青い鳥を探す兄妹。ついぞ青い鳥を見つける事が出来ず、落胆して家に帰ると、飼っていた鳥が青い色をしていた。そんな内容。

何故、覚えているのかは分からない。妙に心に残っている。それだけだ。

「この調子で行けば、今日中にはバルディアに着きますわ。」

サフィーネからの通信で、ふと我に返る。

「バルディアはカーラス軍が占領しますよね？どうするんですか、ご主人様？」

レーダーを弄くっていたチカが、一段落ついたのか右肩に飛んできて、ちょこんと止まった。

「カーラス軍とは戦わなくとも良いでしょう。ただでさえ、シュテドニアスの力が強くなっているのですから。これ以上、彼等の手助けをする必要はありませんよ。」

「ほいじゃあ、カーラス軍に出会つたら逃げの一手ですねー。あれ、でもこのまま行くと、カーラス軍の本陣に突っ込んじゃいますよ。」

「おや、ではせっかくですのでご挨拶だけはしておきましょうか。」

「え？ご主人様・・・？」

「シユウ様、カーラス軍の識別信号をキヤッチしましたわ。」

チカの困惑を他所に、シユウはカーラス軍の真っ只中に自機を進めた。

「なあ、リンちゃん。俺等、完璧置いてけぼり？」

「この世界の事も詳しく分からんのに、何を口出しする必要がある。」

「……いや、まあ、そうだけねえ。折角登場したんだから、もう少し活躍したいじゃん。」

「……何をワケの分からん事を……。さつさと行くぞ、イルム。」

外が騒がしかつた。

リューネは日課のトレーニングを中断して、目的の人物を探す。

「ヤーンローン！」

「もういる。」

すぐ後ろから声がして、リューネは一気に二、三メートル後ずさつた。

「びびびびっくりしたあ！ 急に声かけないでよ……！」

「……呼んだのはお前だらう……。」

呆れた様に溜息を吐いたのは中国人の青年。名はホワン＝ヤンロン。

「ああ、そうそう。外騒がしいけど……何かあつたの？」

「……所属不明機が四機、本陣の真っ只中に現れた。大方、油断していたのだろう。まったく、この軍の連中は少し緊張感に欠ける。」

「ハイハイ、アンタの軍事論評はどうでもいいから、さつさと出撃しようよ。」

話を途中で遮られて、ヤンロンは不服そうだったが、リューネは気にせず格納庫に向かつた。

今ラングランで一番力のあるカーラス軍。その本陣の真っ只中に突っ込んで来た所属不明機。

何処の誰かは分からぬが、面白そうな奴等だ。久しぶりに楽しい戦いが出来るかも知れない。

リューネの心は躍つていた。

が。

出撃したリューネが見た物は、濃紺の機兵。

見慣れたその機体は、グランゾン。

「あーっ！－アンタ、まさかシユウ！－？」

リューネは思いつきり叫んでいた。

通信越しとは言え、甲高い声で叫ばれてシユウは顔を顰めた。

「・・・チカ・・・あれは誰ですか？」

「さあ？アタクシの知らない人物ですよ。」

「こちらの会話などお構いなしに、むにうの人物はなおも甲高い声で続ける。

「・・・生きてたとはね・・・でも、私に見つかたからには、覚悟してもらうよ！－」

いきなり敵意を剥き出しにされて、シユウは溜息を禁じえなかつた。

「・・・何のことでしょう？」

「何すつとほけてんだい！まさか、この私を忘れたなんて言わないだろうね！－？」

そんな事は言わせない。そんな空氣だったが、覚えていないものは覚えていない。

「さて・・・申し訳ないのですが、私には以前の記憶が無いのですよ。」

「本当かい！－？」

「待て、リューネ。」

喰つてからんばかりの勢いなリューネを、後ろから諫めるヤンロン。

「あら、ヤンロンじゃないの。ゴ・ブ・サ・タ。」

「サフイーネか・・・シユウが記憶喪失なのは本当なのか？」

「ええ、本当よ。こんな事で嘘吐くような方じやがないの、知つてるでしょう？」

「ふむ。」

納得した様に一步下がる。

「シユウ、一つ問いたい。どうやって生き延びた?」

「ああ、貴方の事は覚えていります。黄炎龍。炎の魔装機神グランヴ
エールのパイロット。」

肩透かしを喰らつたリューネが、グランゾンの後ろに見慣れた機体
を見つけた。

「あれ、もしかして・・・リンとイルム?」

ヒュックバインとゲシュペNST。「よう、リューネちゃん。相
変わらずだな、お前さんも。」

「・・・久しいな、リューネ。こんな所で会つとは思わなかつた。」

「なんで、アンタ達まで・・・?」

「ま、人生色々ってな。説明しても、納得するのは難しいつしょり
ユーネちゃん。」

相変わらずの調子なイルムに、リューネはすっかり毒氣を抜かれて
しまつた気分だ。

「記憶喪失なのは分かつた。んで、何企んでるんだいシユウ?」

「さて、ね。ともかく、今の私は貴方々と事を構える気はありませ
ん。たまたま近くを通りましたので、ご挨拶に伺つたまでです。」

変わらないシユウの懲懃さに、しかし、何か変化を感じてリューネ
は口を開いた。

「シユウ、アンタ、ちょっと変わつたかい?」

「・・・そうですか・・・?」

「今のアンタ、以前とちょっと違つみたいだ。相変わらず、陰険そ
うだけね。少なくとも、ドス黒いイメージが無くなつたつて言つ
か・・・。」

途端にしどりもどりになつたリューネに、シユウは苦笑する。

「それでは、私はこれで失礼します。用事がありますのでね。」

「あ!待ちな、シユウ!—こつちはまだ・・・!」

なおも喋ろうとするリューネを無視して、シユウ達はその空域から
撤退した。

「どうにも乱暴な人ですねえ。マサキにそっくり！・・・お知り合
いだったみたいですけど、本当に覚えてないんですか、ご主人様？」
チカが、またぶはーと息を吐く。毎回何もしない割には偉そうだ。
シユウは記憶のパズルを探る。未だ収まる所を見付けられず、欠片
の儘の記憶達。

その中に、一つ見付けた欠片。

「少し、思い出しましたよ。・・・そう、確か・・・リューネ・・・
ゾルダーク・・・。DCのビアン博士の・・娘だった気がします。

「へー、博士の娘がパイロットやってるんだー。パターンですねー。」

何のパターンかは敢てスルー。自分のファミリアと一緒に居て、日々磨かれるのはスルースキル。

それにもしても、とシユウは思った。先刻のリューネ＝ゾルダークと
いう少女に似た人物を知っていた気がする、と。

喧嘩早くて、他人の話を聞かない猪突猛進タイプの人物。

誰だつたろうか、と思案するシユウの脳裏に、その人物が浮かぶ事
は無かつた。

可能性、選択、結果、その過程

一卵性双生児は、同じ環境で育てば見分けがつかない位に似た状態で成長する。

しかし、産まれて間もなく引き離され、全く異なる環境で育てば比べようも無いほど別々の人格となる。

遺伝子それ自体は可能性に過ぎない。可能性は環境によつて選択肢として振り分けられる。

無意識にその選択肢を選び取りながら成長していく。

いま此処にある“私”という存在は、数多あつた可能性の中選択された、ある一定の結末へと向かう過程に過ぎない。

「本日は、チカちゃん観光株式会社を^ご利用頂きまして、誠に有難う御座います。ワタクシ、当ツアーの添乗員を務めさせて頂きますチカちやんで御座います。どうぞ宜しく。」

シユウの右肩でチカが虚空に向けてペコリと一礼。

「えー、まもなくパオダ州上空に入りまーす。右手を^ご覧下さーい。」

「右肩から、グランゾンのコンソール付近に場所を移し、右の羽根をばさりと広げる。

「ハイ、雄大なネフィルーナ山脈が一望のもとに見渡せまーす。美しいですねー。大自然の偉大さを感じさせてくれる光景です。えー、このネルフィー^ナ山脈はそもそも・・・。」

「チカ、いい加減になさい。」

「サフイー^ナ、耐えかねて突つ込み。

「えー、サフイー^ナ様、ノリが悪いですよーーせつかく徹夜で調べてきたのにー。」

「もつと他の事にその才能を使いなさいよ、全く。」

「だつてー、地上の皆さんにラ・ギアスの良い所も見て貰いたいじゃないですかー。」

ねえ。と地上勢、リンとイルムに同意を求めるチカ。

「・・・ところで、何処へ向かっているんだ、シユウ?」

リン、完璧スルー。イルムとの遭り取りで磨きに磨いたスルースキルを如何無く発揮中。

「ラングラン王国の王都です。今はシユテドニアスに占領されていますがね。」

「何々、可愛い娘ちゃんでも迎えに行くの?」

「・・・イルム、何でお前は毎回そもそも短絡的なんだ・・・。」

「いえ、当たらずとも遠からず、ですね。」

苦笑しながらシユウが言つ。

「え! ? マジで! !

「・・・・・・」

喜ぶイルム。黙り込むリン。

愉快な一行を連れて、鋼とオリハルコニウムの機兵達は雄大な自然の中を進んでいった。

血塗れの母子

その日は小さな町に宿を取つた。

言つまでも無く、四人別々の部屋だ。

ロボット達は隠行の術をかけて近くの森に置いてある。

部屋の確認をしている最中、サフィーネが悩ましげに腕を絡めてきた。

「・・・シユウ様、今夜、お部屋に伺つてもよろしいですか？」

上目使いで囁かれた言葉の意味を分からぬ程シユウは朴念仁では無い。

ただ、サフィーネのその感情をどう受け止めれば良いのか、それが分からず彼は一瞬困った様に笑い、そしてやんわりと断るだけだった。

一方でそんな遣り取りをしてる中、もう一方はと言えば・・・。

「リンちゃん、今夜部屋に・・・。」

「絶対来るな。」

言い終わる前に断固拒否されたイルムは、シユウとはまた違つた意味で、困った様に笑うのだった。

夕食の時間。

決して豪華では無いが、暖かみのある家庭料理が並ぶテーブル。

サフィーネも、目立つからと町中では少し地味な服装になつっていた。

・・・それでも派手だが・・・。

「さて、今後についてですが・・・。」

料理があらかた片付いた所で、シユウが切り出した。

「王都への潜入は私一人で行います。皆さんはこの町でしばらく待機していく下さい。」

「シユウ様・・・私もですの？」

予想通りに不服そうな声を上げるサファイー。

「貴女には、別に頼みたい事があります。」

「ハイ！シユウ様の『』命令ならば喜んで受けさせて頂きますわ！」

「では……彼等に、ラ・ギアスの事をもう少し詳しく教えて下さい。今後の戦いに備えて必要な事なども。これは今、貴女にしか頼めません。お願ひできますか、サファイー？」

「……シユウ様……。」

シユウの言葉に、瞳を潤ませるサファイー。

「お任せ下さい！不肖、このサファイー、全身全靈を持つてそのご命令、聞かせていただきますわ！！」

「……そこまで気負つて頂かなくても良いのですが……。」立ち上がりて敬礼せんばかりの勢いなサファイーを見て、シユウは苦笑する。

「……やれやれ、気付かないのは本人ばかり……かねえ。」

二人のやり取りを見て、イルムは皮肉そうに笑つた。

「何の事だ、イルム？」

訝しげに問うリンに對して、イルムは食後のコーヒーを啜りながら答える。

「いやいや、天然誑しは質が悪いなあつて思つてね。」

「……あえて誑してお前の方が、よっぽど質が悪いと思つがな。」

「嫌だなあ、リンちゃん。俺は誑してなんかいないつて。いつだって、本気だぜ……君にはね。」

「……フン。」

真摯に見つめるイルムから、ふいと視線を逸らして、それでもリンは少し赤面していた。

そんなリンを見て、やつぱり可愛いな、と思つイルムだった。

大公子と大公妃の姿が消えている事に城の者が気付いたのは朝だつた。

報告を聞いた時、カイオン＝グラン＝マクソード大公は落ち着き払つた様子だつたと言つ。

ただ淡々と捜索隊の出動を命令しただけだつた。

母子が発見されたのは、捜索隊が出動した一両日後。 そう遠くない

山中の洞窟の中。

二人を最初に見つけた隊員は、思わず我が目を疑つた。

彼の目に映つた光景。

彼が見たのは、血塗れの短剣を握り締め、返り血を浴びたまま放心状態の大公妃。 そして、祭壇と思しき台に横たえられ、左胸から大量の血を流す大公子。

二人は無事とは言い難い状態で保護された。

大公子の横に寄り添う様に存在する小さな鳥に、その時気付いた者は居なかつた。

大公子は一命を取り留め、何事も無かつた様にその後の生活を続けた。

その事件以降、大公妃は表舞台から姿を消す事となる。

それは、擦り切れたフィルムの様なボロボロの記憶。色の無い世界。音の無い映像。ただ自分の意識のみが、鮮明。血塗れの母。死に逝こうとしている自分。優しく微笑むのは、闇。それは夢。ただただ夢である事を願う現実。

或いは莊子の蝴蝶。

違いは夢を見ているのも、見られているのも自分。ならば、どちらの自分が夢を見ているのか。それとも、それすら蝴蝶の夢に過ぎないのか。

悪夢に魘される蝴蝶の田覚めは未だ遠い。

月の美しい夜だった。

いつもの夢に追い出され、眠りの世界を後にしたのは数分前。睡眠に関して自身の執着の無さに感謝する。

窓を開けると、夜の冷たい空気が部屋に流れ込んできた。

ラ・ギアスの気候は、一部結界外を除いて、一年中比較的温暖だ。それでも、それなりに四季があり、冬の空気はやはり冷たい。

「ふ・・・えつくりしょい！」

後ろから、霧岡気台無しのくしゃみが聞こえてきたが、シユウは構わず空を見ていた。

「ううう、『主人様、お早いお田覚めですね・・・。まだ夜中の一時ですよ?』

小さな体を力タカタと震わせ、チカがシユウの傍らに飛んで来る。「夢を見たがつている蝶がいたのですよ、きっと。」

視線を空に向けたまま、シユウが呟いた。

「えーと・・・胡蝶でしたつて、莊子の？」

「おや、貴女にしては珍しく知っているのですね。」

意外だ、と言わんばかりにシユウはチカを見遣る。

「嫌ですよ、アタクシだって、『ご主人様のファミリアですよ。それ位、知つてますとも。』

「フフ、そうでしたね。」

軽く笑みを浮かべて、また視線を空へと戻す。

太陽の輝きが無くても存在するラ・ギアスの月。

精霊の加護の下、輝く星。

何と美しく、何と白々しい事か。

「ねえ、ご主人様。」

チカの問い掛けに、シユウは応えない。それでも、聞いている事は分かつていてから、チカは続けた。

「もし、もしですよ、ご主人様が胡蝶の夢なら、アタクシは一体、誰の夢なんでしょうね？」

「・・・・・・・・・・・・」

「そもそも、ご主人様が胡蝶の夢なら、アタクシは存在しているんでしょうか？」

「・・・・・・・・・・・・」

「えーっと、カント・・・でしたつて？そんな疑問に取り付かれた思想家・・・いや哲学家？・・・まあ、どっちでもいいんですけど。うーんと、我想う故に我在り、ですよね。ゴギトエルゴスム・・・あれ、違つたつけ？・・・まあ、んな事あ良いんですけどね。」

「・・・・・・・・・・・・」

チカのお喋りを、シユウはただ黙つて聞いていた。

「ねえ、ご主人様。アタクシ、たまに思うのですよ。何がつて？そりやあアタクシ自身の存在の事なのですけどね。」

「・・・・・・・・・・・・」

何も応えない主人をちらりと見遣り、ちゃんと聞いている事を確認

してチカは更に続ける。

「・・・アタクシは、もしかしたら・・・もしかしたら、ですよ。
IFのお話ですがね・・・。」

チカも、そつと空を見上げた。

冬の澄んだ空氣の中、ぽつかりと開いた穴の様に、月は燦然とその存在を誇示している。

「アタクシは・・・ご主人様の見ている夢なんじゃないか・・・。
そんな風に思う時が・・・あ、いや、ホント、すつごく稀に、です
よ。・・・でも、そう思つ時があるんですよ。」

「・・・チカ。」

「ハイハイ！」

「・・・貴女が私の見ている夢なれば・・・ここに居る私は、一体
誰なのでしょうね。」

「アタクシのご主人様です。」

シユウの疑問に、チカは間髪入れる事なく答えた。

「・・・フフフ、貴女は良いですね、とても、シンプルで。」

「あら、単純つて事ですか？チカちゃんはとっても複雑な気分です
よ。」

「いえいえ、そういう事ではありませんよ。」

シユウは、少しだが、愉快そうに笑つた。

「・・・明日の胡蝶の田覚めはきっと爽やかでしょうね。」

「まだそんな事言つんですかーーもうーー例えこの世界が、誰かの
夢でも、今、ここに存在する世界は、アタクシ達にとつては現実で
すよ！」

「おやおや、チカもたまには良い事を言つのですね。」

「たまにじやないですーーいつもチカちゃんは良い事言つてますー
ー！」

バタバタと抗議するチカを横目に、シユウはまた空を見上る。

月の明かりに照らされて、蝶が一頭虚空に舞つた。

この世の全ては夢現。
蝶が一頭、空に舞う。
終の住処は夢の果て。
常世現世限りなく。
蝶は未だ、夢の中。

「あのー、ご主人様・・・ホントに大丈夫なんですか？なんか、すつごいいつも敵いますけど・・・」

王都ラングランを悠々と歩き回るグランゾンの中で、チカは不安そうに呟いた。

「心配はいりませんよ、チカ。この“隠行の術”は持続時間と持続空間を絞り込めば完全に気配まで消す事ができますから。」

事も無げに言つてのけるシユウだが、それがいかに高等な技術が必要な事かはチカもなんとなく想像がつく。

「あー、確かに・・・目の前通つても全然反応無いですもんね！こりやあいいや。」

「さて・・・モニカ王女は・・・あの神殿でしたか。近くにとめて忍び込みますよ。」

「はーい。」

王都のかなり外れの方に、王族が儀式に使う為の神殿がある。その中にモニカがいるらしい事は昨日の内に調べておいた。

「ご主人様、ご主人様。」

グランゾンの中でそわそわとしながら、チカが声を出す。

「どうしました、チカ？」

「うー、なんか、こう、相手から見えないって思うと・・・すつごく、イタズラしたくなりませんか？」

「なりません。」

シユウ即答。

「えー！ご主人様つてば、子供心を忘れちゃったんですか！？ダメですよ！？純粹な子供の心があつてこそ、人間はより豊かに生きる事ができるんですよ！！」

お前がイタズラしたいだけだろ？、という突っ込みが各所から飛んできしそうだが、シユウは無反応を貫く。

チカはイタズラしたそうにウズウズとあわしあわしへ行つたり來たりと忙しなく飛び回つた。

「ダメですよ、チカ。隠行の術が効いている間は」ちらからうの干渉はできませんからね。」

「ちえー。」

心底残念そうに手を打つチカに、シユウは苦笑するのだった。

奥の部屋からすすり泣く声が聞こえる。

セニアはもう何度もなるその声を溜息と共に聞いていた。

「まーたあの子は泣いてるのかしら・・・。全く、どーしょもないわねー。」

外で見張つているシユテドニアス兵に聞こえなによつて、セニアは小声でぼやく。

奥の部屋に居るのは双子の妹モニカ。

元々王宮暮らししか知らない妹には、確かに酷な環境なのかもしないが、幼い頃からそこら中を飛び回つていたセニアにひとつでは今の環境は退屈さえ除けば取るに足らない状況だった。

「はあ、デュカキスは元気かしら？・・・シユテドニアスの奴らに見つかって、酷い事されてないかな・・・？」

彼女の心配は、もっぱら自身が構築したメカやコンピュータに向けられている。

その気になれば、コンピュータでロックされたこの部屋から抜け出す事など簡単なのだが、その先のアテが無い為、セニアは渋々今の環境に甘んじているのだった。

不意に、ドアの向こうで物音がした。

呻き声と、何かが倒れる音だろつか。

一瞬の静寂の後、ノックの音が響いた。

「・・・誰？」

シユテドニアス兵ならばノックなど無しに入つてくる筈だ。

それに、先刻の物音も気にかかる。

セニアの声には警戒の色が浮かんでいた。

「失礼しますよ。」

かちやり、と小さな音を立て、開いた扉から優雅に入つて来たのは、思いも寄らぬ、しかし、見知った人物だった。

「え・・・クリストフ！？ 何で・・・どうやつてここに…？」

驚きの声を上げるセニアに、シユウは唇に人差し指を当て、微笑んで見せる。

「しつ、お静かに。貴女は・・・セニア・・・ですね？」

確かめる様なシユウの言葉に、セニアは不思議そうに眉根を寄せた。

「何言つてゐるの、クリストフ。他の誰かに見える？」

シユウは、自分の記憶が合つてゐる事を確認すると、満足気に頷く。

「クリストフ？」

「ああ・・・いえ、しばらく見ない間に美しくなりましたね。」

「あら、そう？ アリガト。心にも無いお世辞だとしても嬉しいわ。・・・でも、あの子にはそんな事言つちゃダメよ。多分、卒倒するから。」

「あの子？」

「モニカよ、モニカ。アンタつて見かけに寄らずニブイのね。」

「そう言えば、そのモニカは一緒ではないのですね？」

「モニカに何か用なの？」

ほんの僅か、セニアの声に警戒の色が戻る。

「ここから連れ出して差し上げるだけですよ。」

「ふーん・・・何か、怪しいなあ。」

従兄弟とはいえ、これまでの所業を思うと素直に妹を託そうとは思えない。

「何でしたら、貴女も一緒にいかがですか？」

「私？・・・遠慮しとくわ。アンタと一緒になんて、ぞつとしないもん。」

歯に衣着せぬセニアの物言いに、シウは苦笑した。

「やれやれ、嫌われたモノですね。」

「・・・モニカなら、この奥の部屋で泣いてるわ。ま、こんな所に閉じ込められちゃあ、ね。アンタは行きや、少しあは元気になるでしょ。」

「この奥、ですね。感謝しますよ、セニア。」

「言ひとくけど…」

急に語氣を荒げて、セニアがシウに喰つてかかる。

「今回は黙つてるけど、もし、この先、モニカをこれ以上悲しませるようなマネしたらタダじゃ おかないからね…」

「分かっていますよ、セニア。約束しましょ。」

「ん、なら良し。早く行つてあげて。私なら大丈夫だから。」

「ええ、そうしましょ。セニア、貴女も多分、近い内にここから出られると思いますよ。」

「アンタ、未来見の能力まであつたつけ？」

「いいえ、ただの勘ですよ。」

昔と変わらぬ、訳知り顔で微笑む従兄弟を、セニアはじつと見つめていた。

部屋を出て行こうとしたシウが、ふと足を止めて振り向く。

「・・・セニア、もし、この先貴女の能力が原因で悲劇が起きたとしても、それは貴女の所為ではありません。気に病まないようにして下さいね。」

「何、ソレ？ それもアンタの勘？」

「・・・そういう事にしておきましょ。それでは、また。」

静かに閉められた扉。去つていった従兄弟は、昔と何一つ変わつてはいなかつた。

託した希望 託された夢

素つ頼狂な言葉遣いは覚えている。やや非常識な性格も、覚えている。

出会ったのはどこだかは覚えていない。

始めて、と挨拶したら「あら、始めてでな」「やめられませんのよ？」と笑顔で返された記憶がある。

どこで会ったのか、聞いても笑顔ではぐらかされるだけだった。

そして、かみ合わない会話を交わし、最後別れ際に少女は悪戯っぽく笑った。

「クリスマス様、ずっと、お慕いしておりますのよ、私。」

「『主人様』。この先は見張りがいっぱいいますよ。ビーストします？」

戻候に出ていたチカが、相変わらず暢気な様子で帰ってきた。

「やっぱセニア王女とは規模が違いますねー。まー、人質としてもモニカ王女の方が価値があるでしょーしね。」

「流石に、神殿の結界内では隠行の術も効果はありませんし・・・さて、困りましたね。」

さして困つていなそうな顔で、シユウが呟く。

「仕方ありませんね。・・・チカ、行つてらっしゃい。」

「あ、やっぱり。待つてました！」

出番を告げられ、俄然張り切るチカ。

「ぐれぐれも、やり過ぎない様にして下さいよ。謹ぎを大きくして、他の見張りに来られては困ります。」

「任せて下さって、アタクシを誰だと思つてるんですか？チカちやんですよ！」

だから不安なんだ、と喉まで出掛けた言葉を飲み下し、シユウは

チ力を見送った。

鼻唄混じりに廊下を飛ぶ。

チ力は意気揚々だつた。

好き勝手出来るというのはやはり気分が良い。

誕生して十一年。好き勝手出来た記憶が、実はあまり無いチ力だつた。

常に誰かの監視があつた。主人と同じ様に。

主人は、奔放なチ力を言葉で窘める事はあっても、決して彼女の自由を奪おうとはしなかつた。

まるで、自身の夢を託すかの様に。

だからチ力は奔放に振舞つた。

例え、監視があろうとも。ルオゾールに数時間の説教を喰らおうとも。鳥籠に入れられようとも。

それが、主人の望みである事を知つていたから。

チ力は小さな決心をすると、見張りの兵士達の前に踊り出た。

「コンニチハ！」

わざと片言の様に発音する。見張りの一人がチ力を指差した。

「おい、あんな所に鳥がいるぞ。」

「あれは・・・ローシェンか。何でこんな所にいるんだろうな？」

「大方、誰かのペットが逃げ出したんだろう。」

チ力は兵士達の前を大きく横切りながら大声で鳴いた。

「バーカ！バーカ！」

「な、何だこの鳥！バカにしやがって！！」

一人が過剰な反応を示す。チ力はほくそえんだ。やりやすそうな相手だ。

「まあまあ、落ち着けって。たかが鳥だろ。」

別の人宥めに入る。

「全く、誰のペットだ!? 賥がなつてない!!」

「仕方ないって。鳥は駆けるの難しいらしいじゃないか。」

宥めに入つてゐる兵士の前に飛び、チカは必殺の一言を放つ。

余りに過激な発言の為、一部に規制が入っております。

その規制が入る程の一言を、穏やかで無い気持ちで聞く男かした
宥めに入つていた筈の見張り氏だ。A氏とでも呼ぼうか。
彼は顔を真つ赤にして、チカに怒鳴りかかつた。

驚いたのは宥められていた見張り氏。こちらはB氏としよう。
「お、おいおい、どうしたんだよ。たかが鳥だろ。・・・そ、それ
とも・・・お前、本当に が なのか・・・?」

「アホー！ボケー！カースー！」
ガ
」

さらに挑発する子が、更に怒るA氏。

「甚矣おはなしの口うるさい。」

「バーカ！ クヤシカツタラコツチニオイデー！ ×××ヤローーー！」
トドメの一言を放つて逃げるチカ。

卷之三

誰も居なくなつた廊下で、溜息を吐く男が一人。

・・・上手く行つた様ですが・・・下品な・・・。あまり多用する手ではあつませんねえ。

多少後悔しつつ、それでも、彼は使い魔の自由を奪おうとは思わなかつた。

丁寧な言葉遣いを覚えている。

歳不相応な落ち着いた様子も、覚えている。

出会った時の事も、しつかり覚えている。

窓の向こうで、寂し気な様子の貴方。声をかけても気付かなかつた。何だかそのままだと消えてしまいそうだつたから、思わず走つて中庭に、貴方の居る場所へと走つた。

「始めてまして！」

振り向いた貴方の、驚いた顔。一生忘れないと思つ。

多分、あれが、本当の貴方。

私が恋に落ちた瞬間。

ここに閉じ込められてどれ位経つのだろう。

すっかり赤く腫れてしまつた目を、濡らしたハンカチで冷やしながら、モニカは溜息を吐いた。

ハンカチを見つめる。

「・・・シユウ様・・・」

ふう、と吐いた溜息は、先程と違つてちょっと熱っぽい。

恋する乙女、とでも言えれば良いのだろうか。

想い人からもつたハンカチをじつと見つめるモニカ。

胞子の谷に出かけた時、転んで怪我をした自分にそつと差し出された白い手とハンカチ。

彼にとつては他愛ない事だつたのかも知れない。それでも、彼女にとつては世界がひっくり返る程の大事件だつた。

その証拠に、十数年経つても彼女の手からそのハンカチが離れた事は無い。

「・・・ああ、シユウ様・・・今、貴方はどこにおいてになられて

いるのでしょうか。」

相変わらず、素つ頓狂な言葉遣い。誰が何度も注意しても治る気配は無い。

そんな彼女を、後ろから眺めている人物が居た。ノックはしたのだが、彼女がこんな調子なので一切気付かなかつたらしい。

「モニカ。」

呼んでみる。

「あ・・・シユウ様・・・。」

気付かない。

「モニカ・・・。」

もう一度、呼んでみる。

モニカはきょろきょろと左右を見て、後ろの確認をする事無く、はあ、と溜息を吐いた。

「ああ、今もシユウ様のお声が・・・。シユウ様、『ご無事でおられるのでしょうか・・・どにござられるのです?』

「・・・に居ますよ。」

呆れ気味な声で、何度も呼びかけをする。

「ああ・・・そうでしたわね・・・。」

モニカは納得したようにひとりごちると、ハンカチを胸元で握り締めた。何か狙つてんじゃねえだらうかつて位後ろを向こうとしない。「シユウ様は、いつも私の胸の中におられるのですわね・・・。」違つから。

チカが居たなら、間違ひ無く突つ込みが入つていた事だらう。

何故か痛みを感じる頭を押さえるシユウ。

「モニカ。こっちですよ。」

「え?」

ここまで言つて、ようやく振り向くモニカ。

「え?え?・・・ま、まさか・・・本当に?本当に、シユウ様でありますの・・・?」

「文法が変ですよ、モニカ。」

驚愕と歓喜に固まるモニカに、シユウはそつと微笑んで見せる。

「ああ・・・・・お会いしたかった!!」

凄い勢いで抱きついてくるモニカに少し戸惑うシユウ。

こんなに積極的な娘だつたたろうか。

「ああ、シユウ様! 私、これでもう思い残す事はあられませんわ!」

「！」

「モニカ、ひとまず落ち着いて下さい。積もる話もあるでしょうが、今は時間がありません。分かりますね?」

「あ、申し訳ありませんわ。私つたら・・・。」

頬を赤らめながら、シユウから離れる。

「モニカ、貴女が必要です。着いて来て頂けますね?」

真摯に見つめられ、モニカは更に頬を染めた。もう、感動し過ぎて倒れそうな彼女だったが、その理由をきつとシユウは分かつていないだろう。本人は自覚無しなのだから恐ろしい。

問われたモニカに、迷いなどあろう筈が無かった。

夢にまで見たこの瞬間なのだから。

「はい! シユウ様とでしたら、私、どこまでも着いて行きたく思われておりますわ!!」

「だから、文法が変ですよ、モニカ。」

何故か凄まじい気合を放つモニカを見て、シユウはただ苦笑するだけだった。

「シユウ様、誰か来られますわ!」

「ありや、見張りあつちにもいたんだ!」

「あ、上手く行きましたね、ご主人様!」

廊下に出ると、狙つたかの様なタイミングでチカが帰つてきた。主人と一緒にモニカ王女の姿を認め、喜色ばんだ声を出す。

「ええ、あとはここから脱出するだけ・・・。」

「シユウ様、誰か来られますわ!」

「ありや、見張りあつちにもいたんだ!」

「やれやれ、急ぐとしましょ。」

シユウがモニカの手を引いて走り出した瞬間、廊下の角から兵士の一人が顔を出した。

「！？・・・貴様・・・クリストフ！？」

「失礼しますよ。」

すれ違ひ様、相手の鳩尾に無駄の無い一撃を見舞う。

崩れ落ちる兵士。

「・・・ご主人様、最初から、全員これで良かつたんじゃないでしょうか？」

「・・・チカ、それでは余りスマートなやり方とは言えないでしょ。」

「はあ、そんなモノでしようか？」

「そんなモノです。」

さらりと涼しげな顔で答える主人。

「ああ、シユウ様はやはりお優しくていらっしゃいますのね！」

何をどう解釈したのか、理解に苦しむ言葉のお姫様。

どんだけポジティブシンキングなんだ、お前は。喉まで出掛けた

言葉を、彼女にしては珍しく、飲み下したチカ。

「頑張りました、チカちゃん、頑張りましたよー。」

「・・・何をですか？」

「あ、いえ、こっちの話です。」

「ふふ、チカもお変わりございませんのね。」

緊張感ゼロの逃走劇。

モニカはずつと笑っていた。

ラングラン崩壊以来、ずっと忘れていた筈の笑顔。

繋がれた手。

それだけが、彼女に笑顔を思い出させてくれた。

手を引いてしてくれる人。

あの日、ハンカチと共に差し出された手と変わらない、白い手。

ずっと、お慕いしておりますのよ。

あの時と変わらない気持ち。

彼女の手に握られた、少し古びたハンカチだけが、流れた年月を教えてくれる。

それでも、何も変わらない。

相手も、自分も。

何一つ、変わっていない。

それが、モニカには嬉しかった。

脱出

周囲に疎まれながら、少年は育つた。

少年の身分上、それを表に出す者は少なかつたが、少年が何も知らずに成長できる程隠す者も少なかつた。

それでも少年が鬱屈を抱えずに成長できたのは、ひとえに母親の擁護があつたからだ。

父親は妾にばかりかかりつきりで、少年に見向きもしなかつた。母親と離され、父親を病で亡くした少年は、それでも数人の理解者に支えられ十七歳を迎えた。

そして、行方を眩ます。

公式には行方不明とされたが、その実、ラングラン政府上層部の命を受けて地上へと出ていた。

ラ・ギアス全体の暗黙の了解として“地上への不干涉”というものが

しかし、予言への対策として魔装機計画を実行に移していたラングラン政府の一部の人間にとつては、魔装機操者足り得る地上人の情報は是非でも欲しい物だった。

そこで白羽の矢が立つたのが、地上とラ・ギアス両方の血を引く少年だった。

政府としては、厄介払いの意味合ひもあつたのだろう。

こうして万事滞りなく、歯車は回る。

破滅へと向けて、着々と。

「逃がすな！第一、第三小隊は背後に周り込め！！」

張り詰めた声が、戦場に木霊する。

「あちやー、ご主人様、どうします？逃げ道塞がれちゃいましたよ。

」

グラソゾンの「クピットで、チカは相変わらず場にそぐわない暢気な声を出した。

「仕方ありませんね、西の方が手薄なようです。ギナス山の方へ向かいましょう。サフィー達に連絡を取つて下さい。」

主人からの命令を遂行すべく、チカは器用に羽と嘴を使って通信を開く。

「いえっさー。・・・あ、もしもーし、チカで御座いますよー。えつとですねー、ちょっと合流地点の変更をお願いしたいんですけど・・ええ・・・ハイ、ギナス山でお願いします。・・・え？・・・あ、ハイ・・・わ、分かりました・・・い、いえいえ、そんな事はありませんよー！ええ、モチロンですともーハイ！それでは！・・通信を切ると同時に、チカは大きな溜息を吐いた。

「どうしました、チカ。またサフィーに何か言われましたか？」

「・・・ええ、その通りでござりますよ、ええ、ええ・・・。」

よつぽど、何かこつ酷く言われたのか、チカはすっかり元気を無くしていた。

「まあ、落ち込んで少し静かになつてくれるのならば有難いですね。」

「「主人様まで・・・酷い！おーぼーだ！使い魔虐待！！鬼！悪魔！きー！！」

「チカ、ハつ当たりも結構ですが、戦闘中なのをお忘れなく。」

右からの砲撃を歪曲フィールドで防ぐ。

コクピットには、軽い振動が伝わつてくる程度だ。

「ああ、シコウ様と一緒に・・・はあ・・・なんて幸せなんでしょう・・。」

こつちはこつちで、戦闘も、隣の喧騒もお構いなく、ただただ想い人の顔に見惚れるモニカ。

「ありやりや、ご主人様ー。困まれちゃいましたー！」

「・・・」の程度、問題ありません。グラビトロンカノン発射準備を。

「はいなー！」

「ああ、シユウ様・・・。」

チグハグな二人と一羽を中心に、闇が広がる。

結局、全ての追手を振り切るまで、グラソゾンのコクピット内はこんな調子だった。

風の呼び声

いつだって、少女はそこに居た。
「私、アナタの事、知ってるわ。ねえ、アナタは私の事、知ってる
？」

思い出すのはその笑顔。

どこか母親の面影を見せる、少女。
姿を見られなくなつたのはいつからだつたろう。
それでも、きっと少女はそこに居続けたのだろう。
多分、今でも。

「合流地点が近づいてきましたですよー、『ご主人様！』
ナビゲーター・チェック係のちかがあちこち忙しく動き回りながら
報告をしてくる。

シユウは先刻の戦闘で受けた損傷などを調べていた。

「追手の方はどうですか？」

「追つてきようがないんじゃないですか？」

あれだけ暴れてきたんだから、と思いながらチカはレーダーを一応
確認した。

やはり、レーダーで確認できる範囲内には何の影も映つてはいない。
「はいはい、レーダーも反応なしーで『ごわい』ますよ。」

「・・・そうですか。」

「どうしました、ご主人様？」

「いえ、前方から不思議なプラークを感じるのですが・・・。」

ちらり、とシユウの脳裏に見知らぬ少女の笑顔が横切る。
何だ。

シユウは記憶の糸を手繰る。

『ねえ、私の事、覚えてる？』

少女が笑う。

誰だ。

『私の事、忘れちゃった?』

少女の表情が曇る。

誰だ。

『ねえ、私は、ずっと、ここに居るの。』

少女は両手を優しく広げる。

これは、誰だ。

『ねえ・・・。』

ゆっくり微笑んで、少女はちらりと闇に溶けた。

消える直前、少女は何かを言っていたような気がした。

「シユウ様?」

モニカの心配そうな声で我に返った。

「ああ、済みません。少し考え方をしていました。このプランに覚えがあるような気がするのですが・・・どうも思い出せません。」

「前方・・・ですね?・・・つーん、精霊レーダーには何の反応も無いですよ。」

「いえ、シユウ様のおっしゃられる事に間違いはあられませんわ。・・・」の先にどなたかがおいでいらっしゃいましたよ。」

「モニカ様、文法が変ですよ。えーと、あ、レーダーに反応あり!ホントだ!・・・でも、コレじゃあホントにアタクシすっかりいらない子じゃないですか・・・。」

ウオオ・・・オン

純白の神鳥が嘶いた。

「・・・どうした、サイバスター?」

黒髪の少年が訝しげに問う。

ウオオ・・・オン

応える様に、もう一度神鳥は嘶ぐ。

「何か近づいて来てるのか？」

「どうしたの、マサキ？」

「ああ、テュッティ・・・。何か、サイバスターが言つてゐるんだ。」

「敵・・・かしら？」

「どうだかな・・・。とりあえず、様子を見に行つて来るぜ。」

「ああ、待つてマサキ。私達も行くわ。」

『ねえ、私、アナタの事、知つてゐる。』

風の少女はいつだつてそこで待つっていた。

全てを運ぶ、風の様に。少女は万物の攝理を運ぶ。

昔も。そして、今も。

風との再会

「あー！サイバスター！！」

チカの甲高い声がグラソンの「クピットに木靈する。遠目に確認できたソレは、美しい純白の機体。

優美な羽根を広げたその姿は、神鳥と呼ぶに相応しい。風の魔装機神。

渾名は、サイバスター。

「な・・・ま、まさか！？」

サイバスターの「クピット内で、マサキは絶句した。モニターが映し出したその機体は闇の色。

自分が止めを刺した筈の、その人物。

傍らにいるガッデスからも、テュッティが息を呑む様子が伝わって来た。

「クリストフ・・・いえ、シユウ＝シラカワ！！」

敵意を剥き出しにする二人に、しかし、返ってきたのは意外にも穏やかな声。

「・・・貴方々も、私の事を知っているのですね？」

空惚けた様な声に、マサキは怒りを露にする。

「シ、シユウ、手前え！！」

通信機の音が割れんばかりの声に、シユウは閉口する。

「・・・チカ、私は随分と色々な所で恐れられたり、怨まれたりしているのですね。」

「・・・まあ、そうでしょうね。」

溜息混じりのシユウの言葉に、冴えない声色で応えるチカ。

そんな事などお構いなしに、サイバスターのパイロットは尚も声を荒げる。

「生きてやがったとはな……だが、ここで会つたが百年目……今度こそ逃がさねえぞ……！」

さり気無く通信機のウォリュームを下げ、シユウは深々と息を下ろした。

「……この下品な物言い……思い出せそうなのですが……。」

「何ワケの分からねえ事言つてやがる……俺の事を忘れたとは言わせねえぞ……！」

「先程の、リューネという少女も、全く同じ事を言つていましたねえ……。」

「おい、シユウ！ 何とか言ひやがれ……！」

「ああ、失礼しました。……残念ですが、貴方の事を覚えていいのですよ。」

あっけらかんとしたシユウの言葉に、またしてもマサキは絶句する。

「なん……だと……？」

「……シユウ＝シラカワ。私の事は覚えてますか？」

穏やかな中にも、うつすらと敵意を滲ませた、女性の声。

「……申し訳ありませんが……。機体の名前なら存じております。水の魔装機神、ガツデス。」

「まさか……記憶喪失なのか、シユウ！？」

「『』主人様、ご主人様。こんな所で時間潰してゐるヒマありませんよ。」

「ええ、そうですね。では、またいすれお会いしましょう。今は急ぎますので、これで。」

会話を打ち切られて、マサキはまた声を荒げた。

「ま……待ちやがれ！ シユウ！？」

自身を呼ぶ声に背を向けて、シユウはグラシゾンのバーニアを噴かす。

「では、御機嫌よう。」

それは誰に向けての挨拶だったのか。

純白の機体の後ろで、少女が一人、笑っているのが見えた気がした。

誰かと誰かの遣り取りが聞こえる。

二人が不仲なのは、会話の内容を聞かなくても分かった。

一方は、食つて掛かる様な叫び声。

もう一方は、どこまでも対象的な冷たい声。

「・・・懲りない方ですね、貴方も。」

冷たい声が呆れた様に呴く。

「うるせえ！手前えのその台詞も聞き飽きたぜ！！」

「貴方が勝てる確立は万に一つもありません。なのに何故、そうムキになつてかかつて来るのです？」

諭すような静かな声に、先程まで勢いのあつた声が少したじろいだ。

「・・・確かに、そうかもしけねえ・・・けど・・・」

そこまで言つて、少し言い淀む。

言葉を探しているのだろうか。何度か言葉を紡ごうとしては飲み込む事を繰り返す。

やがて、意を決した様に声を張り上げた。

「・・・けど、それじゃあ俺自身が納得できねえんだよ！」

余りにもストレートな声。

どこまでも自分に正直な彼が、少し羨ましかった。

「やれやれ。そんな下らないプライドの為に、命を落とすつもりですか。愚かな・・・」

どこか吐き捨てる様に呴き、小さく溜息を吐く。

この言葉を紡いでいるのは、誰なのだろう。

声は酷く聞き覚えがある。

叫び散らす声は、先刻出会つた不思議なプラークの少年。

もう一方は、一体誰だ。

「サイバスター・・・俺のプラークを・・・いや、俺の命をお前にくれてやる・・・俺はどうなうと構いやしねえ・・・だがな、

奴だけは・・・奴だけは生かしちゃ おけねえんだ!! 「

少年の、覚悟の叫び。

戦場に、一陣の風が吹きぬけた。

風が存在し得ない、宇宙空間。

そこに駆け抜けた、風。

「・・・俺がもつと早く奴の正体に気付いていれば・・・今までの悲劇は起きなかつた・・・!」

はらり。

羽根が舞い降りた。

そんな気がした。

「・・・俺は・・・もう後悔したくねえ。あんな想いは・・・あんな想いはもうたくさんなんだ!!」

少年は、一体どんな想いを踏み越えてここにいるのだらう。

『・・・ねえ。』

声が聞こえた。少女の声が。

「だから、サイバスター・・・俺は全身全靈をかけて奴を倒す!!」

少年が鋭い視線を向ける先。

モニターとオリハルコニウムの装甲、そして、宇宙空間を隔てた先に居る人物。

『私の声が、聞こえる?』

必死な声で、少女が呼びかける、その先。
そこに居る、人物。

シユウー!!

少年と少女。二人の声が重なつた。

「シユウ様！！」

「 っ！」

切羽詰つた声に呼ばれ、シユウは我に返つた。

「・・・あ・・・・つ・・・・。」

息が荒い。

「シユウ様、如何なさいましたの？」

横を見れば、心配そうに眉根を寄せたモニカが。正面には同じ様に心配そうな顔をしたチカが居た。

「わ・・・たし・・・は・・・・？」

「急にぼんやりとなさつたので、心配なさいましたわ・・・・。」

「そう・・・ですか。」

色々な物が頭の中で渦巻いている。

急に記憶が一部蘇つてきた。

「そういえば、『主人様。ホントにマサキの事忘れちゃつたんですね

か？』

マサキ。

自分に激情をぶつけて来た、あの少年。

「・・・そう、少し・・・少し思い出しましたよ。・・・サイバスターに選ばれた少年。時には敵。時には味方・・・だった気がします。」

他にも、何かあつた気がする。
もつと他に。

すきり、と頭が痛んだ。

そこピースは未だ手元に無い。
それにも、とシユウは思った。

先刻の記憶に見た自分。

あの自分に感じた、言い様の無い違和感。

その正体。

あれは・・・。

「それにしても・・・。あのマサキがシユウ様と一緒に戦われた
なんて・・・。ちょっと信じられませんわね・・・。」

シユウの思考は、のんびりとしたモニカの言葉で遮られた。

「・・・モニカ、文法が変ですよ。」

雲合霧集の思考と記憶。

少しずつ、絵の見えてきたパズル。

その絵に潜む、違和感。

見えてきた物。
増えてきた疑問。

全てを内包し、闇は尚も不敵に微笑んだ。

女の決意

「では、サファイー・ネ達と合流しましょうか。」
痛みの残照を引きずる頭を軽く振り、シユウはチカとモニカに告げた。

「え！？紅蓮のサファイー・ネがいるのですか！？」

もう何度も会話に出ている名前を、今始めて聞いた様にモニカが驚く。

「ええ・・・言つてませんでしたか？」

「モニカ様、ご主人様に見惚れて話全く聞いてませんでしたからねー。」

意外そうに呟くシユウの言葉も、小馬鹿にする様なチカの声も無視して、モニカはついと俯いた。

「・・・サファイー・ネも一緒・・・という事は、シユウ様は戦場でもあの女と一緒に・・・ああ、なんて事でしょう・・・油断できませんわ、サファイー・ネって人・・・これは・・・と、なると私も・・・」
一頻り小声で呟くと、意を決した様に顔を上げる。

「・・・どうしました、モニカ？」

何かを決意したモニカの視線に、シユウは横目で問いかける。

「シユウ様、私も・・・私もシユウ様と共に戦わせて頂きたいと思われておりますわ！」

思いがけないモニカの言葉。

文法が変だ、とはどちらも言わなかつた。

「貴女が・・・ですか？」

「私も・・・私だって、シユウ様のお役に立ちたいですわ！」

「気持ち嬉しいですが・・・モニカ、貴女の扱える魔装機は・・・

。

「ノルスがあります！！」

どこまでも食い下がるモニカの瞳に宿るのは決意。

「・・・・・・」

少しの間、シユウとモニカは見詰め合っていた。

折れたのはシユウだった。

「・・・ノルスの保管場所は、分かりますか？」

「シユウ様！！」

瞳に不安の色を浮かべていたモニカ。その表情が一気に晴れ上がり

た。

「有難う御座います、シユウ様！ノルスの場所、探してみますわ！」

モニカはすう、と深呼吸をすると、ゆっくり目を伏せる。

「・・・良いんですけど、ご主人様？」

耳元で囁くチカに、シユウは軽く苦笑いして見せた。

「間違いありませんね、モニカ？」

モニターの端に映し出された地図の一点を指差してモニカは頷いた。
「ええ、ここからノルスの気配を感じますわ。間違いありません！」

「・・・ここは・・・フラモス州ですか。チカ、フラモス州にある
ラングラン軍基地のデータを。」

「あいあいさー！」

サブ・モニターに幾つかのデータが映し出される。

「・・・ああ、ありましたね。コーラルキャニオン東、フラモス第
3基地。つい最近、ノルスが搬入された記録が残っています。」

「こつからそう遠くなさそうですね。」

「サファイーネ達には、少し遅れる旨連絡しておいて下さい。
「はーい。」

シユウは更にコンソールを叩き、目的地の詳しい状況を調べ始める。

「・・・基地内の戦力は・・・大した事は無さそうですね。魔装機
も殆ど配備されてなさそうです。」

「まー、戦術的に見ても大した事ない場所ですもんねー。」

「お兄様と力ークス将軍に殆どの兵は付き従つてゐる筈ですから、
余程重要な場所でなければラングラン軍はおられなさそうですね。」

「シユテドニアスの奴等がいたりしないかなー？」

「それこそ、こんな場所に陣取る意味がありませんよ。」「
んじや、楽勝ですね。」

フラモス第3基地に警報が鳴り響いた。

兵士達の動搖は明らかだった。

地理的にも、戦術的にも、重要な場所では無い。敵の目を引く様な

兵器も、無い。

本来であれば、一番戦闘とは無縁の場所である筈だった。
そこへ現れたのは、グランゾン。

「うつひやー、大混乱ですねー、ご主人様！」

「グランゾンを遠隔操作出来る時間には限りがあります。急ぎます
よ。」

三つの影が、混乱が支配する小さな基地内を、駆ける。

「モニカ、分かりますか？」

問われたモニカは自信に満ちた瞳で頷く。

「間違ひありません、こちらです！」

呼んでいる。

私を。

この人の力になる為に！

幾つかの角を曲がった先に、扉があつた。
迷いもせずに、モニカはその扉を開け放つ。
さして大きくはない格納庫。

泉の戦乙女が優雅に佇んでいる。

「ああ、ノルス！」

愛機の姿に、モニカの声が喜色ばむ。

「ノルス、ノルス！ お久しぶりですわ！ 力を借りに参りましたの！」

モニカは必死にノルスに呼びかける。

精靈との契約をしているとはいえ、低位。しかも、出力不足で正式
な魔装機としても登録されなかつた機体。

それでも、少女にとつては、唯一自身を受け入れ、戦場へと導いて
くれる鎧にして武器。

「ノルス、私、シユウ様のお力になりたく思われます。一緒に、
来て下さいますね？」

意識を持つ事は出来なかつた機体。だが、ソレは確かに彼女の意思

に応え、肯いた。

モニカがノルスと語らっている間、シュウは格納庫の中を歩いていた。

「んー？くんくん・・・」主人様！匂う・・・匂いますよー！これはお宝の匂いです！！」

「・・・何ですか、それは・・・？」

「嫌ですよ、ご主人様！金目の物はですね、分かる者には分かる匂いを持つてるんですよーーー！」

「・・・そうなのですか？」

「アタクシが言つんですから、間違いありませんーーー！」

意気揚々と飛び立つチカに、呆れたような溜息を吐くシュウ。

「『』つしゅじんさまー！』つちですよーーー早くはやくーーー！」

「・・・ええ、今行きますよ。」

チカの声に続いて、格納庫の奥へと進む。

他の場所とは区切られたスペースに、ソレはあった。

「・・・これは・・・。」

「あ、ご主人様ーーー、この中からお宝の匂いがいたしますですよーーー！」

巨大なシルエットは、移動要塞。

奇襲戦が主な戦術となつたラングラン軍の、戦の要。

「移動要塞・・・ですね。一般的な物より小型でしょうか。搬入搬出記録にはありませんでしたから、ここで製造された可能性が高いですね。」

「ふーん、なんでもまた、こんな所にこんな大事なモン置いとくんでしょうね？」

「・・・製造が間に合わなかつたのかもしれませんね。」

「戦闘に、ですか？」

「おや、うー。」

「ご主人様、コレ、頂いちゃいましょうよ。」

「良いですね。」

思いつきで言った言葉が、あつたと採用され、チカは呆気に取られた。

「……ほえ？」

「自分で言つておいて、何を驚いているのですか？」

心底意外そうな顔の主人。

「え……い、いや、こんなでつかいモノ、どうやつて持つてぐのかなー……なんて……。」

「動かせば良いだけの事ですよ。」

これまた簡単そうに言い放つシユウ。

「モニカ、こちらへノルスを持ってきて下さー。この要塞を奪つて逃げますよ。」

「分かりましたわ！」

「チカ、入り口を探して下せー。」

「りよ、了解でっす！」

この人に常識を問うのはやめよ。

移動要塞の入り口を探してゐる間、チカはそう結論付けた。

「……少人数でのゲリラ戦を想定した艦のようですね。」

艦のメインコンピュータが生きていたのは幸いだつた。
必要な情報を一通りわらう。

「あれ、ご主人様、この艦、武器付いてないですよ。」

操舵室をあちこち飛び回っていたチカが声を上げる。

「そのようですね。小型化したは良いものの、装甲と武装に難があつて実戦投入は見送られた……といった所でしょうか。」

「ふーん……まあ、こっちとしては、動けば儲けモノですからね

！」

シユウの情報収集が終わると同時に、モニカが操舵室の扉をくぐつた。

「見ない型の移動要塞であらせますわ。」

物珍しそうに周囲を見回しながら、楽しそうにモニカが呟く。

「ノルスの搬入は済みましたか？」

「はい、大丈夫ですわ。・・・これでサフィーネなんかに負けません！！」

気合が入った言葉と共にガツツポーズ。

「モ、モニカ様・・・？」

チカの視線に気付いて、モニカは慌てて居住まいを直した。

「あ、何でもありませんのよ。」

につこりと微笑むモニカは、しかし以前の彼女とは違う気がする。

「・・・恋は女を強くするって言うけど・・・」ここまでイメージ変わるもの珍しいなあ・・・いつかサフィーネ様みたくなっちゃつたら、どうしよう・・・。」

「そういうえば、シユウ様。艦の格納庫に魔装機の部品などがありますわ。使えるかも知れません。」

「お！お宝ですかい、ダンナ！？」

「確認は後にしましよう、動かしますよ。揺れるでしょうから掘まつていて下さい。」

メインエンジンに火が燈り、小柄な機体が微かに揺れる。

見捨てられた小さな艦は、ようやく燈った灯りに喜び震えている様だつた。

発進準備が整つた所で、基地格納庫の扉を抉じ開けグラソゾンが姿を現す。

無人の機体を収容し、艦は猛スピードで精靈の大地を駆け抜けていった。

水面下の戦い

何か重要な事を思い出したり、思いついたりするのは、いつだって突然。

例えば、ずっと詰まっていた理論の解決策を、眠りに落ちる直前に思いつく。

昨日まで、まったく解らなかつた方式を、今日になつたら簡単に見つけ出す。

覚醒、とでも言えば良いのか。

そんな瞬間はおそらく万人に存在する筈だ。それが多かれ少なかれ。ああ、なるほど。

シユウはひとりごちる。

酷く殺風景なブリーフイングルームの椅子に腰掛けながら、彼は唐突に全てを理解した。

記憶は未だ全ては戻っていない。

それでも、理解した。

これまでずつと感じていた違和感の正体を。

そして、思う。

やはり、今までの行動は間違つてはいなかつたのだ、と。

笑う。

可笑しかつた。

そして、待ち遠しい。

破壊神サーヴァ＝ヴォルクルスの復活。

「シユウ様？」

声に気付いて、シユウは振り返る。

そこには、どこから持つて来たのか、掃除用具一式を持つたモー力が居た。

「ああ、モニカ。」苦労様です。」

「すぐに使いそうな所だけ、とりあえず綺麗にしておかされましたわ。

」

言つて、にっこりと笑う。

王女にしては、妙に所帯じみた少女だ。

何回目かに会つた時は、確か城の中庭で洗濯物を干していた。

趣味です。

投げかけた疑問に、まだ幼い彼女は照れくさそうに笑つて答えた。

「（）主人様ー、サフィー・ネ様から通信でつす！」

グランゾンに待機させていたチカから知らせが届いた。

「有難う御座います、チカ。こちらに繋いで下さい。

「りょーかいでーす。」

しばらくの沈黙があつて、モニターが切り替わる。

「シユウ様！・・・あら、グランゾンではありませんのね？」

「ええ、途中でちょっとした拾い物をしまして。」

「まあ、そうですの。・・・それで、モニカ王女は見つかりまして

？」

「見つかりましたよ。丁度、ここにいます。」

モニカに少し用配せをすると、意を汲み取つてか、モニカがモニターの前に歩み出る。

「お久しぶりですわ、サフィー・ネさん。」

王女らしい、優雅な会釈を一つ。

「お元気そうで何よりですわ、モニカ王女。」

形式ばつた挨拶を返すサフィー・ネ。

笑顔を作つてはいるが、友好的なモノでは無い。

どこかねめつける様な視線がモニカに向けられていた。

「・・・生贊の元気が無くては、ヴォルクルス様の復活も巧くいくかどうか分かりませんものねえ。」

「イケニエ？」

突拍子も無い言葉に、モニカがきょとんとする。

「あら、聞いてらっしゃらなかつたの？」

意外そうに目を丸めたサフィー・ネだが、すぐに思い立つてか、サデイステイックな笑みを浮かべる。

「光栄に思つて下さいます。アナタはヴォルクルス様復活の為の、生贊に選ばれたんですよ。」

サフィー・ネの言葉に、モニカが顔色を変える。

「それは本当ですか、シユウ様！？」

シユウは応えず、視線すらモニカに向ける事なく、ただ静かに瞳を伏せる。

そんな一人の遣り取りを見て、サフィー・ネは愉快そうだった。

「あらあら、何も知らされてなかつたようですわね！アナタの生贊としての恐怖が、絶望が、ヴォルクルス様を復活させるのよ！…ああ、絶望に打ちひしがれた王女なんて、見物ですわね！ほーほほほほ！」

最後に高笑い。

グラソゾンの中で通信の中継をしていたチカは、シートの上でその台詞を聞いていた。

「…・ハマリすぎて、こえーよ、この人…。」

勿論、グラソゾンの中の音声も相手に届いてしまうので、あくまで小声である。

モニターの向こうに居るモニカは、少し俯いていたが、やがて意を決したように顔を上げた。

「…・分かりました。シユウ様が、それをお望みなのでしたら…・私は喜んで生贊になりましょ。私の命が、少しでもシユウ様のお役に立つのでしたら。」

そして浮かべた表情は、微笑み。

瞳を伏せたままのシユウは、動かない。

サフィー・ネは少し焦っていた。

明らかに今の遣り取りで、ポイントが高かつたのはモニカだ。

「あ、あの、シユウ様、私のシユウ様の為でしたら、生贊でも何でもなりますわ。」

慌てて言い繕つてはみるが、すぐさま、チカの突つ込みが入る。

「・・・・サフィー・ネ様、生贊つて処女じゃないとダメなんですよ?」

「うつさいわね!私だって、心はいつも処女よ!」

「なんだかなー。」

チカの嘆息を合図だつたように、シユウが伏せた瞳をゆつくりと開ける。

「・・・心配しなくても大丈夫ですよ、モニカ。貴女を生贊にするつもりはありません。」

『え?』

シユウの言葉に、三つの声が綺麗に揃つた。

「シユ、シユウ様、それは一体・・・。」

「元々、生贊という考え方自体がおかしいのです。要は、できるだけ純粹で、大きな、恐怖と絶望の感情が得られれば良いのです。処女だの王族の血だのに拘る必要など無いのですよ。」

「そ・・・それはそうですが・・・。」

サフィー・ネは戸惑つた。

生贊が必要でないなら、何故、モニカを連れ出したのか。

そもそも、ルオゾールに命じられた時点で、何故反論しなかつたのか。

脳に落ちない点が幾つも浮かんでくる。

「心配せずとも、ヴォルクルス様の復活は見事成し遂げて見せますよ。・・・それとも、私が信用できませんか、サフィー・ネ?」

呴かれた言葉に、サフィー・ネは慌てて首を振つた。

「ととと、とんでもありませんわ!私、シユウ様だけは、いつでも信頼しております!!」

「・・・その言葉、覚えておきますよ、サフィー・ネ。」

言つて、シユウは少し微笑んだ。

サフィーネが、舞い上がらんばかりの勢いで喜んだのはいつまでも無い。

わわやかな願い

地上に出た少年の本当の目的は、政府上層部の思惑とは全く別の場所にあった。

内なる声の命ずる儘に、力を蓄える事ならフ・ギアスでも出来る。自身を苛む破壊衝動を満たす事も、地下世界で事足りる。

地上でしか叶わない、少年の願いがあった。

だからこそ少年は、毛嫌いしていた政府上層部の人間とコンタクトを取り、言葉巧みに自分を地上へ送るよう仕向けた。

この時すでに地上へのゲートを単身で開く事も出来たが、それでは都合が悪かった。あくまでも、自分の意思で地上に出た事を隠しておきたかったのだ。

そうでなければ、少年の目的は達せられない。仮に達せられたとして、その事が他の人間に知れたら意味が無くなってしまう。

少年にとって“魔装機計画”は様々な意味で良い隠れ蓑になつた。練金学を学ぶにしてもアカデミーに出入りする理由が必要だつたし、研究という名目で監視の目を欺く事も出来た。全てはただ一つのさやかな願いを叶える為だつた。

母親を故郷に帰してやりたい。

少年のその願いは、しかし、意外な形で踏み躡られる事となる。

ノックの音が聞こえた。

今しがたまで伏せられていた瞳を薄く開き、シユウは応えた。

「開いていますよ。」

「邪魔するぜ。」

意外な程静かに扉を開けて、入つて来たのはイルムガルト＝カザハラ。

「おや、貴方でしたか。こんな時間に、何かご用でしょうか？」

横目でちらりと時計を見る。机の上に置かれた小さなデジタル時計は22時を示していた。

「なあに、ちよいと男同士の込み入った話でもしようと思つてね。」
おどけた口調とは裏腹に、イルムの瞳は鋭い光を湛えている。こういう手合いは厄介なのだとシユウは経験上知つていた。

「・・・構いませんよ。丁度、私も手が空いた所です。」

椅子から立ち上がりながら、来客用のソファを勧める。イルムは言われる儘ソファに身を沈めた。

「時間も遅いですから、ハーブティーでよろしいですか？」

「おやま、シラカワ先生直々に淹れて下さるんで？そりや光栄。お任せするぜ。」

シユウは棚からドライのリンデンフラワーとペーミントの瓶を取り出し、ティー・ポットにそれぞれ1：2の割合で入れた。

「沸かしててのお湯で淹れられないのが、残念ですね。」

「別に俺は英國紳士じゃ無えから、構わないけどな。」

「おや・・・拘りはお持ちの様に見えましたが？」

「モノによるわ。」

「なるほど。」

かちやりと小さな音を立てて、白いバラがあしらわれたティーカップが目の前に置かれる。

「マイセンか？凝つてるな。」

「良くご存知で。まあ、選んだのはモニカですが。」

「ああ、あのお嬢さんか。そんな感じだな。」

ポットから、淡い琥珀色の液体が注がれる。ほのかな甘い香りが立

ち上った。

「どうぞ。」

「どうも。」

自身のカップにもハーブティーを注ぎ、少し香りを楽しんでから一口飲んだ。そつとソーサーの上にカップを戻し、シユウは話題を切り出す。

「・・・それで、お話とは何でしょう?」

「アンタが居ない間に、大体の事はサフイーネちゃんから聞いたんだが・・・。どうにも腑に落ちない点があつてね。」

イルムはカップに入っているハーブティーを一息で飲み干すと膝の上で指を組んだ。

「サフイーネちゃんは、アンタらの目的を破壊神とやらの復活だつて言つてた。」

「ええ、その通りです。」

「俺が思うに、アンタは自身に何がしかの利害が無けりや決して自分から動く男じや無い。」

「・・・・・・」

「しかし、その破壊神だかの復活に、アンタの利害が見つからない。復活させたからつて、願いを叶えてくれる神さんじや無さそうだしな。」

「・・・確かに、ヴォルクルス神は私の願いを叶えてはくれないでしょうね。しかし、ヴォルクルス神が復活しなければ、私の願いは叶わないのですよ。」

イルムは射る様な視線でシユウを見据えていた。シユウはその視線を真っ向から受け止め、しかし微動だにしない。

「・・・そこまでしてアンタが求める“願い”つてのは何なんだ?」

「貴方には、きっと分からぬでしょうね。」

冷め始めてしまったハーブティーをゆっくりと飲み干す。

「“昔”も“今”も、求めているのはただたださやかな・・・。」

「

そう言って瞳を伏せたショウの姿は、ビックリが嫌な感じがするものだった。

何故それやかな願いすら叶わないのか。

田の前に広がる荒れ果てたその場所を、少年は怒りと悲しみとを持って見つめていた。

同ジ様ニ壞シテヤレバ良イ。全テヲ。

ああ、そつか、こわせばいいのか。おなじよつて。せんぶを。

闇と

少年が

瞳ついた。

女三人寄れば

サフィー・ネは操舵室の一角でプログラムと格闘していた。

普通のプログラムであれば、瞬時に彼女の虜にさせる事が出来るのだが、いかんせんプログラムがシユウとあつてはその作品も一筋縄ではないかない。

ようやく作業を終えた彼女に、後ろから声がかかる。

「お疲れ様ですわ、サフィー・ネさん。お茶になさりませんこと?」

「あー、貰うわ。後、さん付けなくて良いわよ、モニカ王女。堅苦しいのキライなのよ。」

「お分かりになりましたわ、サフィー・ネ。では、私の事も呼び捨てになさって下さい。仲間ですもの、対等がよろしいですわ。」

「・・・モニカ、文法変よ。」

サフィー・ネの言葉に、モニカがはにかむ。初めて友達が出来た、子供の様に。

お茶の準備をしてくる、と言つてモニカは小走りに去つていった。

「・・・対等な・・・仲間・・・か。」

モニカが去つた後、サフィー・ネはモニカの言葉を反芻する。

「・・・初めて言われたわ・・・。」

咳く彼女の横顔は、照れくさうに笑つていた。

ホーンで呼び出され、食堂に来てみればモニカとサフィー・ネが他愛ない話題で盛り上がつていた。

「邪魔をするぞ。」

リンは適当な椅子を選んで腰を下ろす。子供の様な笑顔の一人が待つていたのよと声を揃える。

差し出されたカップには琥珀色の液体が満たされていた。香りはアッサムティーに似ているが、水色はずつと鮮やかだ。

「・・・こい香りだな。」

「マラカのフラワリイオレンジペ」「ですわ。」

「私はコーヒーの方が好きね。」

「う言いながらもサフイーネの表情は満更でもなさそうだった。」

「・・・で、どうよ、リン。こっちの生活には慣れた?」

「ああ、お陰様で。雑務に追われない分、こっちの方が落ち着く位だ。」

「居ついたりえば良いのに。歓迎するわよ。」

「悪戯っぽく笑うサフイーネに、リンも笑い返す。」

「魅力的な提案だな。社長といつ肩書きをえなければ誘惑に負けたい所だが・・・。」

「あら、そうおっしゃればリンは会社をお持ちでらしたのですわね。」

「流石に、私一人の我慢で社員を路頭に迷わせる訳にもいくまい。」

「・・・何だかねえ。もつと自由に生きてても良いんじゃない?」

「いや、これも自分で選んだ道だ。忙しいなりに、満足はしているよ。」

「ふうん・・・ね、あっちの方はどうなの?」

含みのあるサフイーネの言葉に、リンは首を傾げる。

「あっち?」

「やあねえ、 の事よ。」

余りにストレートなサフイーネの言葉に、リンは思わず口に含んだ紅茶を吐き出しそうになった。

「サフイーネつてば、お下品でしてよ。」

「いーじゃない。で、どうなのよ?」

「い、いや・・・どう・・・って・・・その・・・イルムと・・・か・・・?」

急に狼狽し始めたリンを見て、サフイーネは愉快そうに笑う。

「リンつてば、見かけに寄りりずウブなのねー。」

「サフイーネがストレート過ぎるだけな気もなさいますわ。」

「うつさいわね。おぼこは黙つてなさいよ。」

「や・・・その・・・お互忙しい身だから・・・。」

「どんどん萎縮していくリン。ヒートアップするサフィーネ。何故か
平然とした顔のモニカ。」

「あんまりヤつてないの？ダメよ、そんなんじや。の方からドン
ドン誘つていかないど。」

「あら、女は慎ましやかに殿方からのお誘いをお待ちいたすもので
してよ。」

「そんな考えだからアンタは未だに処女なのよ。」

そういう問題ではない気がする。

「構いませんわ。私の純潔はシユウ様のものですから。」

「ふん、アンタみたいなカマトト女にシユウ様が振り向くモンです
か。」

「分かりませんでしてよ？私、シユウ様の為でしたら、どんな女に
でもなりますもの。」

「言つじやない。でもね、テクニックの無い女なんてすぐ飽きられ
てお仕舞いよ。」

「多少の知識は御座いますわ。」

「知識だけじやダメなのよ。要は実践経験なんだから。」

「何で二人ともそんな恥ずかしい話題で盛り上がるんだ。とリンは
カップに搖れる自分の顔を凝視しながら考えていた。

文化か？文化の違ひなのか？

どんどんとアツくなつていく二人の議論に挟まれ、リンは所在無さ
そうに紅茶を啜つていた。

捲っていた文献を閉じ、シユウは軽く溜息を吐いた。

「あらま、」主人様つてば、溜息吐くと幸せが逃げてくらしいですよ…」

お茶菓子として用意されたカシュー・ナッシングのクッキーを、器用に嘴で突付くチカ。今時小学生でも口にし難いそな事を平然と言う。

「…迷信ですよ。“幸福”など概念に過ぎません。要は自分がどう感じるか、なのですか？」

「んま！ネタにマジレスされちゃうとチカちゃん困っちゃいますよ！で、で、どうしたんですか、溜息なんかお吐きになつて。」

「チカ、品の無い物言いは止めて下さい。…少し予想外の事態が起きましたね。」

カップに半分程残っていた紅茶を飲み干す。すっかりと冷めてしまつたアルグレイは少し香りが弱い。グレイ伯を魅了した香りは、やはり淹れたての湯気と共に立ち上るあの香りなのだろうなと思つた。

「予想外ですか？何も問題なんか起きて無い気が致しますケド？」
「中途で生じた問題ではありますんからね。私とした事が、すっかり失念してしまつていた様です。」

頭の中で問題を整理し直す。儀式。生贊。執行者。場所。術者。やはり、足りない。何故こんな簡単な事に気付かなかつたのか。そう考えると自身の甘さに溜息を禁じない。

自身は執行者を演じなければならない。生贊の役はモニカ。儀式の方法は既に承知済みだ。場所も調べてある。足りないのは、術者。地上の一人には残念ながら魔力が無い。サフィーネも、幾分高まつてきたとはいえ、術者足り得るにはまだ魔力が足りない。

「…さて、困りましたね…。」

呴きながら、シユウは自身のデータベースを探る。魔力が高く、尚

且つ一時的にでも良いからこちらに協力してくれそうな人物。

魔力の高い人物は、往々にして教養も高い。そういう人物に、ヴォルクルスの復活を手伝えと言つた所で首を縦に振る筈が無い。話術には自信があるが、相手の意志力で大きく難易度が変わる。意志力は出来るだけ低い方が良い。

そこまで考えて、シユウの脳裏に一人の人物が浮かぶ。

人生の全てを諦めた様な、無気力を絵に描いた様な、それでも、自身の気付かぬ膨大な魔力を内に秘めた少年。

地上に出る前、幾度か言葉を交わした位だが、印象には残っている。机の上に置かれたホーンを取り、サファイーの部屋に繋ぐ。ワンドコールも終わらない内に、相手は受話器を取つた。

「サファイーですわ！」

何故か息を切らせて、サファイーがホーンの向こうで応える。

「急にすみませんね、サファイー。少々調べて頂きたい事があるのですが。」

「はいっ！何なりとお申し付け下さい！」

「・・・では、テリウスの居場所を調べて頂けますか？」

「テリウス？・・・テリウスって、あの軟弱王子のテリウスですか？」

軟弱王子。その言葉が聞こえたのが、チカが小さく噴出した。言い得て妙だとでも思つたのだろうか。

「ええ、テリウス＝グラン＝ビルセイアの居場所が知りたいのです。この戦乱で行方不明になつたと聞いていますが。」

「それでしたら、丁度先日情報が入りましたわ。なんでも、カーグスに保護されてるそうで。」

シユウが、ほう、と小さく声を出した。

今、ラングランの王座は空席になつてゐる。純粹な王位継承権保持者は三人。そして、そのラングランには今四つの勢力がある。その四つ、フェイルロード軍、カーグス軍、シユテドニアス軍、そして、自分達。四つの内三つに見事王位継承者第三位までが顔を揃えた形

になる。

フェイルロード軍はラングラン第一王位継承者であるフェイルロード＝グラン＝ビルセイア率いる正規軍。第二王位継承者であるモーカは手中に。そして、カーカス軍が第三王位継承者を手に入れた。シュテドニアスの力が日に日に弱まっていつている今、ラングラン奪還を旗印にしていた両雄がそう長く肩を組んで歩くわけが無い。フェイルロードには時間がないだろうから、尙更だ。

そこへ来て、無氣力な王位継承者を手に入れたカーカス。シュウは笑つた。

「どうしましたの、シユウ様？」

「……いえ、面白くなつて來たと思いまして……ククク……。

「ホーンから聞こえてくる冷たい笑い声に、サファイーはぞくりとした。

「ああ、あの冷たい瞳で蔑む様に見つめられたら！あの美しい脚で、踏みつけて貰えたら！」

全ての頂点に立つ様な、尊大なあの方を、屈服させられたら！理性の権化の様なこの方を、力で捻じ伏せ、組み敷けたなら！サファイーの脳裏を、様々なアブナイ妄想が駆け巡る。映像化された成人指定間違い無しだ。

「……ネ……サファイー、聞こえていますか？」

ずいぶんとトリップしていた様で、ホーンからは訝しげなシユウの声が聞こえていた。

「あ、も、申し訳ありませんわ。」

慌てて我に返るサファイー。

「……カーカスはおそらく早々にテリウスを王位に就けようとするでしょう。」

「あら、フェイルロードが居るのに……ですの？」

「ええ、カーカスが欲しているのは自分の意の儘になる傀儡です。民衆にカーカス軍の活躍が鮮やかな内に動く筈です。」

「・・・そんな事を、フェイルロードが許すモノでしょうか？」

「フェイルはまずラングランを平定する事を優先させるでしょうか
ら、表向きには同意を示すでしょう。それでも、黙つてはいない筈。
ラングランからシュウテドニアスが撤退し次第、フェイルも動くと思
いますよ。」

「では、その前にテリウスとコンタクトをお取りになるのですね。」

「ええ、その通りです。調べて頂けますか？」

「お任せ下さいまし、シュウ様。一日、お時間を下さい。必要な情
報を全て持つて参りますわ。」

「お願ひします。」

シユウは静かにホーンを下ろした。

椅子の背凭れに体重を預け、組んだ足の上で指を合わせる。椅子の
スプリングがぎしりと小さく音を立てた。

「ご主人様、ご主人様？」

「何ですか、チカ。」

「何でフェイルロードとカーケスが対立するって思うんですか？そ
のまま仲良くラングラン治める可能性もあると思うんですけど。」

「・・・チカ、貴女は自分で言つっていたではないですか。動物も、
植物も、上を目指し上る、と。」

シユウは静かに臉を下ろす。

「支配者の椅子は一つ。両雄が並び立つには舞台が狭すぎるのです
よ。」

伏せた瞳に何を映すのか、シユウの声は何処か哀しそうでもあつた。

ブリーフィングルームの小さな窓から、ウイーゾルの赤い機体が緑の大地を滑る様に駆けて行くのが見えた。

サフイーネの情報収集能力を、シユウは特に高く買っていた。もつとも、本人は前線に立つて戦うのが好きなようだつたが。

「あら、サフイーネはお出かけになられてしまいましたのね。一緒にお茶でも飲もうかと思われましたのに。」

後ろから窓の外を見ていたモニカが残念そうに呟く。

「・・・モニカ、また文法が変ですよ。」

「ふふ、個性的な女性は魅力がある、とイルムが言つて下さいましたわ。」

「それは良かつたですね。」

「シユウ様は仰つて下さいませんの?」

すつとシユウの横にモニカが立つ。陽光に、栗色の髪が美しく輝いた。

「・・・貴女の淹れる紅茶は、今の所、他に並ぶ物が無いと思つていますよ。」

「まあ!」

モニカの表情が華やぐ。

「では、シユウ様、お茶になされません事? マカラティーのフラワリイオレンジペコが御座いますの。」

「おや、それは良いですね。淹れて頂けますか。」

「お任せ下さい。サフイーネも、この紅茶は好きだつて言つてましたわ。」

モニカの言葉に、シユウはおやと思つた。

サフイーネ。さつきも確かにそう言つた。昨日まで“サフイーネさん”と呼んでいた筈だ。

「モニカ。」

呼び止める。

「はい、何でしょ、シユウ様？」

無邪気な笑顔で振り向くモニカ。

「・・・サフィーネと、随分仲良くなつたのですね。」

「ええ、仲間ですもの。サフィーネも、モニカと呼んで下さいますのよ。でも、ライバルでもあられますから、油断はされませんわ。絶対に、負けないつもりに思われますの。」

「・・・ライバル？」

「あら、シユウ様、それは聞いてはいけない事でありますよ。」

無邪気な笑顔から意味深なそれに変えて、モニカが笑う。

「では、お茶を淹れて参りますわ。」

くるりと踵を返し、軽やかに走り去る少女。その後姿を見送りながら、シユウは眉根に皺を寄せていた。

「・・・ライバル？」

いまいちピンと来ない言葉に首を傾げる。

その様子を机の上で見ていたチカは、ニヤニヤと楽しそうに笑っていた。

「・・・どうしました、チカ？」

「いえいえ、なーんでもありませんよー、うふふー。いいな、いいな、あまーつぱーい。」

チカの意味不明な言葉に、シユウの疑問は増えるばかりだった。

稼動していたブラックホールエンジンを止め、リンはコンピュータの画面を睨んだ。

ヒュックエバンから送られてきたデータを整理する。並んだ数字の大きさが示すのは、安定性の無さ。

随分と改良を加えた筈のこのエンジンですが、この数字。リンの表情は少し厳しい物になっていた。

「・・・ふむ、どうしたものか・・・。」

「あつれー、リンちゃん、こんなトコで何してんのー?」

後ろから聞こえた能天気な声に、リンは振り向きもせず応える。
「見てわかるだろ?、イルム?ヒュッケバインのテストだ。元々、
テスト起動する予定だった物ごとにひっさに来てしまったからな。少
しでもデータを取つて帰りたい。」

「お仕事熱心です事。」

「悪いか?・・・自社製品が不名誉な渾名をいつまでも戴いたま
とはいかんだら?。」

リンの眉根に皺が寄る。イルムは手を伸ばして、その皺を突付く。
「リーンちゃん、あんまり根詰めちや駄目だぜ。せっかくのキレイ
な顔が台無し。」

「ばつ・・・!な、何を戯けた事を言つている!?」

真っ赤な顔でイルムの腕を払う。この程度の事でいちいち照れる自
分が恨めしかつた。

「まあまあ、せっかく景色の良いトコに来たんだし、ちよつとは息
抜きしようぜ。ほら、ケーキ買って来たんだ。」

「う・・・。」

差し出されたケーキの箱と、イルムの顔とを交互に見比べ、言葉に
詰まる。

自分のイメージとかけ離れてるだらうから、と秘密にしてるのだが、
リンは甘い物に目が無かつた。

イルムの笑顔が忌々しい。その笑顔に見惚れてしまつ自分が、もつ
と忌々しい。

「・・・・・もだ・・・。」

「ん?何、リンちゃん?」

「・・・」、紅茶も・・・だ。・・・ケ、ケーキには紅茶・・・だ

う・・・・?」

それだけ言うのが精一杯で、リンは真っ赤にした顔を下に向けてし
まう。

「おつと、俺とした事が、そんな事も気付かないなんて！」

イルムは、そんなリンの様子をからかうでもなく、いつものように、ちょっと大げさな台詞を吐いてみせる。

「じゃあ、食堂に行こうぜ、リン。」

言って差し出されたイルムの手を、リンは躊躇いがちに取る。こちらも吹き荒れるは甘酸っぱい恋の嵐。

「いやー、皆さんが女でいらっしゃいますねー。」

「・・・だから、何の事です、チカ？」

「いえいえー、うちのお話ですよー。うふふー、レモンの味ですねー。」

「それはファーストキスではありません事？」

「あれ、そーでした？まあどうにしてもあまりっぽーい。あまり

つぱーい。」

「うふふ、そうですわね。」

「・・・一人とも、一体何を言つてこるのでしょー？」

悪戯好きの鴉

約束通り、きつかり一日でサフィーネは戻ってきた。シユウの姿を認めるや否や、凄い勢いでウイーゾルから飛び降り、駆け寄つて来る。

「シユウ様！モニカに変な事されませんでした！？」

開口一番に出た台詞に、シユウは顔を顰めた。

「いきなり何です？」

そんな二人の間に、モニカがすいと割つて入る。

「心外でしてよ。変な事したいのは、サフィーネ、貴女でしょう？」

「あら、良い度胸じゃないの。」

乙女一人の背景に燃え盛る赤い炎。

その炎が見えているのかないのか、シユウは我関せずといつた風だ。当事者なのに。

「・・・ところで、サフィーネ。首尾は如何でしたか？」

「あ、ハイ！今、テリウス王子はバランタイン州のクサカ市にいます。どうします、強引に攫つちやいますか？」

サフィーネから記録用の端末を受け取つて、シユウは首を横に振つた。

「いえ、あくまで彼が自主的について来てくれなくてはならないのです。ですからまず、彼と会つて話をするのが先決ですね。」

「でしたら良い方法がありますわ。彼は特定の時間に魔装機の操縦訓練を受けていますから、その時に私達が騒ぎを起こせば、“隠れ蓑”なり“隠行の術”なりで簡単に近づけると思います。」

「なるほど、良いアイデアです。ともあれ、今日はゆっくりと休んで下さい。お疲れ様でしたね、サフィーネ。」

「シユウ、少し良いか？」

部屋に戻る途中の廊下で、リンに呼び止められた。

「何でしじう、リン。」

「これを見て貰いたいのだが。」

差し出された用紙には、不規則に並んだ数字達。

「これは・・・。」

「ヒュッケバインに搭載されているブラックホールエンジンの出力だ。」

「安定がありませんね。」

「・・・そなたなんだ。これでも随分とマシになつた方なんだが・・・。」

「」

シユウは小さく唸る。

「グランゾンのブラックホールエンジンは、『保存』の呪文にて安定させています。」

「呪文?」

「ええ、ですから、私以外が乗つてもまともには動作しません。」

今度はリンが唸り声を上げる。

「・・・という事は、ヒュッケバインの出力を安定させるのは不可能なのか?」

「ブラックホールエンジンの出力をフルに使おうとすれば、安定させるのは難しいでしじうね。出力を犠牲にすれば、不可能ではありますよ。」

「本当か!?」

リンの声に喜色が混じる。シユウは軽く頷いて見せた。

「要は、ブラックホールの大きさが常に一定であれば良いのです。高出力にしじうとすれば、ブレもまた大きく成らざるを得ません。」

「なるほど・・・。」

「安定する数値を見つけて、必要であればコミッターを付ける事ですね。」

「分かった、感謝する。」

柔らかい表情に戻ったリンを見て、シユウも少し笑う。

「良ければ後でサフィーネに見させましょうか？彼女はメカニックとしての腕も中々の物ですよ。」

「それは助かる。早く“凶鳥”からただの悪戯好きの鴉に戻つて欲しいからな。」

「鴉は賢い鳥ですから、きっと解つてくれますよ。」

「そうだな。」

顔を見合させて笑う。

廊下の窓からは柔らかい光が差し込んでくる。冬とはいえ、その光は暖かい。

「あ、こんな所にいたんですか、ご主人様！モニカ様達が探してましたよ！」

「ええ、今行きますよ。それでは、リン、また後で。」

「ああ、時間を取らせてすまなかつた。」

お互に簡単な挨拶を交わし、別れる。

「ご主人様、リン様と何話してたんですか？」

道すがらチカが聞いてくる。シユウは笑つて答えた。

「悪戯鴉が不整脈で困つてているそうですので、簡単な診察をして差し上げていたのですよ。」

「あらま、かわいそうなカラスさんです事！同じ鳥として同情しますわー。」

意味を分かつているのかいののか、チカはいつもの軽い調子だった。

テリウス＝グラン＝ビルセイアは暇を持て余していた。

正確には暇ではないのだが、課された課題のどれ一つを取つてもやる気を出せないでいる。

そんなテリウスの様子を見て、教育係を任せられたミラ＝ザニア＝ライオネスは密かに溜息を吐いた。

「王子、課題は進みましたか？」

耐えかねて声をかけてみても、やる気の無い声が返つてくるだけだ。

「ミラか・・・これが進んでるようだ見えるかい？」

白紙のノートをこれ見よがしに広げる。積み上がった本には手を触れた形跡すらない。

「・・・王子、貴方は未来のラングランを背負つて立つお方です。もつとしっかりなさつて下さい。」

「なんでぼくなのさ。兄さんがいるだろ？」

「カーカス将軍が、貴方の方が適任だと判断なされたのです。」

テリウスはミラの言葉を鼻で笑う。

「・・・そりや、カーカスにとつちやぼくのが適任だひつさ。彼が欲しいのは思い通りになる王様だろ。」

「王子！」

ミラが声を荒げる。カーカスは彼女にとつて、例え何を企んでいようとも、立派な上官だ。侮辱は許されない。それでもテリウスは続けた。

「違うなんて言わせないよ。まあ、何でも良いさ。ぼくに選択権なんか無いんだから。」

不貞腐れた様に、真っ白なノートを投げ捨てる。

「こんな事したって無駄だろ?ぼくは何をするでもないんだ。ただ玉座に座らされるだけの人形さ。」

「・・・そんな事はありません、王子は・・・。」

ミハの言葉を鬱陶しそうに手で遮り、テリウスはソファに寝そべつた。

「昼寝する。魔装機訓練の時間になつたら起こしてよ。」

「魔装機の訓練は受けて下さるのですね。」

「・・・外に出れるからね。」

「テリウス様・・・。」

「眠いんだ。さつやと出でつてくれよ。」

「ごろりと背を向けてしまつたテリウスに、それでも一礼をして、ミラは部屋を出る。

伏せた瞼が見せる赤黒い闇の中で、テリウスは扉が閉まる音を聞いていた。

シユウにより“グナイン”と名付けられた移動要塞はバランタイン州の程近くに来ていた。

ブリーフィングルームに集まつた全員の顔を一通り見回して、シユウは口を開いた。

「今回、皆さんにお願いしたいのは陽動です。」

シユウが右手を掲げると、その場にうつすらと地図が浮かび上がる。「目的地はクサカ市、その近くにあるカーブス軍本陣の注意を、一時的に構いませんので、引いて下さい。」

「質問。」

イルムが軽く右手を挙げる。

「どうぞ。」

「開始時間と終了時間は?」

「開始時間は今から一時間後、機体のメンテナンスは既に終わっていますのでご心配なく。申し訳ないですが、終了時間は分かりません。なるべく短時間で済ませますが、もし私が戻る前でも、危なくなつたらいつでも退いて頂いて結構です。」

「了解。」

「では、各人の健闘を祈ります。」

一時間後、グナインはクサカ市のすぐ近くにある森にその身を隠していた。小柄な体躯と、外装に施された迷彩の魔法によって、その姿はよっぽど注意深く視なければ認められない程だった。

格納庫で各々が機体の最終チェックを行う。

全員のチェックが終了したのを確かめて、サファイー・ネはシユウに通信を入れる。

「それではシユウ様、私達は先に出撃いたしますわ。」

「気をつけて下さい。くれぐれも無理をしないようだ。貴方々は、大事な私の仲間なのですから。」

返ってきたその言葉に、サファイー・ネの顔が赤らむ。

「そんな・・・勿体無いお言葉・・・。」

大事な。シユウにそう言われ、表面上は何とか平静を装ったサファイー・ネだが、その内面は踊り出さんばかりの喜びようだ。

「・・・大事な・・・私の大事な・・・ですって!きやーーーもー、シユウ様あ!ーーー!」

通信が切れた事を確認した後、サファイー・ネはしばらくコクピットの中で悶えていた。・・・多分、モニカも。

「よっしゃーー!キッチリいつたろーか!」

サファイー・ネは気合一発、カーカス軍本陣の真っ只中に砲弾を撃ち込んだ。

「ま、お下品。」

クスクスと笑いながら、同じように戦闘態勢を整えるモニカ。

「作戦時間が分からぬ以上、あんまりド派手にはやりたくないね。」

「

「そう言つた所で、注意を引かねばならんのだから、多少は派手に暴れねばなるまい。」

「そーなんだけどねー。」

「せっかくブラックホールエンジンを改良して貰つたんだ、良いデータを取りたいものだ。」

計器の全てが正常値なのを確かめて、リンは満足そうに笑つた。

「お、おいでなすつたぜい。」

突然の襲撃に、多少動搖しながらも、次々と現れる魔装機達。幸いにも、地上の兵器と魔装機神は居ないようだった。

「さあ、仔猫ちゃん達、この紅蓮のサフィー・ネが相手よー！精々、楽しませて頂戴ーーー！」

「シユウ様、大丈夫かしら・・・。」

「さーて、一発かますとするかーーー！」

「・・・行くぞ！」

四機が同時に地を蹴つた。

テリウス

本陣の方から煙が上がっているのが見えた。

テリウスは興味がなさそうだったが、ミラにとっては気が気がでなかつた。

その方角から来たルジャノールを、だからミラはすぐに見つけた。声を張り上げる。

「どうした、何があつた？」

「て、敵襲です！」

息を切らせながら、兵士は叫んだ。

「敵襲だと？ バカな、シュテドニアスがここまで来れる筈は無いだろ？！」

バランタイン州はラングラン王国國土の丁度中央辺りに位置する。シュテドニアスからもバゴニアからも距離があるこの州は、だから要人を保護するに当たつて打つてつけの場所だつた。

「い・・・いえ、それが・・・シュテドニアスではありません！」

兵士が言い淀む。ミラに続きを促されて、震える声でようやくその名を吐き出した。

「ぐ、紅蓮のサフィーネです！…」

「サフィーネだと！？」

ミラの声にも驚きの色が混じる。

「・・・どういう事だ・・・まあ、良い、私もすぐに行く！」

その返事を聞き、兵士は慌てて戦線に戻つて行く。

ミラは、後ろで退屈そうに空を見ていたテリウスに深々と一礼する。

「申し訳ありません、王子。しばらくここを離れます。くれぐれも、ここをお離れになりませんよう。すぐ戻りますので。」

テリウスはミラに見向きもせずに手を振つた。

「・・・いつてらっしゃい。ゆっくりしてて良いよ。」

走り去つていく靴音だけを聞いて、テリウスは宛がわれた魔装機ガ

ディフォールの足元に寝転がつた。

欠伸を一つ。

「ふん・・・毎回無意味な事やらせて、何になるんだか・・・。ど
一せ、ぼくは飾り物の王位に就けられるだけなのに。」

ぼんやりと眺める空には雲が風に運ばれている。なす術もなく流さ
れる雲は、周囲の成すが儘にされいる自分に、何処か似ていた。

「・・・思えば、昔からそうだ・・・。」

自分がアルザールの子だと知ったのは、母親が死んだ時だった。母
親の遺書に、私が死んだら父親を頼りなさい、という言葉と共に添
えられた指輪。その指輪に刻まれていたのはビルセイア王家の紋章。
他に身寄りも無かつたので、そのまま王宮暮らしをする事になった
彼は、事在る毎に腹違いの兄と比べられる羽目になった。

フェイルロード様は。フェイルロード様なら。フェイルロード様の
様に。

結局、誰一人として“テリウス”という人間を見てくればしなかつ
た。

「どうせぼくは役立たずさ。」

何てつまらない人生。

本当に?

当然さ。

本当にそう思つてているのですか?

だって、ぼくには取り柄がない。

「本当に、そう思つてているのですか、テリウス?」

「え?」

突然耳に届いた言葉に、テリウスは飛び起きた。

「貴方に取り柄が無いなど、本当に思つているのですか?」

傍で語りかけられている。声の近さで分かる。周囲を見渡す。人影
は、無い。

「だ、誰だ!?」

叫ぶテリウスの目の前に、ゆっくりと景色が歪んで、濃紺の機影が

現れる。徐々に輪郭を見せるその機影は、魔装機では無い直線的なフォルム。

血色の掌に佇む人物がこちらに言葉を向けている。その人物に、テリウスは見覚えがあつた。

「私ですよ、テリウス。」

「クリストフ！？」

紫紺の機体が跪き、その手を大地に下ろす。掌から軽やかに、彼の従兄弟は降り立つた。

「久しぶりですね、テリウス。」

「び、びっくりしたじゃないか！ 一体いつの間に！？」

「貴方が此方に居ると聞いて、顔が見たくなりましたので。」

「・・・今のぼくを笑いにでも来たのかい？」

すっかりとやさぐれた様子のテリウスを見て、シュウは苦笑した。

「随分と苦労をしているみたいですね。」

シュウの言葉を肯定するようにテリウスは溜息を吐いた。佇むガディフォールの足を背凭れに寄りかかる。

「見ての通りさ。」

肩を竦めて自嘲気味に笑う。

「テリウス、貴方は今の儘で良いんですか？」

シュウはテリウスの目を見つめ、真っ直ぐに問い合わせてきた。

「いつも誰かの言いなりになつて、自分自身の事ですら、自分で決められない。・・・それで、満足ですか？」

「君に・・・君に何が分かるって言うんだ！？」

思わず叫んだ。魔力もあり、知力もあり、幼くして城の中の誰よりも剣術、魔術ともに優れていた従兄弟。

能力全てに恵まれた人物に、自分の惨めさなど分かるものか。そう思った。

「・・・全て、分かりますよ。」

返つて来た応えに、テリウスははつとした。彼の出生を、思い出したからだ。

地上人を母に持つが故に、秀でた能力を持ちながら、疎まれ続けた従兄弟。

感情の読み取れない彼の、しかし、内に渦巻いているそれはいかなるものなのか。

バツが悪そうに視線を逸らし、テリウスは呟いた。

「・・・悪かったよ。・・・でも、仕方ないだろう。ぼくは、君やフェイル兄さんみたいに魔力が高いわけでも、頭が良いわけでもない。・・・魔装機だつてろくに扱えやしない。」

「・・・それで、何もかも諦めた・・・そう言いたいのですか？」

「だったら、どうだつて言うのさ？」

視線の先に、ガディフォールの爪先がある。真新しいその輝きは、どこか毒々しさすら漂わせた。

「テリウス、貴方は自分で自分を型に嵌めているだけですよ。努力もせずに、自分の殻を打ち破る事などできませんよ。」

シユウの言葉に、テリウスはかつとなる。努力していないと思われたのが癪だった。

「努力はしたさ！でも、ぼくには才能なんてないんだ！！君や兄さんとは違う！！！」

叫んでから、気付いた。こんなに感情的になつたのは、一体いつ以来なんだろう、と。彼は、自分を“フェイルロードの弟”ではなく“テリウス”として扱つてくれているのではないか、と。

「テリウス、貴方に才能が無いなどと、本当に思つてているのですか？」

「・・・クリストフ、ぼくは・・・。」

「貴方の力が、私には必要なですよ、テリウス。ビルセイアの血ではなく、テリウスという個人の力が。」

テリウスは息を呑んだ。

必要。自分が。身分ではなく、個人として。

「・・・ぼくに、君の仲間になれつて言うのかい。破壊神ヴォルクルスを奉じ、背教者になれつて言うのかい？」

気持ちは、傾き始めていた。それでも、破壊神を崇める気持ちは湧かない。そんなテリウスの気持ちは察したのか、シユウは首を横に振った。

「破壊神を奉じる必要などありませんよ。ただ、私に力を貸して欲しいだけです。」

「…………君の言う力が何か分らないけど、ぼくにそんなモノは無いと思うよ…………」

「貴方自身が気付いていないだけですよ。私なら、貴方の眠った才能を引き出して差し上げられますよ。」

「こまでも平凡だと思っていた自分を、しかし、彼は才能があると言つ。非凡な彼が。そして、必要だと言つ。」

「…………言つただろ、ぼくに才能なんて、無いよ。」

呟く彼の言葉は弱々しかつた。

一個人として、自分を必要としてくれている。今、周りに居る連中とは違い、人形としてではなく人間として扱ってくれる。そんな人物の傍に行く。それはもしかして、物凄く魅力的な事なのではないか。

「ぼくに…………才能なんて…………。」

誘惑を断ち切るように、もう一度呟いた。いつそ強引に攫つてくれれば、頑なに拒む事も出来たのに。そんな事を思った。

「分かりました。」

シユウは頷いた。自分の言葉に、失望した風でもなければ、期待通りという感じでも無い。ただ在るが儘を受け入れた、そんな雰囲気だつた。

「今日は、もう帰りましょう。…………ただ、これだけは覚えていて下さい。貴方が自分の意志で行動すれば、必ず道は開けます。まずは、自分から動かなければ、世界もまた動かないのですよ。優しく、子供に言い聞かせる様な穏やかな声。

「…………自分で…………動く…………ぼくの、意志で…………。」

「貴方が目覚めるのを、待っていますよ。では、また会いましょう。」

「再会を確信しているその声。別れを惜しむでもなく、彼は背を向ける。

主人に跪いたままだつた機兵の掌に乗り、最後にもう一度、テリウスに向かつて微笑みかけた。

「クリストフ・・・ぼくは・・・・・！」

テリウスの言葉に構う事なく、紫紺の機兵はその姿を消した。後に残るのは自分の声の残照と、そよぐ風。

「・・・ぼくは・・・・。」

自分の手を見つめ、眩ぐ。

ぼくは。

何をしたいのだろう。

ぼくは。

何ができるのだろう。

ぼくは・・・。

テリウス、貴方は私の、自慢の息子なのよ。

幼い頃、母親から貰つた言葉。

「ぼくは。」

そつと空を仰ぐ彼の瞳は、強い光を湛えていた。

其々の戦

バーニアペダルを踏み込む。

加速は幾分悪くなつた氣がする。それでも、後方に見えるゲシュペンストとの距離からそれなりのスピードが出でている事が分かつた。各計器、いたつて正常。

敵陣の真つ只中に突つ込む。狙いを付けずにミサイルランチャーを射出。着弾と同時に爆発。舞い上がる土煙に紛れて右手のプラズマソードを振るう。

切り離された腕が、ずしりと重い音を立てて地に落ちる。そのまま敵機の頭を掴み、手近な機影に投げつける。縺れ合つて倒れる二機に向かい、リープ・スラッシュャーを撃ち出した。

未だ收まらぬ土煙に隠れて、リープ・スラッシュャーは標的を両断した。

誠に以つて重畠。

リンは笑つた。

敵陣真つ只中に単機突撃して行つた相方を、イルムは苦笑いと共に見ていた。

本人は否定するのだが、彼女は意外と好戦的だ。

出会つたのは、とある仕官学校で、その頃は酷い男嫌いだった。口癖は“男に出来て、女に出来ない訳が無いだろう”。結局、彼女はその学校を主席で卒業した。

そんな彼女に、おそらく、生まれて初めての敗北を味わあせたのが自分だつた。

仮想空間での擬似戦。

当時、学友の中で、イルムは飛びぬけた実力の持ち主だった。それを聞きつけたリンが、果たし状を突きつけてきたのだ。

結果は、イルムの辛勝。報酬は、デート一回。

その後も何度も模擬戦を行うのだが、結果は辛勝と惜敗が半々。自分が勝てばデートに付き合つて貰う。リンが勝てば食事を奢る。そういう名目で何度も一緒に出かける内に、段々と打ち解けてくれる彼女が可愛かった。

そして、十年。すれ違ひも多いが、意外で通じ合える事も多くなつた。自分の背中を託せる人物は彼女しかいないだらうし、彼女の背中を護るのは自分しかいない。そんな自負がある。

もうもうと立ち込める土煙に向かつて、ニコートロンビームを撃ち込む。魔装機とやらの足の装甲を抉り取り、撃ち出したそれは地面に着弾した。

「当たつたらどうしてくれるつもりだ。」

リンから、苦情の通信が入つた。イルムは唇の端を歪めて見せる。

「当たる気なんか、無いくせに。」

「フン、当然だらう。」

軽く目配せし合い、同時に笑う。

ゲシュペNSTを走らせ、土煙に突つ込む。

目指すは、愛しい愛しい彼女の背中。

「さあ、死にたいヤツからかかつてきな！」

後ろから衝撃があつた。

見れば、量産型のギルドーラが銃口をこちらに向けている。

「あら、イキナリ後ろからだなんて、大胆なボウヤねえ。」

振り向いた赤い悪魔に恐怖したのか、一度、三度と狙いの定まらない射撃をしてくるギルドーラに、サフィィーネは嗤つた。

「ダメよ、ボウヤ。そんなんじゃ、私はイカせられなくてよー！」

コントロールクリスタルからの意志を受け、ウイーゾルが走る。ローズカッターと名付けられた、鞭状のそれを打ち振るう。まずは左足。片足を切り落とされ、バランスを崩した機体の、更に右足を打

ち据える。

無様に天を仰ぐギルドーラの頭を踏みつけた。

「おーほほほほー!! ほら、私の靴をお舐め! “女王様、お許し下さい” って言つて『ご覧なさいな!!』

踏みつける足に、力を込める。金属が拉げる音がした。

脱出装置が作動して、乗つっていた兵士が逃げ出すのが分かった。

「・・・何よ、もうお仕舞い?・・・つまらないの。」

興醒めだとばかりに、足の下にある金属の塊を蹴り飛ばす。

宙を舞うその塊が、地面に落ちる瞬間に真正面からレールガンが跳んで来る。咄嗟に取つた回避行動のお陰で、クリーンヒットこそ免れた物の、肩の装甲を持っていかれた。

「ああん! いいわあ・・・。そつよ、そうでなくっちゃーさあ、もつと楽しませてえ! ! !

悦びに打ち震えながら、ウイーゾルは更なる獲物を求めて舞つた。

「まさか、貴女と共に戦場へ赴く事にならうとは、思にもしませんでしたわね、ノルス。」

目の前の戦闘をのんびりと眺めながら、モニカは呟いた。応える様に、コントロールクリスタルが淡く光る。

「ねえ、聞いて下さる、ノルス?」

こちらの存在に気付いたレンファがガトリング・ガンを構えるのが見えた。

「私、決めましたの。」

撃ち出される弾を、ノルスは踊る様なステップでかわす。

「今まで、私は常に護られる立場におられましたわ。それが当然と思われてましたの。」

ノルスの、澄んだ泉の水を思わせる、ヒメラルドグリーンの装甲が輝いた。胸部にあしらわれた宝石に光が集まり、そこからまた両手に集約する。

「・・・でも、もう護られるのなんて『免被りたい』のです。王子様が助けに来てくれるまで、お城で黙つて待つて待つてなんて、もう出来ませんの。」

突き出したその両手から、光が迸る。それは害意を具現化した魔力。害意が圧力となり、レンファの装甲を軋ませる。

「の方の、シユウ様のお傍に居る為でしたら、どんな事でも致すつもりが御座いますわ。」

圧力の前にその歩みを阻まれるレンファと距離を縮める。どこか優雅で、それでも確かな凶暴性を内に秘めて、ノルスがその爪を振るう。

「・・・例え、この手を汚す事にならうとも!」

オリハルコニウムの爪が、レンファの装甲を剥ぎ、骨組みを軋ませ、ケーブルを引き裂く。剥き出しになつたその内部に、モニカは自身の魔力を物理的な力に換えて叩き込む。狙うは心臓部、永久機関。手応えを感じて、モニカは機体を引く。見計らつた様なタイミングで、レンファの肢体は弾け飛んだ。

「・・・貴女にも、一緒に汚れて頂く事になられますわ。地獄まで、ご一緒下さいまし。」

自らの手で引き裂いた初めての犠牲者を、モニカはどこか冷たい眼で見つめていた。

シユウが戻りついた時には、もう随分の数の魔装機が、その身を地面に横たえていた。

「これは・・・お見事ですね。」

シユウの言葉にモニカとサフィー・ネは上機嫌だった。

リンは改良したブラックホールエンジンの調子に満足そうだったし、そんな彼女の様子にイルムも満更ではなさそうだ。

「シユウ様、テリウスはいかがであられました?」

「権力争いに巻き込まれて随分と苦労しているみたいでしたよ。」以前会った時に比べ、やさぐれ具合に磨きがかかつていて従兄弟を思い出して、シユウは少し笑った。

「・・・では、テリウス王子は同行しなかつたのですか！？」

サフィー・ネが信じられないと言つた感じの声を上げる。

「テリウスつたら、相変わらずなんだから・・・」

溜息と共に、異母弟への不満を漏らすモニカ。

二人共、テリウスがシユウに誘われた事を羨んでいるのだ。

「良いのですよ。彼が自主的に動かなければ意味がないのですから。

」

そんな一人を宥める様に、シユウが笑う。

「それに、手応えはありました。彼は動きますよ。」

シユウが確信している以上、二人に異論がある筈もなく、基より異論の挟みようの無い一人を加えて、五機はグナインへと帰還して行つた。

其々の戦場を後にして。

背後を振り返り降り帰り、テリウスはガディフォールを駆つた。
少しでも遠くへ、一步でも前へ。

未だ慣れない魔装機の操縦。プラーナの配分方法も、機体の詳しい
スペックも分からぬ。

それでも、前へ。遠くへ。

彼の許へ。

夜も明け切らない仄暗い空を、一機の鷹が疾走する。
喘ぎ声が聞こえた。自分の声だ。

疲弊していくのが分かる。だが、それがどうしたと言うのか。
今は、少しでも、自分を閉じ込めたあの籠から離れたかった。

グナインの食堂で、五人は朝食後のコーヒーを楽しんでいた。
いつも食後はモニカの紅茶なのだが、今日はシユウの要望で「コーヒ
ー」が用意されている。

生豆から丁寧に焙煎され、挽き立てを丹念にドリップしたそれは、
紅茶に劣らぬ芳醇な香りがある。

普段余りコーヒーを飲まないモニカは、サフィーネに細々とした事
を聞いていた。

「皮がクセモノなのよ。焙煎する段階で、丁寧に取らなきゃ良い香
りは出せないのよ。」

サフィーネは、『自慢の一杯が皆の賞賛を浴びた為か、『満悦だつ
た。

全員が一杯目に取り掛かつた辺りで、モニカが口を開く。

「そういえば、シユウ様。何故テリウスをお誘いになられましたの
？あの子が何かの役に立つとも思えないのですが・・・」

さらりと弟を罵倒する姉。彼女の記憶に残る彼は、セニアにからかわれ、兄に泣きついている姿ばかり。とても想い人の力になれるとは思えない。

その姿を知っているシユウは、コーヒーを飲み干し、少し笑つた。

「周囲の環境と、本人の思い込みの所為もあるでしょうね。彼の性格は。」

「そんなに酷い性格なのか？」

余りの言われ様にリンが興味本位で口を挟む。

「・・・なんと言われましようか、自分から何かをしよう、という

気持ちが無い子なのですね。無気力というか・・・。」

「おやおや、それはいけないな。男は自分から積極的に行かないと。ね、リンちゃん。」

「お前と足して2で割つてやれ。」

下らない話題を肴に皆でコーヒーを啜る。

BGM代わりにつけていたクリスタルヴィジョンが“緊急速報”的四文字を映し出した。

次いで映し出された映像は、王都ラングランにある祭儀用の神殿。シユウの視線が、クリスタルヴィジョンに向く。つられて全員がそちらを見る格好になつた。

『・・・日に予定されておりましたテリウス殿下の戴冠式が、予定を早めまして、本日行われる事になりました・・・。』

原稿を読み上げるアナウンサーの言葉に、シユウは疑問符を浮かべる。

「・・・妙ですね・・・。何故今更戴冠式を、しかもこんな時間からわざわざ早めて行う必要があるのでしよう?」

注意深く映像を見る。祭儀用の神殿に設えられた祭壇。その前に立つ大神官とテリウス。貴賓席には、カーキスと遠戚達。

「・・・フエイルロードが出席していませんね・・・。」

「え? お兄様がご出席なされませんの?」

「変ねえ。ラングラン国民に正当性を訴えかけるなら、フエイルが

出席した方が好都合でしょうに・・・」

それそれが不審がる目の前で、クリスタルヴィジョンは淡々と映像を送り出し続ける。

『・・・厳かな雰囲気の中、今、ラングラン王国第288代国王、テリウス＝グラン＝ビルセイア様の戴冠の儀が行われようとしています。大神官ザボト卿の即位宣言が、しじまの中に木霊しています』アナウンサーが決まりきった文句を吐き出し、映像は誇張された幻想的な景色をこれ見よがしに流す。

『・・・において、精霊の祝福とともにあり、そなたが母、ナタリア＝ゾラム＝ラクシユミーとそなたが父、アルザール＝グラン＝ビルセイアの・・・』

大神官の前に傳ぐテリウスに、違和感を覚えたのはその瞬間だった。

「・・・ゾラム・・・？」

「シユウ様、どうなされました？」

怪訝そうな顔をするモニカに、シユウは確認する様に問う。

「モニカ、昔、テリウスが大暴れした時の事を覚えていりますか？」

「ええ、覚えておられますわ。あの子があんなに怒った事など、後にも先にもあれだけでしたもの・・・。あら・・・？」

そこまで言つて、モニカも氣付いたのか眉根を寄せた。

兄も弟も、あの時の原因については詳しく話そうとはしなかつた。だからこそ、モニカは不思議に思い、独自に調べたのだ。おそらく、シユウもそうなのだろう。

「その時の原因。誰しもが口を噤んだその話題は、テリウスの母親に関して・・・でしたね？」

「そう・・・ですわ。あの子、母親を侮辱する方に対し決して許そうとはなさらない子でした。あの時も・・・母親を馬鹿にされたから・・・でしたわ。」

「シユウ様、どういう事ですの？」

サフィーネが割つて入る。事情を知らない他の三人は話題に着いて行けずに入った。

「・・・先程、大神官がテリウスの母親をナタリア＝ゾラム＝ラクシュミーとしましたね？」

「え、ええ・・・。」

「ラングランに於いては、ミドルネームがその人物の階級を表します。“ゾラム”が表すのは女貴族です。しかし、テリウスの母親はノーランザ一族の出。出自だけ見れば立派な王族なのですよ。」シユウの言葉を継ぐようにモニカが喋り出す。

「テリウスはナタリア様がお亡くなりになるまでお一人で過ごされました。父親を知らずに育つた彼の、唯一の誇りは母親が王族の出身という事でしたわ。・・・でも、ノーランザは“呪われた一族”と噂され、事情を知る者以外は王族と認めたがりませんの。」モニカが哀しそうに瞳を伏せる。

「事情を知り、母の出自に誇りを持つている息子が、それを否定する呼び名を許す筈がない・・・というわけか。」

リンが呟き、シユウとモニカが頷く。

「なるほどね・・・。つづ一事はだ、あそこに居る王子様は一セモノな可能性が高いわけだ。」

イルムの言葉を肯定する様に、チカが甲高い声を上げながら飛び込んで来た。

「ニユース、ニユース！いやあ、噂をすればなんとやら！中国風に言えば“ツアオツアオの話をする”とツアオツアオがやって来る”ですね！今朝、テリウス王子が出奔したそうですよーーー！」

チカの言葉を聞き終わる前に、シユウは席を立つた。

「動きましたね。今彼は何処ですか？」

足早に歩きながら続きを促す。他の四人も、慌てて彼の後を追つた。

「ブルクセン州だそうですよー！」

「では、向かいましょう。皆さん、機体のチェックをお願いします。

「その言葉が合図だったように、各々が持ち場に散つて行く。」

「チカ、グランゾンに火を入れておいて下さい。」

自身は操舵室に向かいながら、使い魔に指示を出す。

「いえっさーー！ところで、ご主人様、お聞きしたい事があるんです
が。」

「何でしよう？」

真面目な声のチカに、シユウも真顔で応える。

「ツアオツアオつて・・・何ですか？」

・・・・・・・・・・・・

暫し、二人（？）の間を沈黙が支配したのだった。

見つかった。いや、自分にしてはよく逃げた方が。
でも、大人しく籠の中に戻るつもりも無い。

目の前に迫る三機のガディフォールにレールガンの照準を合わせた。
「く、来るな！」

声が震えているのが分かる。疲労か、それとも恐怖か。

「お止めなさい、テリウス殿下！」

隊長機から鋭い声が飛ぶ。ラテルだ。

後ろの一機はミラと、見た事の無い禿頭の男。
ラテル機がゆっくりと歩み寄つて来る。

「来るなって言つてるだろ！……」

悲鳴に近い声を上げて、テリウスはトリガーを引く。撃ち出された
レールガンはガディフォールを掠めもせず虚空に消えた。
「テリウス殿下！……それ以上抵抗なさるのでしたら、我々も非常手段を取ります。」

幾分低い声で囁かれたそれは決して脅迫だけではない響きを含んで
いる。

「こ、こっちに来るな！……」

怯えた様に一步後ずさるテリウスに、ラテルはやれやれと溜息を吐
いた。そして、禿頭の男に耳打ちする。

「・・・レスリー、影縛りの用意はできたか？」
レスリーと呼ばれた男は陰険そうに唇を歪める。

「あと二分、頂けますか。」

「一分だ。」

言い放つてラテルは更にテリウスとの距離を詰めた。

「そ、それ以上近付くなつ！ぼ、ぼくは本気だぞ！……」

震える手でレールガンを構え直す。定まらない照準を、合わせようと焦れば焦る程、手の震えは増すばかりだ。

「いいですか、テリウス殿下。我らは殿下を無事連れて帰ることを望んでいるのです。命令では生死は問わぬといわれていますが……

・・・・無論、我らはそのようなことは望みません。」

軽い衝撃がテリウスを襲つ。『生死を問わず』。カーグスはそう言ったのか。信頼していた訳ではないが、いつもあつたり切り捨てられるのはショックだつた。

「しかし、これ以上ダダをこねられるようでしたら……」

そこまでラテルが言つた所で、レーダーを見ていたミラが声を上げた。

「アクロス少佐！ フェイルロード軍です！！」

ミラの報告に、ラテルは露骨に舌打ちをする。

「・・・來たか。思つたより早かつたな。ライオネス少尉、本陣に救援を呼べ！」

ラテルからの指示を受け、ミラが慌てて本陣と連絡を取り始める。状況が飲み込めないテリウスは、急に慌しくなつた三人の様子を見て動搖していた。

「なんだ？ なにが・・・？」

何が起こつたのか。理解するのに少しかかった。モニターが眩い光に包まれたと思つたら、次の瞬間には、身体の自由が利かなくなつていた。何かで縛られたかの様に。

卑屈そうな笑い声が聞こえて来る。

「・・・影縛り、完了しました。・・・如何ですか、テリウス殿下。例え殿下でも、この術は破れますまい。大人しくなさつて下さい。」

瘤に障る笑い声が、コクピットの中に木靈する。

テリウスは、黙つて奥歯を噛み締めるしか出来なかつた。

「貴方々はカーグス軍の部隊ですね。私はフェイルロード軍のテュツティールバックと申します。」

流線型の優美な青い機体から、それに見合つた凛とした声が響いた。青い機体は水の魔装機神ガツデス。その後ろには風の魔装機神サイバスター。

最高戦力とも噂される四機の魔装機神の内、その一機が目の前に居た。

「ああ、ガッデスのテユッティ殿ですな。よく存じてますよ。私はラテル＝ザン＝アクロス。階級は少佐です。で、このようなどころにわざわざこらつしゃるとは、一体どうなされたのです?」

空惚けたテ川の声に テニッテイは強い調子で答える

方……テリウス殿下です！」

「テユツティ・・・。」

テリウスが力なく呟く。影縛りへの抵抗で、随分と消耗していまつていた。

「わあ、殿^様下^へさいわい！」

カツアスが近付いてくる。負けひとつアルの乗るカティアス・ルモー距離を詰めてくる。

「お待ち下さい、テュッティ殿。その方は我々にとても重要な方。

お渡しする訳には参りませぬ。例え……」「フアレは二度言葉を切つた。その後こま

口に出すのを恐れる様に。

一 例え

「殺しても……つてか!?」

今までの遭り取りをイライラと眺めていたマサキが口を開いた。ストレートなその言葉に、しかしラテルは否定の意志を示そうとしな

٦١

テリウスの中をその言葉が駆け巡つた。

殺しても。殺しても。殺して。殺し。殺。殺殺殺殺。

叫んだ。

無我夢中で叫んだ。

死にたくない。

そう思つた。

何かが、テリウスの中で弾けた。

「・・・ほう。」

グラソゾンの中で一人様子を見守っていたシユウは小さく驚嘆の声を漏らした。

いや、彼だけではなく、その場にいたほぼ全ての人間がその出来事に驚きを示していた。

特に驚いたのはレスリーだ。

「バ・・・バカな・・・私の・・・私の術を破るなど・・・」

自身が配した魔法陣の上から自力で逃げ出したテリウスを、まるでバケモノでも見るような目で、レスリーは見つめていた。

レスリー程では無いが、ラテルもミラも、そしてマサキとテュッティでさえ、その光景を信じられないといった様子で見ている。

そんな彼らに向かつて、テリウスは叫んだ。

「ぼくは！」

肩で息をしながら、言葉も切れ切れに、それでも彼は叫んだ。

「ぼくは、もう嫌だ！！他人の言いなりに動くのなんて、もう嫌だ

！－

それは、十九年目にして上げた彼の産声。

母が死んで以来、初めて口にした自分の意志。

シユウは笑つた。

彼は動いた。

自分の意志で。

ならば、応えてやらねばならない。

仲間に待機を命じ、シユウは自身の隠れ蓑を取り去つた。

「その力、私がお預かりしましょ。」

突如その場に現れた濃紺の機体に、全員の視線が集まつた。

最初に反応を示したのはやはりマサキだつた。

「シユウ！？・・・手前エ、いつの間に！？」

相変わらずな言葉しか言わないマサキを一瞥し、シユウはテリウスに視線を向けた。その視線に気付いたのか、テリウスが弱々しく向き直る。

「ク・・・クリストフ・・・・」

テリウスの言葉には何処か喜色が含まれていた。来ててくれたのか。そんな感じだつた。

「テリウス、貴方の力、見せて頂きましたよ。それだけの力があれば、何も齎える事などないのですよ。」

優しく微笑む従兄弟。自分に諭してくれたあの時の様に。そつとその赤い手が差し出される。

「さあ、私の元にお出でなさい。」

グラントンはそれ以上動かない。ただそこでテリウスを待つていた。

「ぼ、ぼくが？ぼくなんかの力が・・・？」

差し出された手。それの、なんと魅力的な事か。

「ええ、そうですよ、テリウス。貴方のその力が、私には必要なのです。」

必要。一度拒んだ自分を、彼はまだ必要だと言つている。

「ぼくは・・・。」

「テリウス、貴方の意志が一番大事です。無理強いはしません。」

手を差し出す以上の事を、彼はしようとした。そして、それ以上誘おうともしていない。

ただ黙つて自分の答えを待つている。

「・・・ぼくは、ぼくは今まで、いつも誰かの陰に隠れていたような気がする・・・。」

自分で決めず、自分で動かず、自分の意志をいつも隠していた。その結果が、今の自分なのだ。だから。だけど。

彼は顔を上げた。憔悴しきつっていた筈のその目には生気が漲つている。

「・・・クリストフ、ぼくを、ぼくを連れてつてくれ！！」
手を伸ばす。ガディフォールの、爪を模した指が、グランゾンの赤い掌に触れようとする。

「だあああああ！待て待て待て！！」

神妙な空氣を破つたのはやっぱりマサキだ。

「手前エ！何勝手に話を進めてやがるんだ！テリウス！お前もお前だ！！簡単に騙されやがつて！！」

「君にぼくの何が分かる！？」

「！？」

予期しなかつた答えに、マサキは一瞬たじろいだ。

「誰もぼくを見ようとしなかつた！誰もぼくを人間としてなんか扱つてくれなかつた！！君は、ぼくを必要としてくれたかい！？違うだろ！誰も“テリウス”なんて必要としてくれなかつた！？」

今まで隠して来たであらう感情を、全てぶつけまくるかのよつたテリウスの叫び。

全てに決別をする様に背を向け、テリウスは今度こそ、しつかりとシユウの手を取つた。

「クリストフ、ぼくを連れてつて。」

微塵も迷いを含まないその声に、シユウは優しく応える。

「分かりました、おいでなさい。」

赤い手が、金色の爪を握る。

「テリウス！？」

マサキの声が聞こえた。

「ぼくは、クリストフと一緒に行く。もう決めたんだ、邪魔しないでくれ、マサキ！」

振り向こうともしないテリウスに、マサキは舌を打つた。

「さて、そうと決まればこんな所にいつまでもいる必要はありませんね。行きましょう、テリウス。」

シユウが言い終わると同時に、突風がその場所を突き抜けた。砂埃が舞い、レーダーすらもノイズが支配する。

「・・・それでは皆さん、御機嫌よう。」

砂埃が治まつた後には、もうグランゾンもガティフォールも存在していなかつた。

這々の体でグナインに辿り着いたテリウスを待っていたのは、異母姉からの強烈なビンタだった。

気持ち良い程の乾いた音が格納庫に響く。

「モ、モニカ姉さん！？ 何でここに？」

痛む頬を押さえ、テリウスは目を瞬かせた。

「貴方には関係ございませんでしよう、テリウス。」

不機嫌そうに言い放たれた言葉。姉の変わりように目を見張る間もなく、テリウスは胸倉を掴まれた。

「大体、何よ、貴方、シユウ様に誘われていながら、随分グズグズなさつてたらしいじやありませんこと！ 男ならシャキツとなさいな！」

「… 嫉妬ですね、分かります。

「お、落ち着いてくれよ、姉さん。シユウって誰さ…？」

「まあ、誘われておきながら！ もう、本当に呆れましてよ…」

「… ん？ ああ、クリストフの地上での名前か。」

文脈から察して納得したのも束の間。

「その名はお止めなさい…！」

鬼の様な形相で怒られた。テリウスはただただぽかんとするばかり。

「シユウ様は、もうその名を棄てておいでにおられますのよ…」

「… いや、姉さん、文法が変だよ。」

それだけ呴くのが精一杯だった。

食事の席で、テリウスは地上の一人に紹介された。

「初めてまして、王子様。イルムガルト＝カザハラだ。

「リン＝マオだ。」

人懐っこそうな男と、正反対な女。

「・・・テリウス＝グラント＝ビルセイアだよ。よろしく。」

簡単な自己紹介の後に、サフィーネが料理を運んでくる。

「ハイハイ、ご挨拶も良いケド、ちょっと手伝つてくれない？」

「サフィーネ、私が手伝おう。」

リンが笑う。こうして見ると最初に受けた冷たそうな印象が嘘のようだ。人見知りなのだろうか。

「可愛いだろ？」

テリウスの考えを読んだかのようなタイミングで、イルムが囁いた。

「ん、まあ、キレイな人だとは思うけど・・・。」

「俺のモンだぜ。手を出してくれるなよ？」

悪戯っぽい笑みを浮かべるイルムに、テリウスは何だか親近感を覚えた。何とも人間臭い人物だ。そう思った。

「何の話をしている？」

サラダの入った大皿を抱えながら、リンが首を傾げている。イルムはリンから皿を受け取ると、意味ありげに笑つて見せた。

「なあに、男同士の込み入つた話さ。」

「馬鹿言つてないで、お前も手伝え。」

「はいはい。」

冗談を一蹴され、イルムが肩を竦める。

「サフィーネちゃん、今日のメインディッシュは何ー？」

厨房の奥で、エプロンを着けたサフィーネが顔を出す。

「ビーフシチューよ。冷めない内に運んでもらえる?」

「いえっさー。」

テリウスにウインク一つして、イルムも厨房の奥へ消えて行つた。

「それで、テリウス王子が何の役に立つんですか？」

食事のテーブルを整え、全員が席に着いた所でサフィーネが切り出した。

「魔力ですよ。」

静かにシチューを口に運んでいたシユウが答える。

「魔力？ぼくのかい？ウソだろ、ぼくの魔力なんて、君はフェイル兄さんに比べたら、大した事ないよ。」

シユウの言葉に驚きながら、食事の手を止めようとしないテリウス。手近にあつたバケットを手で千切つて口に放り込む。

「そうですか？・・・私は兎も角として、フェイルロードなどよりはよっぽど素質は高いと思いますが。」

「本当に、ぼくが？」

「ええ、でも、今までは駄目ですね。もつ少し、修練を積まないと。」

食事の手が止まっているシユウに、モニカがナイフでカットしたバケットを差し出した。礼を言つて、パンを受け取る。一口大のそれをシチューに浸して口に運んだ。

丁寧に咀嚼して、飲み込む。

「まあ、何にせよ、今日は疲れたでしょうから、ゆっくりと休んで下さい。後でモニカに部屋を案内させましょ。」

「うふふ、一番遠い部屋を用意いたしましたよ、テリウス。」

「冗談半分に微笑む姉に、テリウスは溜息を吐いた。

「カンベンしてくれよ、姉さん・・・。」

そんな姉弟のやり取りを、全員笑顔で見守っていた。

こんな賑やかな食卓はいつ以来だらう。

ふと目を伏せたテリウスの脳裏に、母親の笑顔が浮かんで消えた。

「コーヒーとオムレツ

大きな欠伸をしながら、テリウスは廊下を歩いていた。

「よつ、お早う王子様。」

後ろから声がかかる。

「その呼び方、止めてくれよ。それが嫌で飛び出して來たんだから。

「おお、そりやあ悪かつた、テリウス。」

豪快に笑いながら、イルムはテリウスの横に並ぶ。食堂の扉を潜ると、既にシユウとリンは指定の席に着いており、コーヒーのマグカップを片手に何やら専門用語が飛び交う話をしていた。

「おはよーさん。」

壁際に置いてある「コーヒーメーカーから自分のマグに」コーヒーを注ぎ、イルムは一人の話に混じっていく。

「おや、お早う御座います。」

「お早う。」

テリウスは少し迷った後、コーヒーメーカーを指して聞いた。

「これ、飲んで良いの?」

「ええ、ご自由にどうぞ。カップは・・・厨房の棚に仕舞つてあるはずですよ。持つてきましょうか?」

「んにゃ、自分で取りに行くよ。」

三人の難解な話を背中に、テリウスは厨房へと入つて行く。

「あら、お早う御座いますわ、テリウス。」

「グツモーニン、テリウス。女の聖域に何か御用?」

白いエプロンを着けたモニカが、顔を出す。その隣には同じくエプロンを着けたサフィーネ。

「おはよ、姉さん、サフィーネ。コーヒーカップってどこ?」

「そこの棚の二番目に入つていたと思われますわ。」

ボウルを抱えながら、冷蔵庫横の棚を指差すモニカ。

「それで、この後どうされればよろしいのでしょうか、サファイーネ？」

モニカの抱えるボウルには割り入れた卵。そこにサファイーネが計量カップに入った牛乳と溶かしたバターを加える。

「んで、ざつとで良いから混ぜて頂戴。」

「分かりましたわ。」

「・・・何、姉さん、料理教わってるの？」

棚を漁りながら、テリウスが呟く。

「ええ、そうよ。立派なお嫁さんになられるには、不可欠でありますでしょ？」

「・・・その前に、文法の勉強した方が良いと思つけど。」

お皿並てのカップを見つける。

「あ、塩一つまみ入れると卵がほぐれやすいわよ。で、あんまり長い時間混ぜちゃダメ。口シが無くなっちゃうから。」

見かけに寄らず料理に詳しいサファイーネと、眉間に皺を寄せ一生懸命に卵を混ぜるモニカ。そんな一人の姿をなんだか微笑ましく思いながら、テリウスはカップ片手に厨房を後にする。朝食はもう少しかかりそうだ。

カップにコーヒーを注ぎ入れ、テリウスも席に着く。ミルクとシュガーポットが載ったトレーを引き寄せ、それぞれを適当にコーヒーの中に入れた。

「テリウス。」

話題に区切りがついたのか、こちらを見ながらシユウが呼びかけてくる。

「ん、何？」

ちょっと砂糖を入れ過ぎたのか、甘ったるくなつたコーヒーを啜りながら応えた。

「朝食が終わつたら、私の部屋まで来て下さい。」

シユウの意味ありげな笑顔に、何か不穏なモノを感じながらもテリウスは頷く。

「お待たされいたしましたわ。」

チグハグな言葉と共に現れたモニカの手には、ちょっと不恰好な才ムレツを載せたお皿が握られていた。

「あー、もう！何でこんな事になつてるんだよーー！」

見慣れぬ森の中を全力疾走しながら、テリウスは声を限りに叫んだ。返つてくるのは空しい木靈と自身の足音のみ。

人はおろか、動物の気配すらしない。

ある気配といえば、唯一。

ちらり、と後ろを見る。

小さな赤い光が四つ、その四つを目玉だとでも言いたそうな位置に貼り付けた土塊が、音も無くテリウスの後を追いかけていた。

それはデモンゴーレムと呼ばれる召喚物。

普通のデモンゴーレムと違うのは、どうやら実体が無いのだという事。

ただ、気配だけは酷く濃厚で、間違いなくそれはそこに存在するのだと、テリウスに訴えかけてくる。

そして、これに捕まつてはいけないという事も。

「ちっくしょー！どーしろつて言つんだよーー！」

叫ぶテリウスの脳裏には、「頑張つて下さいね。」と、爽やかな笑顔で彼の背中を押したシユウの姿が浮かんでいた。

時を遡る事一時間。

嫌な予感を引きずりながらも、テリウスは言われた通りにシユウの部屋を訪れた。

ノックを二回。中から返事がある。

「開いていますよ、入つて下さい。」

「・・・邪魔するよ。」

部屋に足を踏み入れた瞬間、テリウスの悪い予感はいよいよ強くなる。

「どうしました、テリウス？顔色が優れませんよ。」

テリウスの心情を読んだかのように、シユウが悪戯っぽく笑う。

「……いや、君が部屋に来いつて言つから、嫌な予感がしたんだよね……。」

テリウスの視線は一点に注がれていた。

部屋の中央。

広げられた羊皮紙の上に金色で描かれた魔方陣。焚き込められた香は龍涎香。

「・・・シユウ、まさかとは思つけど・・・特訓、とか・・・？」

「そのと一つ……」

恐る恐るの問いに答えたのはシユウではなく、チカ。どうから出てきたんだ、コイツは。

「テリウス様、貴方はですねえ魔術の素質はあるけど、ぜんつぜん磨いてませんでしょ？力不足なのですよなー、ハツキリ言つちゃうと。つつーわけで、こりやもつお約束！特訓！でござりますよ！…とっくーん！…！」

「心配無く、テリウス。貴方の為に特別プログラムを用意しましたから。・・・絶対にサボれないプログラムを、ね。」

とりあえず、笑顔が怖いと感じたのは始めてだ、とだけ思った。こんなに爽やかな笑顔なのに……。

「え、ちょ、ちょっと待つてくれよ！…」

テリウスの静止の声など聞かず、シユウは、とん、と彼の背を押した。

「それでは、頑張つて下さいね。」

「ちょっと、お、おい、シユウ！」

振り向くと、すでにシユウの姿は無く、部屋だつた筈のそこには木々が生い茂るばかりの森になつていた。

「ウソだろ！？カンベンしてくれよ……。」

呆然と立ち尽くす彼の目の前に、突然気配が降つて湧く。凶悪な光を宿した四つの目玉。

咄嗟に逃げ出すテリウス。

「あー、せう! 何でこんな事になつてゐんだよ! 」

至
現
在

「おおやけ」

木の根に躡き、派手に転んだ。

見上げたテリウスの視線に、デモンガーレムの巨大な掌が迫る。その掌がニリウスに触れて、うんざりと呻き出す。

卷之三

「・・・まだまだですねえ。」

呆れた様な声。

「あらあら、テリウス様つてば、ゲームオーバーですか？情けないなー。」

チカが嘲笑うようにテリウスの周りを飛び回る

「アーティストの心」――アーティストの心

「…そりや、いたナビ…。」

「倒そつとは思わなかつたんですか？」

「思わないよーー！」

「げつ、まだやるの！？」

「今日は結構ですよ。また明日、同じ時間に来て下さい。」

微笑むシユウに、テリウスはがっくりと肩を落とす

卷之三

搾り出すように呴いた言葉を、しかし、聞き入れて貰えそうにはなかつた。

喜劇にしかならない悲劇

今日も今日とてショウの特訓を受ける為、テリウスは廊下を歩いていた。

しょぼくれた様な背中をいきなり誰かに叩かれる。

「痛つ！…」

振り向くと、書類の束と小さな紙袋を抱えたサフイーネが小さく舌を出していた。

「はあい、テリウス。これからまた特訓？」

「…不本意ながら、ね。」

「あらあら、疲れた顔しちやつて。」

からかい半分に笑うサフイーネを軽く睨み付け、テリウスは溜息を吐く。

「…そりやあ、疲れるに決まってるだろ？。」

「ダメねえ。そんな事で疲れてちゃ、いざつて時に女を満足させられなくてよ？」

「…何で君はすぐそっちの方向に話を持つていくかな…。」

「いつか、アンタが好い男になつたら相手したげるわよ。」

「…遠慮しとくよ…。」

「ま、失礼ね。」

言いながら、サフイーネは目的地である扉を軽く叩く。

いつもと同じ返事があり、いつもと同じ挨拶をしながら扉を潜る。

「おや、今日は二人一緒なのですね。」

珍しい同時の来訪に、ショウは好ましそうに微笑む。

「ええ、そこで会いましたの。これからまた特訓だつて不貞腐れながら歩いてましたわ。」

持っていた書類の束をショウに手渡し、部屋の隅にある「一ヒーム」カーラに向かうサフイーネ。

「誰が不貞腐れてただよ。ちょっと疲れてるだけだよ、全く。」

テリウスの反論も特に意に介さず、小さな紙袋から今朝煎つたばかりの豆を出しミルで挽く。この瞬間の香りがサフィーネの一番の気が入りだつた。

「ま、頑張つて頂戴。今晚は精が付きそつたメニューにしてあげるから。」

「では、テリウス、用意は良いですか？始めますよ。」

魔方陣の前に立ち、シュウが呪文を唱え始める。

面倒臭そうに魔方陣の中央に立つたテリウスが、思い出した様に振り向いた。

「あ、サフィーネ。」

「なあに、テリウス？」

「夕飯は唐揚が良いな。」

「はいはい、分かったわよ。」

サフィーネが返事をするのと、テリウスの姿が搔き消えたのはほぼ同時だつた。

それを見届けてから、サフィーネは口を開く。

「・・・シユウ様、シユテドニアスがカーケス・フェイル連合軍に敗れ、撤退しているとの情報が・・・。」

「そうですか・・・思ったよりも脆かつたですね。」

「どうなさいますか？」

サフィーネから受け取つた書類の束に目を通す。

テリウスの出奔が表沙汰になり、即位がうやむやになつた事、その事により、国民はもとより兵士達にまでカーケスに対する不信感が募つてゐる事。そして、フェイルロードの側にも不審な動きがある事などが書かれていた。

「計画に変更はありません。それ程慌てずとも、しばらく混乱が続きますよ。」

「しかし、カーケス軍とフェイル軍とでは戦力に違いがあり過ぎませんか？このままで、あっさりフェイル軍が勝つて終わつてしまいそうですが。」

「先日、ルオゾールから連絡がありまして、カーラスと密かに会つて来たそうです。戦力の差はカーラスも承知している様で、力を欲していたそうですよ。」

そこまで言つて、シユウの脳裏に一人の人物が浮かぶ。サイフィスが選んだ、風の寵兒。

「・・・それに、マサキ・・・でしたか、彼が、あのフェイルロードにいつまでも従つているとも思えません。」

シユウの言葉に、さも意外そうな顔をするサフィーネ。

「どうしてですか？あのボウヤがフェイルの敵になるとは考え難いですが・・・。」

「フェイルロードの正義とマサキの正義は違うのですよ。」

その結末を思い浮かべて、シユウは瞳を伏せる。

フェイルロードはきつかけがあればすぐにでも動くだろ。それを、おそらくマサキは許さない筈だ。袂を分かつた両者の衝突はそうそう遅くはなるまい。

カーラスも、道を誤った。力に傾倒した彼が辿り着くのは破滅だ。それも、遠くはない気がする。

様々な事が収束しつつある。

全てに用意された結末は、おそらく、喜劇にしかならない悲劇。皆が皆、望んで破滅に突き進む。

シユウのデスクに、淹れたてのコーヒーが置かれる。

「・・・全てが収束する前に、一いちらもケリを付けておきたい所ですね。」

落としたばかりのコーヒーは程よく澄んで、その表面に自身の顔を映し出していた。

この表情が表す感情は何なのだろう？

そんな事を考えながら、シユウはそつとコーヒーに口を付けた。

この実体の無い「デモンゴーレム」との戦いは、一体何度もになるのだろう。

じりじりと相手の間合いを計りながらテリウスは思った。

一度目は、何もさせて貰えないまま、無様な負けを被つた。

二度目は、何回か相手の攻撃を避ける事ができた。

三度目は、相手の攻撃にパターンらしき物がある事に気付き始めた。

その後、何度も戦う内に、攻撃パターンは読めてきた。

しかし、攻撃をかわした所で、確たる攻撃手段を持たないテリウスには勝ち目など無いに等しい。

結局は、いつも体力が尽きてゲームオーバー（チカ談）になるのだった。

「一つ、ヒントを差し上げましょう。」

シユウの言葉を思い出す。

「貴方も魔術の勉強をしたのであれば、鍊金術の基本は覚えていませんね？」

それ位の事なら覚えている。理解、分解、再構築だ。

「あれを倒すのに必要なのは、それだけですよ。」

理解。この実体の無い「デモンゴーレム」を理解する。

理解するのは分かる。敵を知れ、と言つ事だ。

では、分解と再構築は。

何に分解し、何に再構築すれば良いのか。

あれを理解すればそれも分かるのだろうか。

様々な考えを巡らせながら、テリウスはその相手を睨み付けた。

「「」しうじんさまー。ホントにテリウス様はあれ、倒せるんですか？」

暇を持て余しているのか、チカが部屋の中を忙しなく飛び回りながら疑問を口にする。

「倒せますよ。いえ、倒して貰わなければ困ります。」

差し出された紅茶を簡単な礼を言ひて受け取る。紅茶に浮かんだ輪切りのオレンジを見て、シユウは口元を綻ばせた。

「シャリマティーですか。良いですね。」

「ええ、昨日お買い物に行かれましたら、お嬢さんが可愛いから、と八百屋の『主人から大層おまけを頂かれまして』」

につこりと上機嫌に笑うモニカ。

「お陰で消費するのが大変じゃないの、全くーもっと料理に使えそーな物貰つて来なさいよー！」

お手製のオレンジピールとジャムが入ったケーキを不機嫌そうにカットしているのはサフィーネ。

「まあまあ、いーじゃないのサフィーネちゃん。オレンジは美容に良いんだぜ？」

「柚子湯・・・ならぬオレンジ湯、といつのも有りかも知れないな。

「ソファに腰掛、紅茶を啜つているイルムとリン。

今、グナインに乗つているほぼ全ての面子が、シユウの部屋に揃つていた。

「・・・皆様・・・ヒマなんですか、ヒマなんですね？」

その様子を見たチカは、誰にとも無く呟く。一人、苦労しているであらうテリウスに思いを馳せながら

「・・・つーのー。」

手近にあつた石を掴んで投げつける。

石は放物線を描き、半透明のデモンゴーレムを通り過ぎ、地面に落ちた。

「やつぱりダメか・・・。クソツー、どうすりや良いのやー。」

肩で息をしながらテリウスは悪態を吐く。

理解、分解、再構築。あれを倒すのに必要なのはそれだけですよ。

シユウの言葉が頭を過ぎる。

「・・・理解しろって？あんな実体の無いバケモンを・・・。」

言つて、気付いた。

辺りを見回す。いつもと変わらない、静かな森。

何一つ変わっていない、いつもの森。

「・・・実体が・・・無い・・・？」

そう、初めから解つていた。解つていた、筈だつた。

実体は、無い。存在感だけが、在る。

デモンゴーレムが拳を振り上げるのが見えた。

それがテリウスに向かつて振り下ろされる。

しかし、テリウスは微動だにしない。する必要が無い事に、よづやく気付いた。

拳はテリウスをすり抜け、地面に何一つ痕跡を残す事無く、そのまま振り抜かれる。

「・・・何だ、簡単な事じゃないか・・・。」

拍子抜けしたように呟く。

そう、実体が無いのなら、自分に触れられる筈もないのだ。存在感が余りにも濃厚なので、存在していると思い込んでいた。存在などしていないモノを。

そして、殴られたと思い込み、その部分が傷むと思い込んだ。

結局はどこまでも一人相撲。勝てる筈も無い。そもそも相手がいないのだから。

理解は出来た。後はこれを分解して、再構築するだけだ。

「え、ええっと・・・確かに・・・て、『天の理、地の理・・・逆しに行えば逆しに生ず。冥府の怨み・・・煉獄の焰、血をもちて盟す。闇に依りて盟す』・・・そ、それから・・・『アク・サマダ・ビシス・カンドク』！」

自分でもよく覚えていたものだと半ば感心しながら、呪文の詠唱を

終える。

大地がせり上がり、人の様な形を取る。存在感だけが存在していたゴーレムをその中に容れた。

実体を手に入れたゴーレムが、テリウスの前に傳ぐ。凶悪な光を纏つていた四つの目玉は穏やかに輝き、主の命令を待つてはいる。

「め、命令・・・すれば良いんだよね？」

独り言が知らず知らず疑問系になる。命令を下さなければその内また本能に則つて暴れだすだけだ。深呼吸をして、ゆっくりゴーレムに近づく。

「この世界での戒めを解き放ち、元の世界に還れ！」

ぱきん、と何かが割れる様な音がした。

ゴーレムの赤い瞳にひびが入り、やがてぼろぼろと崩れ落ちる。瞳を失つたそれはただの土塊になり、風に吹かれ大地へと還つていった。

最後の土が砂埃として舞つた後、ゴーレムが居た場所には小さなオリハルコニウムの塊が残つた。これが正体だった訳か、と納得して拾い上げる。

「頑張りましたね、テリウス。」

労いの言葉に振り向くと、そこはすでにシユウの部屋だった。モニカが紅茶を持って近づいてくる。

「はい、お疲れ様テリウス。頑張ったのね、見直されましてよ。」

モニカの肩に落ちていたチカが紅茶と一緒にテリウスの手に移る。

「ねー、スゴイじゃありませんか、テリウス様！！レベル25くらいになつたんじやないですか！？」

チカの言葉に、一瞬、部屋を沈黙が支配した。

レベルつて何だ。

チカを除く全員の頭に、同じ疑問が浮かんでいたのだった。

その男は、ある日、なんの前触れも無く少年の前に現れた。

「お初にお目にかかります。」そう言って恭しく頭を垂れるその男に、何故か少年は既視感を覚えた。

何処かで会った事がある。少年には確信めいたものがあつたが、ついぞそれを思い出す事は叶わなかつた。

傷跡が痛む。

「・・・何方でしようか？」

目一杯の警戒心を込めて、少年が呟く。

「貴方様のお力を見込んで、少々お話が御座いまして・・・。」

男は、しわがれた声で囁く様に言葉を紡ぐ。酷く瘤に障る喋り方だつた。

「・・・わざわざ来て頂いて恐縮ですが、今貴方とお話をしている時間はありません。重要な話でしたら、後日然るべき手続きを踏んだ後にいらして下さい。」

突き放す様な、歳不相応の落ち着き払つた冷たい様子に、しかし男は満足そうに唇を歪める。

「おお、左様で御座いましたか。それは、失礼を致しました。では、後日、改めてお伺いさせて頂きます。」

再び深々と頭を下げる男に一瞥すらくれず、少年は踵を返した。男は愉快そうに笑つている。その声が、酷く不快だった。

早足で進む少年の背中に、男の声がかかる。随分離れた筈だが、その声は耳元で囁かれている様な感じがした。

「言い忘れておりました、私めの名前は・・・。」

「ルオゾール様から通信ですよ、ご主人様！」

「・・・こちらに回して下さい。」

程なくして、通信機のモニタが切り替わった。

「シユウ様、モニカ王女は巧く連れ出せましたかな？」

瘤に障るしわがれた声が、通信機を通して部屋に響く。

「ええ、こちらは万事滞りなく進んでいますよ。ルオゾール、其方はどうです？」

「・・・思わぬ邪魔が入りましてな、イブンめの始末は失敗致しました。ですが、ソラティス神殿の封印は破壊してまいりましたでな、御心配は無用です。」

邪魔が入るであろう事位、少し考えれば分かりそうなモノだが。そう思つたが、シユウは何も言わなかつた。

「・・・これで、五大封印のうち、三つを開放致しました。残るは、ティーバとトロイアの封印のみ・・・。」

間もなく邪神の復活が叶つ。その歓喜を隠そうともせず、ルオゾールは口元を歪めた。

「では、私はティーバの封印を解放しましよう。貴方はトロイアに向かつて下さい。こちらが済み次第、合流します。」

「分かりました、御武運を。」

通信が切れる。何故かその通信機を投げ棄てたい衝動に、一瞬駆られた。

「・・・シユウ、どうしたの？」

異変を察したのか、眉根に皺を寄せながらテリウスが問いかけてくる。

「ああ・・・いえ、何でもありませんよ。」

軽く首を振つて、忌々しい考えを振り払う。

「・・・それより、何か御用ですかテリウス？」

「ん、いや、そういうえば、まだ礼を言つて無かつたなつて思つてさ。」

照れくさそうに頭を搔きながら、テリウスは答えた。

「・・・君の特訓は、そりや辛かつたけど、随分僕に力をくれたよ。」

・・・その、ありがとう。」

言われ慣れない言葉に少しの戸惑いを見せながら、シユウは少し笑う。

「わざわざ、そんな事を言いに来たのですか・・・私は、貴方の力を利用しようとしているのですよ?」

「でも、僕に力をくれたのは事実さ。だから、ありがとう。」
戸惑いからくるのであらう冷たい言葉を、否定もせずに、テリウスは真つ直ぐに視線をむけた。

「んで、ちょっと聞きたい事があるんだけど、良いかな?」
「・・・何でしょう?」

「僕は何をすれば良いのか、まだ聞いてなかつたからさ。」
ああ、とシユウは小さく声を出す。

「ヴォルクルス様の復活を手伝つて頂きます。」

テリウスは、やつぱりな、と咳き、特に驚いた様子は見せなかつた。

「おや、驚かないのですね。」

「僕だつて馬鹿じやないさ。」

ひょい、と小さく肩を竦める。

「・・・でも、シユウ。そんな事したら僕等だつて・・・。」

無事では済まないだらう。そんな気持ちも表情に出てきたのか、テリウスの顔が強張る。

「おや、怖いのですか?」

挑発じみたシユウの言葉に、テリウスはまた肩を竦めた。

「そりやあ、怖いね。死ぬかもしれないんだろ?・・・でも、何でだろうな・・・ちょっとワクワクするような・・・そんな気もする。」

「子供が未知のモノとい相対した時の様な、そんな好奇心。久しく感じる事の無かつた高揚感。そんなモノを少なからず感じて、テリウスは困つた様に笑う。

世界の命運なぞより、目の前の男が仕出かす事の方が、よっぽどテリウスの興味を搔き立てた。

彼が世界を滅ぼすと言うならば、その世界の最後の一人になつて結
末を見届けたい。そう思った。

こんなものが、と敗走する軍の中で、アハマド＝ハムディは思った。
思つたよりもずっと下らない結末だ。

シユテドニアスを追い出したラングランは、早速一つに別れ、対立を始め、初戦でカーカス軍が大敗を被つた。

アハマド自身は前線に立つことすら儘ならなかつた。それ程までに、決着は早かつた。

結局、カーカスには運と力が足りなかつたのだろう。
リュー＝ネとヤンロンは途中でカーカスの思想に反発し袂を別つた。
だが、それが大きな敗因だとは思わない。
やはり、あの男か。

アハマドの脳裏に浮かんだ一人の男。

誰の言葉を持つてしても、自ら動こうとしなかつたテリウスを、動かしてしまつたあの男。

シユウ＝シラカワ。

あの男が現れてから、全ての歯車が狂いだした。
まるで、あの男がラ・ギアスをチエス盤にゲームをしている様だ。
誰を相手にかは知らないが。

自分がどちら側の駒なのは分からぬが、どうせなら、最前線に出してもらいたかったと思つ。

強い者と戦いたい。

死が隣合つ、ギリギリの戦いにこそ生はその存在感を増すのだ。
戦う事こそが、命を賭して戦う事こそが、彼にとつては神に対する祈りだつた。

命と言つ名の原石を削り、最後の最後に磨き抜かれた宝石となつたそれを、神に献上する。

それこそが、アハマドにとつてのジハードだつた。

グナインは、真の大地を西北西へとひた走っていた。

ティーバ市へは、後おおよそ五十キロメートルといった所だろうか。操舵室ではチカとサフィーネ、そしてシユウが雑談を交わしていた。「それにしても、シユウ様の言われた通りになりましたわね。カーグスとフェイルが、あんなに早く対立するなんて、ちょっと意外でしたわ。」

「しかも、しかも！ カーグス将軍つてば、初戦でフェイル王子にコテンパンにのされちゃつたって話ですよ！！」

「フェイルロード軍の強さは、少し意外でしたね。もう少し、良い勝負になると思ったのですが・・・。」

「カーグス側の助つ人が、途中で彼の元を離れたからでしょうか？」初めて聞く情報に、シユウは、ほう、と小さく声を出す。

「ヤンロンと・・・そう、リューネでしたね。」

地上の兵器と、魔装機神を失ったのは確かに大きいだろうが、それだけがカーグスの敗因とは思えなかつた。

ルオゾールも、表向きではないとはい、協力はしていた筈だし、テリウスの件で士気が下がつていたとはいえ、カーグス軍の兵士はフェイルロードのそれよりも精銳が多かつた筈だ。

もつと、何か大きな原因があつた筈だ。おそらくは、フェイルロードの側に。

そう、今回、フェイルロードの動きが余りにも早かつた。それにカーグス側が意表を突かれた部分もあつただろう。

フェイルロードを動かしたきつかけ、それこそがカーグスの敗因であり、フェイルロードの勝因である気がした。

操舵室の扉が開く。

ティーセットの乗つたワゴンを押し、モニカが入つて來た。

「お疲れ様ですわ、皆さん。何のお話をなさつておられましたの？」

「カーグス軍がフェイル軍にあつさり負けちゃいましたーってなお

話をしどりましたですよーーー！」

大好きなお菓子の匂いを嗅ぎ取つて、チカがワゴンに飛び移る。

「あー、そうでしたの。・・・そう言えば、セニアは今お兄様の所に居られるのでしたわね。お元気になさつているかしり？」

ティーポットからカップに紅茶を注ぎながら、モニカは独り言の様に呟く。

「そうそう、セニアつたら、地上の兵器を見て大はしゃぎなさつてましたわよ。早速『テュラクシール』の設計図を書き直さなくつちや、なんて。」

「『テュラクシール』？」

モニカの言葉に、聞き慣れぬ単語を見つけ、シユウは問い合わせる。

「ええ、セニアは御自分で魔装機の設計をこつそりなさつてました。それが『テュラクシール』ですわ。十六体の魔装機全てのデータを参考にして、最高の機体にするんだつて張り切つておりましたわよ。お兄様に使って頂くんだつて。」

「・・・なるほど。」

合点がいった。フェイルロードの手に、その『テュラクシール』がもたらされた訳だ。

「ティーバ市に戦術クラスのプラーナ反応です、ご主人様ーーー！」

シユウの思考を分断する様に、チカの声が響いた。

「あら、こんな所に？・・・フェイル軍じゃあないわよね？」

サフィーネがレーダーを覗き込み、確認する。

「・・・識別信号、無し、と。シユウ様、如何なさいます？」

「大方、カーラス軍の残党でしょ。・・・さて、どうしたものでしちゃうね。要是この地の封印さえ解ければ良いのですから、彼らと戦う必要など無いのですが・・・。」

思案顔のシユウに、サフィーネは意気揚々と答える。

「やつてしまいましょうよ！」

モニカは少し不満そうだ。

「無駄な争いは好まれませんわ。」

騒ぎを聞きつけたのか、いつの間にか操舵室に残りの二人も集まつて来ていた。

「何々？何の話してるので？」

チカが簡単な説明をする。

「・・・私はモニカの意見に賛成だな。」

「俺はどっちでも。」

「僕も姉さんの意見に賛成。面倒臭いし。」

ほぼ全員に反対され、サファイーは少し機嫌を損ねた様子だった。

「・・・確かに、無駄に戦力を消耗する事もないでしょう。」

「えー、やらないんですの？」

シウにまで意見を棄却され、思わず不満が口をつく。

「あちらに交戦の意志が無ければ、ですね。一先ず私が出て、話をしてみましょ。万が一に備えて、準備だけはしておいて下さい。」

そう言って、シウは踵を返した。

「グラソゾン！？」

突如現れた紫紺の機影に、ラテルは驚きの声を上げた。
すぐ後ろにいるリリツも、声こぼさないものの、驚きを隠せないでいた。

「何故、こんな所に・・・。」

隣では苦虫を噛み潰した様な顔でレスリーが、やはり驚きの声を上げている。

「ほう、グラソゾンか。」

魔装機ソルガディのコクピット内で、どこか喜色を含んだ声を出したのはアハマド。

グラソゾンから、静かな声が響く。

「聞こえますか？こちらに交戦の意志はありません。大人しくここから立ち去りなさい。そうすれば、貴方々に危害は加えません。」いつぞやヌエット海で聞いたその穏やかな声に、ラテルは少し安心したように息を吐いた。

「そうか・・・ならば、これ以上無駄な争いは避ける事にしよう。」ラテルの言葉にミラはすぐさま賛同する。

「そうですね。もう戦いには疲れましたわ。」

「・・・納得いきませんな。」

一人、異を唱えたのはレスリー＝ラシッドだ。

「何だと、ラシッド中尉？」

せっかく戦闘を避ける事ができそうなのに、それをふいにしかねない言葉。ラテルの語氣は厳しかった。

「我々がこのような境遇にいるのも、元はといえばあの男がテリウス殿下を攫つて行ったからですぞ。到底、許すわには参りません。それでは単なるハッ当たりではないか。ラテルはそう思った。戦争なのだ。個人を恨んで何になると言つのか。」

「馬鹿な、もう終わった事だ。第一、あのグラントン相手に、その戦力で敵う訳があるまい。」

もう一回以上、部下を失うのも「免だつた。諭す様に、ラテルは叫んだ。

そんな上官を、レスリーは鼻で笑う。

「さて、どうでしょうな。やつてみもせずに、その様な事を言われるとは、少佐も弱気になられたもの・・・」

その自信はどこからやつてくるのか、彼はラテルを見下したような様子さえ見せる。

「それに、相手はあのグラントン・・・背教者クリストフ王子です。ならば、正義は我らに在ります。正義を行うのに、何を躊躇う事があります？」

「正義と無謀とを混同するな！貴様の言つている事は、兵士に死ねと命令しているに等しいんだぞ！！」

いつまでも折れようとしないレスリーに、ついにラテルは声を荒げる。そんな上官の様子すら一笑に附し、レスリーは続けた。

「犠牲を恐れてどうします？正義に犠牲は付き物。少佐、敵前逃亡は極刑に値しますぞ。最早、アクロス少佐、貴方に指揮官の権利はありません。この部隊の指揮は、私が取ります。」

「何を勝手な事を！？」

激昂するミラを諫め、ラテルは吐き捨てる様に言い放つ。

「もういい！良いだらう、ラシッド中尉。勝手にしろ！貴様一人で正義とやらを貫けば良い！撤退するぞ！――」

「了解しました。」

ミラが応える。

ミラだけが、応える。

他の兵士達の反応が無い。異変を感じ、ラテルは必死に呼びかける。

「・・・どうした、お前達！？撤退するぞ！こんな所で死ぬ事は無い！――」

「どうしたというの、皆？カラフー・ショークー・エイリイ！返事をし

て！！

ミラも同様に異変に気付き、仲間達に声をかける。返事は、無い。
「ふふふ・・・無駄ですよ。既に兵士全員、我が術中にはあります。」

顔に暗い陰を落とし、レスリーが嗤つ。

「まさか・・・仲間に・・・術を・・・？」

ミラが驚愕に目を見開いて呟く。ラテルは怒りに拳を震わせた。

「・・・ラシッド、貴様あ！！」

彼の怒りすらも、レスリーは笑い飛ばし、酷く陶酔しきった様子を見せる。 「これも、正義の為。」

何が正義か。ラテルは思い切りガディフォールのコントロールクリタルに拳を叩き付けた。

「アクロス少佐・・・。」

ミラが弱々しい声を出す。ラテルは歯噛みした。

「・・・く・・・どうしようも無いのか・・・？」

その言葉には絶望がこびり付いていた。

ラテル達が揉めているのは外から見ても明らかだった。

「なーんか、揉めていますねえ。」

シユウの肩の上でチカが呟く。

「嫌な空気が漂っていますね。・・・大方、あの術者がお仲間にゲアスでもかけたのでしょう。」

レスリーの乗るガディフォールに軽蔑の眼差しを送りながらシユウが答えた。

「えー、仲間にですかー！？」

信じられないといった感じでチカが驚く。

「ゲアスってあの強制魔法ですよね。あれって、かけられた側の負担が半端無いんじゃないでしたっけ？」

「ええ、その名の通り、強制的に動かされる訳ですから。精神的にも肉体的にも、非常に大きな負担を強います。」

シユウは何やら「コンソールを弄っていたが、やがてスピーカーからノイズ混じりの遣り取りが流れ始めた。

「……で正義とやら……ば良い……。」

「……だす……いん、我が術中に……。」

「……なか……つを……。」

途切れ途切れの通信を繋げてみると、やはり、一人が仲間に術をかけ、かからなかつた一人と揉めている様子だった。

正義の名の下、狂氣を振りかざすレスリー。

驚愕と恐怖に打ち震えるミラ。

仲間を救えぬ絶望を、呪わしげに弦くラテル。
それぞれの言葉を拾いながら、シユウは尙もコンソールを叩き、マイクに向かつて語りかかる。

「……ラテル＝ザン＝アクロス、聞こえますか？」

「……！」

スピーカー越しに、彼の動搖が伝わって来た。

「聞こえていますね、ラテル？」

もう一度、確認の為に語りかかる。

「……あ、ああ、聞こえている……。」

酷く沈んだ声が、スピーカーから返つて来る。それを聞いて、シユウは満足そうに続けた。

「貴方に一つ、借りがあつたのを思い出しました。今、それをお返ししたいのですが。如何でしょうか？」

「借り……だと？」

「ええ、借りです。又エット海で、貴方は私の願いを聞き入れてくれましたね。そのお礼と言つては何ですが、貴方の願いを一つ叶えて差し上げたいのですよ。」

しばし、スピーカーから沈黙が流れた。

「……もし……もし、可能であれば……仲間を、救つて貰えるだろうか……？」

やや遠慮がちに、しかし、はつきりと告げられたその願い。

「勿論です。
シユウは笑つた。」

グナインに残つた全員にシユウから通信が入つた。

全員がほぼ同時にそれを繋ぐ。

「皆さんに手伝つて頂きたい事が出来ました。今から指示する所へ、各自向かつて欲しいのですが、宜しいですか?」

サファイー・ネとモニ・カが真つ先に領き、テリウスも同意を示す。リンとイルムも無言で指示を待つていた。

各機のメインモニタ右下に小さく地図が表示される。其々が行くべき場所に赤い点が光つていた。

「指定地点に着くまでは隠れ蓑を使用して下さい。合図を送りますので、それまで待機をお願いします。」

シユウの指示に、五者五様の返事が返される。

彼はゆっくりとグランゾンを前進させた。レスリーが身構えたのが分かる。それに構つ事もせず、グランゾンは敵のど真ん中で立ち止まつた。

全員が指定の場所に着いたのを確認し、シユウは合図を送つた。突然に現れた五つの機影に、レスリーは驚きを見せたものの、さして動じた様子も無く、酷く興奮気味に傀儡達に命令を下す。

「さあ、行け!私の兵士達よ、悪魔を倒すのだ!!」

彼の傀儡は、彼の命令に従い、彼の敵に襲い掛かる、筈だった。

「・・・どうした!早く行け!命令だぞ!!アイツを殺せ!!殺すんだ!!!!」

興奮に輪をかけ、彼は叫び散らす。

その声は空しくその場に響き渡るだけで、何一つ、効力を發揮しうとしなかつた。

「どうした、何があつた!?」

びくりとも動こうとしない兵士達に、今度はレスリーが声をかける番となつた。

必死になつて喚き散らす彼の耳に、酷く冷淡な笑い声が聞こえて来る。

「ククク・・・どうしました、何か異変でも起きましたか？」

空寒くなるような声だった。先程のラテルとの会話を、彼がもし聞いていたならおおよそ同一人物の声などとは信じられなかつたであろう、そんな声。

「気付きませんか、貴方が私の術中に居る事に。」

言われてから、慌ててモニタを見つめた。

現れた五機が形作るそれは、五芒星。中心は、グラムゾン。いつの間にか、その右手にはグラムソードが握られている。大剣の切先でカバラ式の十字を切りながら、シユウは咳いた。

「『アーティ・マルクト・ヴェ・ゲブラー・ヴェ・ゲドウラー・レ・オラーム・エイメン』」

そのまま大地に剣を突き立てる。

「『大地の支え、諸々の深淵。穿ち、満たせし汝。眼に見えぬ王。地に依りて讃え、光に依りて盟す。』」

隊を囲むその五機を頂点としたペントагラムが現れる。

「『アドナイ・ハ・アレツツ』。」

剣を引き抜く。空気が微かに震えた気がした。

霧が晴れる様に、シユウが“嫌な空氣”と称したそれが薄れる。糸が切れた傀儡の目に、生気が戻り始める。しかし、短時間とはいえゲアスの影響下にあつたその顔は、どれも疲労の色が濃かつた。

「・・・さて、皆さん、命惜しくばお逃げなさい。」

狂気に喰われる前に。

まるでその言葉が合図だったかのように、兵士達が撤退を始める。いや、逃げ惑い始めたと言つべきか。

皆が皆、どこへ逃げるのかすら分からぬまま、闇雲に、しかしその場からとにかく離れたい一心で、動き出した。

「さあ、御自慢の兵隊さんはもういらっしゃいませんよ。どうなさいます?」

先程にも増して冷たい笑いをレスリーに浴びせかけ、シユウは彼に向き直る。

レスリーは術を破られた悔しさに歯噛みしていたが、やがて思い出したように笑い始めた。

「ふ、ふふふ、そうだ、あんな奴らなどいなくとも、我が術さえあればクリストフとて赤子も同然……見よ、我が術の力を……」

彼は狂った様に嗤い、叫んだ。

「『天の理、地の理、逆しに行えば逆しに生ず。冥府の怨み、煉獄の焰、血をもちて盟す。闇に依りて盟す。アク・サマダ・ビシス・カンダク』……」

高らかに唱えられた呪文に呼応し、大地から『デモン』ゴーレムが湧き出して来る。その数は、正確には分からぬが三十は下らないだろう。

「見たか、我が術の力を……」

ゴーレムの大群を背に、レスリーは得意満面に嗤い続けた。

「・・・うわあ。」

グラソゾン内部から様子を窺っていたチカが小馬鹿にした声を出す。「だつせーつ！何アレ！？あんな初歩の術で随分といきがつちやつてるけど！」

「ばつかみたい。」

同じく、やや遠くから見ていたサフィー・ネも呆れた声を出した。「調和の結界が崩壊して以来、こういった暗黒系魔術は力が強くなつてますからね。彼は、それを自分の力と勘違いしたのでしょうか。愚かな……。」

「お可哀相な方ですね。」

シユウとモニカの声には、哀れみの色すら漂つ。

「残念ですが、この地は今私の手の内にあるのですよ。」

「黙れ！悪魔の戯言など、聞く耳持たぬわ！？」

もはや、すっかり狂気に取り込まれたレスリーは自棄になつた様に喚いた。

「・・・」主人様、ありや思いつきり叩きのめさないとダメですよ。

「仕方ありませんね。』この地に刻まれた五芒星の記号に依りて、
退け、怨靈共よ。我を煩わすな。』』

グラソゾンの眼が魔術的な力を持つて輝く。射竦められたゴーレム
達は、次々と、自ら大地へと還つていった。

「な！ば・・・馬鹿な！正義が！この私が！敗れる筈は無い！間違
いだ！何かの・・・！」

「・・・もう良いでしよう、そろそろ御仕舞いにしますよ？」

「ま、まだだ！まだ！私は！負けてなど・・・！」

「・・・目には目を。貴方にはお似合いの最期をプレゼント致しま
しょう。」

シユウが、静かに嗤う。狂氣すら呑み込む、闇の様に。

レスリーは異変に気付く。何の命令も下していないガディフォール
が、ひとりでに動き出した。帯刀していた細身の剣を抜き放ち、自
らの胸部に宛がう。そこにあるのは、コクピット。

「ま、待て！止める！…」

主人の制止の声も聞く事なく、そのまま自らの心臓部を刺し貫いた。

狂気に駆られた男の、余りにも、呆氣ない最期だった。

事の一部始終を、アハマドは上空から見ていた。

「・・・フン、何ともまあ、馬鹿馬鹿しい結果だ。」

呆れ半分に呟いたが、どこか清々した気持ちもある。

これで、自分を捉えるモノは無くなつた訳だ。

思う存分、私情に走れる。

彼は竜巻。何かを破壊せずには存在できない。

私は竜巻。真っ直ぐに、己の道を突き進むのみ。

空を舞う蒼い鷹に気付いた。

ガディフォールに酷似したそのフォルム。いや、正確に言えば、ガディフォールがそれに似せて作られたのだが。

竜巻の精霊ソレイドが守護するその魔装機。渾名は、ソルガディ。

ソルガディが、剣を振りかざし、急降下してくる。

歪曲フイールドではなく、手にした大剣で、その一撃を受けた。速度を乗せた剣は重く、僅かにではあるが、グランゾンを押し動かす。続け様に繰り出されるその剣は、洗練されたそれではなく、荒々しく打ち振るわれる、まるで暴風。

時には避わし、時には剣で受け流し、シユウは暴風をしのぐ。

「やはり、強いな！ そうでなくては面白くない！！」

嬉しそうに、アハマドは叫んだ。ぴりぴりと肌を刺す緊張感が心地

良い。

乱打が止んだ後の、僅かな隙を狙い、グラランゾンが歪みを撃ち出す。すんでの所でソルガディは上空に逃げた。脚の装甲を幾らか持つて行かれたが、アハマドは気にしなかった。

両肩に装備されたレールガンを乱射する。グラランゾンが左手を掲げるのが見えた。この攻撃でダメージを与える事が出来ないのは承知済みだ。両翼を畳み、自らが撃ち出した弾に紛れてグラランゾンとの距離を詰める。

チカは歪曲フィールドでレールガンを阻むのに一生懸命だった。

以前はヴォルクルスの魔力で賄われていたそれは、今では何故か全て主人の魔力とプラーナ、各エンジンからのエネルギーに動力が切り替わっており、常に全てを覆つてはいられない。

アハマドがそれを知っていた訳では無いだろうが、結果的にはそれを利用する形の攻撃になつた。

グラランゾンがレールガンの防御にまわつてている隙に、それに乗じて左脇腹付近にすれ違ひ様の一撃を見舞う。

「クピットにまで届いた衝撃に、ショウは口元を歪めた。

「ほう・・・。良い攻撃ですね。」

愛機に傷が付いたのは久しぶりだ。

「あわわわわ、すすすすすみません！歪曲フィールドが間に合いました！」

チカが慌てて謝罪するが、主は特に気にした様子も無い。

「構いませんよ。・・・ソルガディのパイロットは、アハマド＝ハムディでしたか・・・。」

「え、ええ、そうです。ハイ。」

アハマド＝ハムディ。パレスチナ出身のムスリム。イスラム過激派の一派に所属していた経験もあつた筈だ。なるほど、とシユウはひとりごちた。

また、レールガンの雨が降つて来る。チカがフィールドを慌しく展開し始めた。

レールガンの弾数は限りが在る。ならば、今度は急所を狙つて来るだろ。シユウ自身も身構えた。レールガンの閃光の中に蒼い鷹を見付ける。切先を追うことだけに集中した。鋭い衝撃がグランゾンとソルガディを襲う。グランワームソードとディスカッターとが互いに火花を散らしていた。地力に勝るグランゾンが、鎧迫り合いを制する。弾き返されたソルガディは、地面に叩きつけられたが、すぐに体勢を立て直し上空に舞つた。

誰の目にも、アハマドの劣勢は明らかだが、彼自身に焦りの色は無い。反対に、楽しくて仕方が無かつた。

「・・・楽しそうですね、アハマド＝ハムディ。」

「やはり、シユウ＝シラカワか。ふふふ、楽しいな。こんなに心躍るのは久しぶりだ。お前程強い相手と戦える機会など、そうはあるまい。」

二度、三度と剣を合わせる。その度に少しづつ押されながらも、ソルガディは尚も喰らい付いてくる。

「強い相手と戦うのがお好きなのですか？」

「勿論だ。だから今、お前とこうして戦つていい。」

グランゾンの右足元を狙い、アートカノンを射出した。抉られた地面が、グランゾンの足をさらつ。体勢を立て直される前に、背後を取つた。

ソルガディが駆る。竜巻の様に。全てを刻む刃を携え、猛然と突き進む。

グランゾンまで後数歩。

突然、ソルガディが壁にぶつかる。その壁が、地面だと気付くのは少しかかった。背中を、何か途轍もない質量の物に押さえつけられているような感覚。

鷹が、地に伏せる。翼が拉げる音がした。

「・・・俺の負け、か。」

機動性に代わり装甲を犠牲にしたその機体では、グラビトロンカノ

ンの重力に耐え切る事は出来ず、無残な姿を晒していた。地に伏してそのまま、アハマドは溜息を吐く。

「アハマド＝ハムティ。もっと戦いたくはありませんか、強い相手と。もっと、命を懸けるに相応しい相手と。」

「……何だと？」

敗者として、死すら覚悟していたアハマドに、しかし、届いた言葉は余りにも甘い誘惑。

「お嫌でしたら結構です。今の言葉は忘れて下さい。」

彼の沈黙を、否定と受け取ったのか、シユウはあつさうと話題を打ち切り、背を向ける。

「待て！」

無残な姿を晒して尚、立ち上がるうとするソルガディ。戦いたい。もっと。

右の翼がもげ落ちた。それがどうしたところのか。両の腕は辛うじて動く。ならば、戦える。まだ、戦える。

「……」の命、くれてやう。

戦えるのならば。まだ、戦えるのであれば。

戦場へ。

戦場こそが、彼の帰るべき家なのだから。

小さな恋

「・・・これは、フランモスで廃棄処分になる筈だつた戦艦か。よく動かせたモノだな。」

ひつそりと静まり返つた廊下を歩きながら、ラテルはどこか感慨深そうに呟いた。

「この程度の戦艦の〇〇プログラムでしたら、そんなに難しい物ではありませんからね。」

「それは恐れ入る。」

ラテル、ミラ、アハマドの三人が通されたのはブリーフィングルーム。

既に他のメンバーも全員集まつていた。

「テリウス王子！？」

ミラが驚きの声を上げる。

「ああ、ミラか。君には随分世話になつたね。」

カーカス軍に居たときの扱いを思い出して、テリウスは苦笑いした。

「少し、逞しくなられた様ですわね。」

テリウスの成長を見て取つたのか、ミラが笑う。テリウスは苦笑いした顔のまま、肩を竦めて見せた。

「そりやあ、ね。」

ちらとシユウを見遣るが、彼は何処吹く風といった感じだ。

「モニカ王女、テリウス王子、ご無事で何よりです。」

ラテルが深々と頭を下げる。

「まあ、ラテル、私もご無事で何よりと感じてていると思われますわ。」

相変わらずの言葉遣いに、ラテルは少し笑つた。

「皆さん、積もる話も在るでしょうが、一先ずおかけ下さい。サフィーネ、皆さんに何か飲み物を。」

小さく返事をして、サフィーネが席を立つ。すぐに全員分の「コーヒ

一が用意された。

「さて、これからアハマドには一緒に来て頂く事になりましたが…。
・。そちらのお一人は今後どうされるおつもりで？」

シユウの疑問に、ラテルとミラは一瞬顔を見合わせる。

「…・・・」うなつた以上、カーカス軍に戻る事は出来ないだろうな。
・。・。

「かと言つて、フヨイル王子の下へ行く事も、やはり気が進みませんわ。」

二人の答えに、シユウは一、三度頷いた。

「では、身の振り方が決まるまで、『』一緒に如何ですか？」

「良いのか？私達は…・・。」

「構いませんよ。」

まるで一切の疑問を打ち切るように、シユウは微笑む。

「モニカ、皆さんをお部屋へ案内してあげて下さい。」

「はい、シユウ様。皆様、こちらで御座いますわ。お付きになつて来て下さいませ。」立ち上がって、モニカはにっこりと笑つた。

通された部屋で、ミラは一人落ち着かずにいた。

何故気分が落ち着かないのか、それすら分から無い事に少し苛立つ。上官に相談しよう。そう思つて席を立つた。

ラテルに会えると思つた途端、不思議と気分が落ち着くのを感じる。モニカの配慮なのか、部屋はすぐ隣だつた。扉の前に立ち、遠慮がちにノックをする。

がたがたと部屋の中から音がして、間もなくラテルが顔を出した。

「はい・・・ああ、ライオネス少尉じゃないか。どうしたんだ？」

「あ、いえ・・・その、『』相談したい事がありまして…・・。」

ラテルの顔を真つ直ぐに見るのが、どういう訳か恥ずかしくなり、ミラは少し俯く。

「今後の事か？まあ、とりあえず入つてくれ。」

扉を手で押されたまま、身体を半歩ずらして通路を譲る。そつと、やはり遠慮がちに、ミラが部屋の中に入つて来た。

「ここには、どの部屋にもコーヒーメーカーとティーセットが備え付けてあるんだな。まるで、ちょっとした貴族の別荘だ。」

「ええ、そうですわね。軍の物とは大違いですわ。」

「何か飲むか?」

「あ、では、私がご用意しますわ、アクロス少佐。」

微笑んで、ミラがティーカップを手に取る。

「すまんな、ライオネス少尉。」

言つてから、何かに気付いた様にラテルが笑い始めた。

「もう、軍に居場所も無いだろうに・・・。我々はまだ軍人気取りなのだな。」

「そう、ですわね。」

ミラもどこか可笑しそうに笑う。ティーカップに茶葉とお湯を入れて砂時計をひっくり返した。さらさらと、鮮やかな色の砂が落ちる。

「・・・では、何とお呼びしたら良いでしょう?」

少し悪戯心を起こしたような、ミラの笑顔。軍人としてではない、女性の顔。

さらさらと、砂が落ちていく。

ミラの視線はすぐに砂時計に移つてしまつた。表情が見られたのは、ほんの一瞬。ラテルには、それが酷く惜しい事に思われた。十も歳の離れた女性に何を思つているのだろうかと、ラテルは軽く頭を振る。彼女はまだ二十七。あの表情を見せるに相応しい相手がその内きつと現れる筈だ。

「どうなさいました?」

ミラが、また悪戯っぽい笑顔を向けてくる。素直に、美しいと思う。それだけに、自分には相応しくない様に感じた。今度はラテルの方から目を逸らす。

さらさらと、最後の砂が硝子の坂を滑り落ちて行つた。

かちやりと小さな音がして、ティーカップが差し出される。

「どうぞ・・・ラテル・・・さん。」

「あ・・・。」

思わず顔を上げた。ミラと目が合つ。彼女は、少しばにかんだ。

「す、すまない・・・ミラ・・・。」

慌ててカップを受け取り、目を逸らす。一人きりになつた事など今まで無かつた事に、今更思い当たつた。

彼女から差し出された紅茶が、何か特別な物に感じられ、ラテルは慎重に口へ運ぶ。

「・・・美味しいな。」

意図せずこぼれた言葉。

ミラが、笑つた。

嬉しそうに。本当に、嬉しそうに。

彼女は、彼の気持ちに気付いていただろうか。

彼は、彼女の気持ちに気付いていただろうか。

お互い十も歳が離れている事を気にしながら、しかし、確実に同じ事を願つていた事に、気付いただろうか。

小さな、小さな、美しい恋が、ここにも一つ。

悪い夢に追い出されたように、少年は目を覚ました。

傍らに見覚えのある男が立っている。しかし、その男以外、見覚えのあるモノは無く、状況の呑み込めない少年は困惑した。

永い永い眠りから覚めた様な気分だった。記憶は酷く曖昧で、身体は思うように動かない。

ぼんやりとした意識の中、一つだけ、はつきりとしたものがあった。それは、ようやく、解き放たれたのだという事。

自身を閉じ込めていた檻が、絡め取っていた鎖が、無くなつたのだ

という事。

止まっていた時間が、ようやく、動き出した。

「シユウ、ちょっと良いかい？」

後ろからかかった声に、シユウはキーボードを打つ手を止めて振り返った。

「テリウスですか。・・・どうしました？」

テリウスは落ちつか無そうにきょろきょろと周囲を見回す。自分達以外誰もいない事を確かめて、口を開いた。

「・・・声が・・・聞こえるんだ。」

「ほう。」

少し脅えた様子のテリウスに、シユウは微笑んで見せる。

「・・・それは、どんな声ですか？」

「うーん、何て言つんだろ・・・何か、呼んでる気がする。地の

底から響いてくるような、不気味な声だよ。」

「地の底から響いてくる……とは言い得て妙ですね。」

愉快そうに声を出して笑う。

「実際に、ここに地下に眠っている、怨霊共の喚き声ですよ。彼等の眠りを覚ます事が出来る程、貴方の魔力が上がった、と言つ事でしょ？」

「つて事は……」れ、ヴォルクルスの声なのかい？……

ぎょっとして飛び退くテリウスに、シコウは苦笑した。

「とは言つても、分身の一つに過ぎませんから、心配せずとも大丈夫ですよ。」

「ででででも、あ、明日僕達、コレ、起すんだよね？」「

「そうですね。」

「・・・そうですねって、そんなあつせつ・・・。」

「ふふふ、また怖くなつてきましたか？」「

「そりや、当たり前だろ！声なんか聞いたやつたから、余計だよ！二割増し位だよ…」

「では、姿を見よつものなら五割増しですね。」

冗談めかしたシコウの言葉に、テリウスは肩を落とす。

「・・・いや、まあ、うん・・・そう、かもね・・・。」

「特訓で使つたデモンゴーレムと同じ様なモノですよ。」

「お陰様で、僕、デモンゴーレム恐怖症になりそうだよ・・・。」

「おや、それは失礼しました。」

また声を出して笑うシコウに、テリウスは溜息を返した。

先刻まで感じていた恐怖が、すっかり失せてしまつていてるのに気が付いたのは、彼が部屋に戻つてからだった。

すっかりボロボロになつたソルガディを前に、サフィーネは溜息を吐く。

「あー、もつ！ 何よ、コレ？！」

機体の各部をチェックする度に、悲鳴に近い声が上がった。

「よくこんなで動いてたわね、この機体！ ……ちょっと、アハマドー！」

「……何だ？」

動作チェックに付き合わされたアハマドが、面倒臭そうに思える。「カーネスの所の整備士は何してたのよ？！ オリハルコニウムなんて、不純物だらけだし！ ……永久機関だって、碌に整備されてないじゃない！！」

「……俺に言つな。動けば何でも良い。」

「ソレイドは何も文句言わないワケ？！」

「俺と同じだ。戦場に出れれば細かい所には拘らん。」

「そこは拘りなさいよ……」

「……煩い女だ。」

「誰のせいだと思ってンのよー。」

アハマドの溜息と、サファイーネの絶叫が、格納庫に響き渡った。

「どうかしましたか？」「

近くを通りかかったのである「リラ」が、叫び声を聞きつけてか顔を出す。

「ああ、えつと、リラ、だつけ？ ちょっと聞いてよー。」

事の顛末を、尾鱗に背鱗、おまけに胸鱗まで付けて話すサファイーネ。事ある毎に入るアハマドの静かな突っ込みも交えつつ、話し終わる頃には随分と時計の針が進んでいた。

「……まあ、それで。」

「随分と余計な話が混じったな。」

「誰のせいだつづーのよ？！」

「えつと……サファイーネ、さん。」

ミラの他人行儀な呼び方に、サファイーネは軽く手を振る。

「呼び捨てで良いわよ。」

「あ、はい。では、サファイーネ。ソルガディの修理でしたら、私の

ガディフォールを使って下さい。形状は殆ど同じですから、そのま
ま使えると思いますわ。」

「あら、良いの？アンタは？」

「少し、戦場から離れてみようと思ひますわ。ラテルさんも、その
方が良いと……。」

「ふうん……。」

サフィーネは意味ありげに笑うと、そつとミラに耳打ちした。
「……ラテルと何があつたの？」

「！？」

顔を真っ赤にして、ミラが俯く。

「い、いえ、その、なな何も、ありませんわ。そ、その、ラテルさ
んとは上司と部下で、だから、あの、と、歳も離れますし……。
そんな、か、関係では……。」

あまりにも慌てふためくミラを見て、サフィーネは笑つた。

「そんな事一言も言つてないわよ。何かあつたか聞いただけじゃな
い。」

「あ……。」

真つ赤な顔を更に赤らめて、ミラは一回り位小さくなる。

女性陣の遣り取りを興味無さそつに眺めていたアハマドが、また溜
息を吐いた。

「……下らんな。用が無いのなら、俺はもう行くぞ。」

「ああ、行つて良いわよ。アンタが居ても、面白くないし。」

野良犬でも追つ払う様な仕草と共にアハマドの背中を送り出し、サ
フィーネはミラに向き直る。

「……で、どうなの？好きなの？あ、歳の差なんて理由にしあや
ダメよ！愛があれば、そんなの関係ないんだから！」

盛り上がるサフィーネ。萎縮するミラ。

「だから、これから時代は、女から積極的に……。」

そんなこんなで、昼過ぎから始まったソルガディの整備が終わつた
のは、もう日も変わろうかといつ時間になつてからだつた。

彼女が生まれたのは、調和の結界の加護も薄い僻地の寒村だつた。一説によると、ヴォルクルスが最初に現れた地とも言っていたそこは、精靈信仰が大半を占めるラ・ギアスにしては珍しく、独自の宗教を確立していた。

信仰対象は、勿論、サー・ヴァリ・ヴォルクルス。

その地を治めていた領主も、代々ヴォルクルスを崇めており、外からは“闇の貴族”とさえ呼ばれていた。

戦士の家系に生まれた彼女は、幼い頃から戦う事を仕込まれた。武術、魔術は勿論の事、拷問の方法、その耐え方、果ては房中術に至るまで。

元々才能があつたのか、彼女の歳が一桁になる頃には、村では右に出来る者が居なくなつっていた。

丁度その頃からだつたろうか。ラングラン王国で、ある脅威が予言され、政府が躍起になつて対策を練り始めたのは。そして、領主がある目的の為、独自に機体の開発を始めたのは。

領主の機体が出来上がつてくるに連れ、村の周りにはキナ臭さが漂い出した。

そもそも、破壊神を信仰するこの村は、政府にずっと危険因子扱いされてきた。

少しでも脅威の種を取り除きたい政府が、それを長い時間放つて置く事は無く、ある日、それは突然実行に移された。

最初に異変に気付いたのは母だつた。

真夜中、草木ですら眠る時間。彼女は激しいノックの音に起こされる。

寝惚け眼で扉を開けた彼女の前には、すっかりと身支度を整えた母親の姿。初めて見る、戦士としての姿だつた。

「村はもう囮まれているわ。でも、貴女一人であれば、逃げ延びら

れる筈。急ぎなさい。」

共に戦うと言つた彼女を制して、母は言つた。訓練の時にすら見た事が無いほど、厳しい顔だった。

やがて、母と同じ様に身支度を整えた父親もやって来た。父は何も言わず、ただ彼女の髪を撫でただけだった。

「じゃあね、サフィーネ。」

それが親子の交わした最後の言葉。

全てが終わった後、彼女が見たのは、血と炎とで真っ赤に染まった村と、夥しい数の死体。

そして、それらの上に、亡靈の様に佇む、不気味な機影だった。

「・・・どうしました、サフィーネ？」

怪訝そうな色が含まれる想い人の声で、サフィーネは我に返つた。

「あ、シユウ様・・・。いえ、何でもありませんわ。」

二、三度首を振り、笑顔を作る。

何故、今になつてあんな事を思い出したのか、分からなかつた。いよいよ、ヴォルクルス神の復活が間近に迫つていると言つのに、この胸騒ぎは何なのだろう。

全ての不安な思いを打ち消す様に、サフィーネはシユウを見つめる。

「大丈夫ですよ、サフィーネ。」

まるで、彼女の考えを解つているかのような、その言葉。

ふと、シユウが柔らかく微笑む。

心臓が高鳴つた。

この人の傍に居て、何を不安に思つ事があるのか。

「・・・そろそろ、朝食の準備をして参りますわ。」

「ええ、よろしくお願ひします。」

深々と一礼し、サフイー・ネはシユウの部屋を後にする。

「・・・大丈夫・・・そう、大丈夫よ。・・・私には・・・シユウ様が居るじゃない・・・。」

自分に言い聞かせるよう呟いて、彼女は廊下を駆けて行つた。

鬱陶しい位重苦しい空氣の中、私とあの人は出会つた。

一目見た瞬間、息が詰まるかと思う位、胸が苦しくなつたのを、覚えている。

あの事件以来、独りになつた私は、身体を売るか、人を殺す事で生を繋いでいた。

蔑む様な眼差しを向けられる事も慣れだし、乱暴に扱われる事にも慣れた。血の臭いも慣れた。人を殺した時の罪悪感なんて、とっくに忘れた。

笑顔も、いつからか、すっかり忘れていた。

もしかしたら、他の感情も忘れていたのかも知れない。

そんな私に、どこか虚ろな目で、空々しく微笑みながら、あの人は簡単な自己紹介をした。

ラ・ギアスでは聞かない発音の名前だった。

地上の人間なのかと聞いたら、静かに否定された。

では、ラ・ギアスの人間なのか、と言つたら、これもまた否定された。

「・・・どちらでも、無いのですよ、私は。」

後でルオゾールに聞いたら、彼は両方の血を引いているのだとつた。

「・・・お互い、居場所が無い者同士ですね・・・。」

何度もかに会つた時、何でかそんな言葉が口を突いて出た。

「・・・ええ、ですから、壊してしまおうと思います。全て。」

そう言って、あの人は、そつと目を伏せた。その姿が、酷く儚く、弱々しくすら見えた。それが、無性に愛しかつた。

「ええ・・・ええ！ そうですとも、壊してしまいましょうー・全部ー！ 全部を！」

自分を否定してきた世界を壊す。

ああ、何て魅力的な提案なのか。

あの人ガ、そつと手を伸ばしてくる。

髪を、撫でられる。

お父さんが、最期にそうしてくれた様に。

そして、優しく、微笑む。

「手伝つて、くれますね・・・サフィーネ？」

「ええ！ええ！勿論・・・勿論ですとも、シユウ様ーー！」

私も、笑っていた。

そして、泣いていた。

沢山お金を貰つても、どんな美味しい物を食べても、綺麗なドレスを贈られても、浮かばなかつた笑顔。

真つ赤な村を見ても、男共に乱暴に扱われよつとも、何度返り血を浴びようとも、流れなかつた涙。

一度に、全てを取り戻してくれた、あの人。

笑顔は消えず、涙は止まらない。

きっと、酷い顔をしていたと思つ。

それでも、あの人はもう一度、私の髪を撫でてくれた。

小さな子供をあやす様に。荒れ果てた寒村に、独り取り残されて泣いている、子供を、あやす様に。

「さあ、泣くのはもうお止めなさい。行きましょう、私達の居場所を作る為に。」

白い手が、差し出された。

縋り付く様に、その手を取つた。

「はい！どこまでも・・・この命在る限り、お供致しますー！」

その瞬間、誓つた。

決して、この言葉に違ひまい、と。

私を救つてくれたのは、神様ではなく、この男なのだと、いつ事を忘れない、と。

ティーバ市からたいして離れててもいない森の中、場違いなほど大きな洞窟が、その口を開けていた。

この場所は、地元の人間は気味悪がって近づかず、何も知らぬ人間が迷い込んですぐ恐怖に顔を引きつらせ逃げ帰つて来るという。グナインが平氣で入り込めるその大きさは、そこに潜んでいるモノの巨大さも、同時に物語つていた。

吹き込む風が、怨靈の呻き声ともつかぬ音を立てて過ぎ去つて行く。奥へ進むにつれ、空氣も淀んできている気がした。

鬱陶しい位重苦しい空氣。ここに霧囲氣を伝えるには、そんな言葉がぴったりと合ひ。

「地獄行つたら、こんな感じなのかね？」

相変わらず、緊張感の無い面持ちでイルムが呟いた。

「見てきたいなら送つてやるぞ。・・・生憎、片道切符しかないが。

」
強ち冗談でも無さそうに思える程、殺氣を放つリンが応える。

「・・・リンちゃん・・・もしかして、昨日俺がミラちゃん口説い事・・・怒つてる・・・？」

「さあ、何の事だかな。」

素氣なく言つて、ふいと顔を背ける。この仕草は、リンが妬いている時のモノだと知つていた。

イルムは苦笑して、顔を背けたままのリンを見遣る。

「リン。」

「何だ？」

「お前が本当に、俺を殺したいと思つてゐなら、俺は喜んで死ぬぜ。

」
「つーバカ！！冗談でも、そんな事は言つんじゃないーー！」

リンの本当に怒つた声。

周囲も思わず水を打つた様に静まり返る。

「・・・あ。」

沈黙と視線とに耐え切れなくなつてか、リンが俯く。

「・・・と、兎に角、勝手に死ぬ事は許さんぞ・・・。」

ようやく小声で呟くと、逃げる様に格納庫へ駆けて行つてしまつた。

「あらま、盛大にノロケられちゃつたわねえ。」

サフィーネが楽しそうに笑う。

「仲がよろしいようで、羨ましい限りと思われますわ。」

「姉さん、また文法おかしいって。」

いつもの遣り取りを繰り返すビルセイア姉弟。

そのちょっと後ろで、ラテルとミラが並んで立つていた。

「あー、その・・・イルム殿に口説かれたのか、ミラ?」

「え、ええ。あの、一段落着いたら街に出かけて行つて、その、お茶でもしないか、と。」

「そ、そつか。」

「勿論、お断りしましたけれど・・・。」

「そつか。」

何故か、ほつとしたように息を吐くラテル。

しばらく思案顔をしていたかと思うと、やおら身体ごとリリヒリに向き直つた。

「わ、私が同じ事を言つたら・・・やはり断るか、ミラ?..」

「・・・え?」

きよとんとした顔をラテルに向ける。彼は、やや緊張した表情でミラの答えを待つていた。

「あ・・・その・・・。」

ようやく意味を理解して、ミラが頬を赤らめる。

「・・・喜んで・・・お受けします・・・。」

消え入りそうな声で、答えた。

「ひゅう。やるじやん、ラテル。」

テリウスが茶化す様に口笛を吹く。

「一人がそんな仲だつたとはねえ。知らなかつたよ。」

「テ、テリウス王子！」

慌てるラテルに、テリウスは意地悪く笑つて見せた。

「良いじやん。お似合いだよ、とても。あーあ、僕にも素敵な女性が現れないかなあ。」

「ガ、ガディフォールの様子を見に行つて来ます。行くぞ、ミラー。」

「・・・は、はい・・・。」

さり気無くミラの手を取つて、ラテルは足早に部屋を出でていつてしまつた。

「ふーん、なるほどねえ。道理で昨日素氣ないとthoughtたら、お相手がもう居た訳か。」

「君も居るだろ、イルム。」

「まあねえ。ほら、俺つて色男じやん?」

「・・・自分で言つのは、どうかと思うよ。」

テリウスが溜息混じりに呟く。

「まー、何ですね。はつきり言える事は、この一団が、破壊神の封印を解きに向かつてる集団には、とても見えないつて事ですかねえ。」

「いつからそこにいたのか、テリウスの周りを飛びながら、チカが笑う。」

「でも、重苦しい空氣よりずっと良いですよね。ねー、『主人様?』

「・・・そう、ですね。」

急に話を振られたシユウが、少し困った様に笑つた。

「ずっと緊張感が無いままでは困りますが・・・。たまには、良いかも知れませんね。」

「ですよねー！」

チカは嬉しそうに主人に擦り寄つて行く。

「何だかね、ご主人様。アタクシ、ここに居場所を感じるんですよ。」

「・・・そうですか。」

「」

「「」主人様は、感じませんか？」

「・・・さあ、どうでしょうね。」

曖昧な主人の言葉に、チカが、嬉しそうな顔をした。

是とも非ともつかない応えが返ってくるのは、殆どの場合、肯定を意味しているのだと、知っていたから。

洞窟の最奥である、巨大な広間に辿り着いた。

グナインと、それに搭載された全ての機体を置いても、まだ広さを感じるその広間は、ティーバの地下に存在していた。

風の音ではない、はつきりとした呻き声が聞こえてくる。

怨霊が、この場所の邪氣に中でられ、集つているのだらう。

「さて、ここが最も封印の力が強いようですね。」

グナインのブリーフィングルームに集まつた全員が、シユウの言葉を聞いていた。

「「」、ここ下に、ヴォルクスルが眠つてゐるのかい？」

「あら、テリウス、声が震えていましてよ。」

「そ、そりやあ、そうさ。姉さんは、平氣なのかよ？」

弟の言葉に、モニカは意外だとばかりに頬を膨らませる。

「シユウ様のお傍に居る限り、私に怖いものなんて無きにしも御座いません事よ。」

「・・・姉さん、それ、使い方違う。」

相変わらず姉に溜息を吐くテリウス。ざきくさに紛れて、シユウの腕を掴むモニカ。それを目敏く見付けるサフィーネ。

「ちょっと、モニカ！アンタ、シユウ様にくつつき過ぎよ、離れなさい！」

「嫌ですわ！」

「・・・遊んでいないで、準備を始めますよ。」

シユウに窘められ、モニカとサフィーネが同時に返事をする。

「テリウス、モニカ、これを。」

シユウから渡されたのは、小さなプレート状のオリハルコニウム。

「シユウ、これは？」

「呪文記憶素子です。その中には封印を破る為の呪文が入れてありますので、それを扱える魔力さえあれば誰でも使えます。とは言え、

一回きりの使い捨てですが。」

テリウスが珍しそうにそれを見つめる。「へえ、こんな便利な物が開発されてるなんて、知らなかつたよ。これがあれば、わざわざ長つたらしい呪文覚えなくて良いんだろ。アカデミーの連中つて、いつも秘密主義だよなあ。」

「これは、アカデミーで開発された物ではありませんよ。」

「あれ、そうなの?」

「ええ、地上の技術を参考に、私が作った物ですから。」

「流石はシユウ様ですわ、魔術以外でも、何でもお出来になられますのね!」

「いやあ、姉さん、これまたスゴイ言葉遣いを・・・。」

感嘆の声を上げるモニカに、テリウスはまたもや呆れる。やはり、何度も注意したところで姉の素つ頓狂な敬語は直らなそうだった。

「まあ、ウハアレベリングの点で、まだまだ改良の余地がある物ですが・・・。今回はこれで充分でしょう。」

「で、コレ、どうやつて使うのさ、シユウ?」

「持つているだけで大丈夫ですよ。」

「・・・あの、シユウ様。・・・私に、何かお手伝い出来る事は?」

おずおずと、サフィーネが声をかけてくる。そんな彼女に、シユウは静かに告げた。

「今はまだ、結構ですよ。」

今は。

まだ。

シユウの言葉に微かな疑問が浮かぶが、すぐサフィーネの頭からは消え失せる。

彼のする事に、間違いがある訳無いのだから。そう思つた。

「・・・シユウ、別に何も起こんないけど?」

テリウスの声が聞こえた。そう、もうすぐ封印が解けるのだ。願いが、もうすぐ叶う。そう思つと胸が高鳴つた。

『『煉獄変断章』第六段、レギウスがマナクの親子に投げかけた言

葉は？」

シユウの、静かで、厳かな雰囲気を纏つた声が響く。儀式の始まりを告げる言葉だ。

「そんなモノ、知るワケ……。『テリウスが不平を漏らしあつとした瞬間、手にしたプレートが淡い光を放つ。

「『光強ければ、また闇も深く、遍く光照射らば、遍く闇に覆われん。』」

喉が勝手に言葉を発する。何とも奇妙な感覚だつた。

「な、何、コレ！？」

「これが、呪文記憶素子の力ですよ。では、続けます。モニカ、『煉獄変断章』第一段。」

「『我が神に比ぶるモノ無し、我、唯一にして、全て也……。』『三人が静かに儀式を行う様子を、サフィーネは感心しながら見つめていた。』

「スゴイわね……。こんな高度な呪文がすらすら出てくるなんて。

「呪文には、言靈が宿る。魔力が高く、また、その意味を充分に心得ていなければ、言靈は音に宿る事を拒み、空しく喉を通り過ぎるだけで終わる。

「テリウス、続きを。」

滯り無く、進んでいる、筈だつた。

「『その名を讀えよ、我が神の名を。畏れよ、その名を……。』『

その呪文を聞いた瞬間、サフィーネの顔色が変わる。はつきりと、息を呑むのが分かつた。

「・・・・・これは・・・・・シユウ様！違います！－－これは、第一段では無く、第十二段・・・・・！」

悲鳴に近いその叫び。それを最後まで言い終わる事無く、サフィーネが恐れていた事が起つた。

遠くから、獣に似た咆哮が聞こえる。

その声が、段々近づいて来るのが分かった。

「と大きく地面が揺れる。

「シユウ様っ！今の呪文は・・・！」

近づいて来るモノの正体を、シユウとサファイーネだけは理解していた。

「・・・すみません、皆さん。私のミスです。」

グナインの目の前にある地面を割って、巨大な腕がそこから現れた。サファイーネが、ああ、と絶望にも似た声を漏らす。

腕、肩、そして、その上半身。やがて、その全身がずるりと、穴から這い出して来た。

有機物と無機物を、出鱈目に混ぜた様な、その姿。何度か、文献で見た、その姿。

空気が震える程の咆哮を、“それ”が上げる。

蜥蜴に似た口を持つ下半身に、蜘蛛の物とも思える脚を付けて、ぽつかりと穴の空いた腹からは、蛇のよつた触手が何本も伸びていた。そして、両肩には表情の無い、無機質な顔。金属そのものの光を纏つて輝く鋭利な翼。

ゆつくりと、その首が、獲物に、グナインに向く。何処までも無慈悲な、仮面のよつたその顔が。

死と破壊を司る、神。

サーヴァ＝ヴォルクルス。

「どうやら、封印を解いた上に、分身まで呼び出してしまったようですね。」

淡々と述べるシユウに、困惑した様子は無い。どこまでも落ち着いた、いつもの彼。

彼を除く全員が、息を呑んだ。

「・・・どうやら、道を塞がれたようだな。」

「通せんぼってヤツだな。退かさない事にやあ、帰してくれそうしないねえ。」

リンとイルムが、諦めた様な声で呟く。

「そうですね……仕方がありません。」

シユウの言葉に驚愕し、サフィーネは叫ぶ。

「シユウ様！？ま、まさか、ヴォルクルス様を！？」

「此処で死ぬ訳にはいきませんからね。」

静かな静かな、その声。

「し、しかし、ヴォルクルス様を……手にかけるなんて……。」
サフィーネは、あくまでも抵抗した。成人を迎える前に独りになつてしまつた為、正式な契約はこそしていないものの、彼女はヴォルクルスに忠誠を誓つた僕。

主に刃を向ける事など、そう簡単に出来る筈は無かつた。

「シユウ様、サフィーネなんか、當てにしてはダメですわよ。私達だけで、やりましょう！」

語氣を荒げて、モニカが駆け出す。向かう先は勿論、格納庫。

「ああ、僕もやるよ。こんな薄暗い所で死ぬなんて、ゴメンだからね。」

相変わらずやる気は無さうだったが、それでも自發的に、テリウスは姉の後に続く。

「俺もやるぜ。何たつて、リンちゃんと死なない約束しちゃつたらさ。好い男つてーのは、約束は守るモンだからな。」

「……お前一人では力不足だろう。私も行く。」

二人連れたつて、イルムとリンも格納庫へ向かつた。

「ふふ……コイツは手応えがありそうだ。アツラーの他に神は無く、ムハンマドは神の使徒なり！」

道中、全く喋らうとしなかつたアハマドが、嬉々として飛び出して行く。

「……ラテル……さん。」

「ハハ、心配は無用だ。必ず無事に戻つてくると約束しよう。」

「……はい。あの、コクピットまで、お見送りに着いて行つても、構いませんか？」

「勿論だ。とても、嬉しく思う……。」

ぴしりと背筋を伸ばして、まるで初陣へと出向く兵士の様に歩く
テル。

その三歩ほど後ろを、そつと着いて行く//。//。

そして、ブリーフィングルームに残つたのは、二人。

サフィーネと、ショウ。

音が聞こえた。

銃声、破裂音、咆哮、何かにぶつかるような鈍い音。時折、振動も伝わって来る。

「・・・シユウ様・・・。」

沈黙を破つたのは、サファイー・ネだった。

「・・・シユウ様、本当に・・・その、ヴォルクルス様を・・・。」

そこまで言って、口を噤んでしまう。

瞳には、迷いの色が浮かんだまま。それでも、シユウを見つめていた。

「できませんか？・・・私の、頼みでも。」

その言葉に、サファイー・ネの瞳が揺れる。

「・・・シユウ様の・・・頼み・・・。」

愛しい人の、お願い。

神に誓つた忠誠と、この男への思慕の念とがサファイー・ネの中でせめぎあう。

「サファイー・ネ、無理はしなくても良いですよ。戦いたくないのであれば・・・。」

「わ、私、は・・・。」

一度、瞳を伏せる。

思い出した、在りし日の誓い。

ゆっくり深呼吸をし、伏せた瞼を上げた。紅い瞳が、輝く。

「・・・私は！・・・ヴォルクルス様の僕である以上に、シユウ様、貴方の、貴方様の部下です！」

きつぱりと、言い切る。瞳に浮かんでいた迷いは、消えていた。

あの日、二人で言葉を交わしたあの日、誓つたのだ。神に誓つた忠誠よりも、強く。

「私も、戦います！シユウ様と共に、戦わせて下さい！！！」

神は、私を救つてはくれなかつた。

救つてくれたのは、目の前に居る、あの人。

「有難う・・・貴女は部下などでは、ありませんよ。」

そつと、シユウが手を伸ばし、彼女の紅い髪を、撫でる。

「サフィー・ネ。・・・貴女は私の・・・仲間です。」

優しく、微笑む。あの日の様に。

「・・・シユウ・・・様・・・。」

サフィー・ネは、少し戸惑つてから、そつと、一步踏み出した。

今まで、この人の部下として、決して出すぎないよう、常に一步引いていた。

でも、部下でないなら。

仲間であるなら。

構わないだらうか。この一步を縮めても。

「・・・シユウ様・・・私、今のお言葉、決して・・・決して忘れません・・・。」

お互ひの鼓動すら、聞こえてきそうな距離。

本当は、思い切り抱きつきたかった。抱き締めて貰いたかった。

それでも、彼女に出来たのは、遠慮がちに、その胸に顔を寄せる事だけだつた。

シユウは、拒絶する事も受け入れる事もせず、静かに立つてゐる。ゆつくりと、顔を上げた。

こんなに間近に、あの人人が居る。

少し困った様に、それでも笑つて。

目は強い意志を湛え、笑顔に空々しさの欠片も無く。今なら分かる。

これが、これこそが、あの人なのだと。

「私は・・・シユウ様の、為ならば・・・。」

サフィー・ネがそこまで言つた時、強い衝撃がグナインを襲つた。

「・・・苦戦しているようですね。」

すつと、シユウがサフィー・ネから離れる。

「あ・・・。」

名残惜しそうに、サフィー・ネが小さな声を上げた。
その彼女に差し出される、白い手。

「行きましょう。姫が待っていますよ。」

仲間が、待っている。

「・・・はい！」

手を伸ばした。

縋る様にではなく、包み込むように、あの人の手を取る。
暖かい、と思つた。

「あー、もう…どうなつてんだよ、コイツ！？」
通信機越しに、イルムが文句を言つのが聞こえた。

「知らん。私に聞くな。」

リン自身、先刻から何度も不平不満を囁殺している。
とにかく出鱈目な相手だった。

脚を撃ち抜いて体勢を崩そつとすれば空中に逃げ、翼を切り落とせ
ば瞬時に再生させる。

攻撃パターンこそ、原始的で単純ではあつたが、広間のいたる所に
残る痕を見れば、その威力の高さは窺い知れた。

「おい、ヤツの気を逸らせ。」

言い放つて、アハマドが単身、バケモノもといヴォルクルスの分身
に突つ込んで行く。

「ちょ、ちょっと、アハマド！…つたく、知らないよ…！」

テリウスが、アハマドの行動に戸惑いながら、それでもヴォルクル
スの気を逸らそうとレールガンを乱射した。

何発かが命中し、仮面の様な顔がこちらに向く。

「…・やつば。」

気を逸らす事には成功したようだが、すつかり自分がターゲットにな
なつてしまつてゐるらしい。

腹から生えた無数の蛇が、一斉にテリウスを睨む。何匹かが、その
牙を剥いて飛び掛つて来た。

「うわつ…！」

蛇の顔が目の前に迫る。

「テリウス！」

後ろから、モニカの声が聞こえた。
ばしん、と乾いた音がして、蛇が見えない何かにぶつかる。モニカ
の張つた結界だろう。

「何をほーっとしてらっしゃいますのー！」

思いつきり怒られるが、あの蛇に咬まれるよりはましだった。

「モニカ王女、テリウス王子ー。」無事ですかー？

結界に咬みついている蛇を一匹ずつ、ラテルが撃落としていく。

「もう、死ぬかと思ったよ！アハマドはビビリにいつたのさー。」

「ここだ。」

その言葉と同時に、ヴォルクルスの額が割れ、体液（と思しき物）で濡れた刃が突き出てきた。

「この程度で死を覚悟するなど、まだまだ甘いな、お前は。」

楽しそうに言葉を続けながら、アハマドは剣を横に薙ぐ。風を切る音がして、ヴォルクルスの額が二つに割れた。

流石のヴォルクルスも、何箇所かを同時に再生をせる事は出来ないようで、動きは確実に鈍くなっていた。

これを好機と、アハマドは更に刃を突き立てる。

「アハマド、後ろーー！」

誰かの声が聞こえた。妙に切迫した声に、振り返る。鋭い爪が、目の前にあつた。

「つちいー！」

舌打ちして、回避行動に移る。それでも、遅い。直撃は免れないな、と思った。

鞭のしなる音がした。次いで、目の前まで迫っていた爪が叩き落される。

「アナタもまだまだ甘くてよ、アハマド。」

紅い機体が浮いていた。サフィーネのウイーゾルだ。

「ふん、やつと来たか。」

「サフィーネ、遅いじゃありません事ー？グズグズしそぎですわー！」

「やっぱり、来たんだね、サフィーネ。ま、そんな気がしてたけど。」

「全く、遅かつたから、心配したぞ。」

「サフィーちゃん、待つてたぜー！」

口々に、迎えてくれる、仲間達。

大切な、仲間。

私の、大切な。

「お待たせ！！」

大声で叫んだ。

嬉しかつた。

「私も、居ますよ。」

後ろからも、声がした。静かで落ち着いた、愛しい声。

ああ、そうだ。私には、この人が居る。

「サフィー、参りますわ！」

もう迷うまい。

そう決意して、地を蹴つた。

グラントンとウイーゾルが出てきてから、勝負はあつという間だつた。

ブラックホールクラスターの残照を眺めながら、テリウスは安堵の溜息を吐く。

「・・・終わった・・・よね？」

「ええ、ご迷惑をおかけしました。」

ちつとも悪びれないシユウの言葉に、これが予定していた事なので無いかとすら思えて来る。

「はあ・・・まあ、良いや。僕ら、先に戻つてるよ。」

グナインへと帰還していく仲間達を見送りながら、シユウはウイーゾルに通信を入れた。

「サフィーネ、お疲れ様でした。」

「あ、シユウ様・・・。シユウ様の為ですもの。」

先刻のグナインでの遣り取りを思い出し、頬を染めるサフィーネ。

「有難う御座います。・・・もう一つ、頼み事をしても構いませんか？」

「はい、何なりと。」

「では、今回の件はルオゾールに黙つていて下さい。彼の性格は知つていいでしょ？また、お説教をされる破目になりますからね。」

「・・・ええ、勿論ですわ。」

苦笑混じりに紡がれる言葉。サフィーネは迷う事なく頷いた。

「チカ、貴女もですよ。」

「うー・・・ストレス溜まるなあ・・・。」

お前にストレスなんか溜まるのか。と他に人が居れば、突つ込みが入つただろうが、残念ながら、今はサフィーネとシユウしか居なかつた。

「よつし、こんな時はストレス解消に限ります！ちょっと失礼しま

すよ

一、二回咳払いをすると、大きく息を吸い込む。

虚空に向かつて大絶叫。

「ふいー、スッキリしたー。」

「……チカ、それは穴に向かって言う言葉では無いのですか？」

白河先生、突つ込みの方向が違います。

全ての機体を収容し、グナインはトロイアへの道を走り出した。サフィーネとリン、イルムはメンテナンス作業に追われ、アハマドは礼拝の時間だと言って、メッカの方向探しに右往左往。ラテルとミラ、そしてモニカは夕食の当番を買って出た為、その準備にかかりきりだった。

ショウはと言えば、グランゾンから引っ張ってきたデータを、自身のコンピュータに保存してある、他のデータと照らし合わせている最中だった。

うだつた。

「……何か、良い事でもあつたのかい?」

「おや、ノックも無しに他人の部屋へ入るとは、感心しませんね。」

言葉では非難しているが、余程機嫌が良いのか、表情は柔らかい。

卷之三

シユウとは対照的に、テリウスの表情は何処か固い物だつた。緊張

しているのがも知れないと

・・・良い事ですか……わあ、エハハハ

はぐらかす様な答えに、テリウスはもう少し思い切った質問をぶつ

ける事にした。

何度も言い淀んだ後、それでも、はつきりと、テリウスは言つ。

「今日の失敗・・・。あれ、本当に、ミスだったのかい？」

「ええ、私のミスですよ。」

思つた以上にあつさりと、その答えは返された。

相手の目をじつと見つめる。いつもと変わらない、静かな目。余りに変化がなすぎて、釈然としない。

分身とはいへ、奉じる神に刃を向けた後なのに、だ。

「・・・君が、あんな単純なミスなんて、らしくないなつて思つてや。」

「おや、随分と買い被つて頂いていますね。ですが、私とて、人の子ですよ。」

「・・・そう。・・・なら、良いんだ。君も、ぼくらと一緒に人間なんだもんね。たまにはミスもするよね。」

「勿論です。」

しばしの沈黙。先に口を開いたのは、やはりテリウスだった。

「ぼくは、別に君が何をしようが構わないよ。ただ、騙されるのはゴメンだつて、そう思つただけさ。」

「そうですか。肝に銘じておきましょ。・・・話は、それでお仕舞いですか？」

「ああ・・・。」

「では、すみませんが、一人にして頂けますか。少し、考えたい事がありますので。」

「・・・分かつたよ。」

半ば追い出される様に、テリウスは部屋を出た。やはり、釈然としない思いは残つたままだつた。

「・・・少し、浮かれ過ぎましたか。」

誰も居なくなつた部屋で、シユウはそう呟いた。

「私も、人の子・・・ですね。」

自嘲氣味に笑う。

そして、眩いた言葉に、違和感を感じた。

子供。

誰の？

勿論、両親の。

父親と、母親の・・・。

母親の・・・？

頭痛がした。

酷く鈍い痛み。

思考が霧消する。

瞳を閉じる直前、一面に広がる赤を見た気がした。

闇の檻

僕は青い鳥を探している。
逃げてしまつた、僕の鳥。

思い出の国に行つた。老人が、青い鳥をくれた。
帰つて来たら、鳥は黒くなつていた。これでは幸せを運んでくれない。

闇の国に青い鳥がいるらしい。噂を聞いて、僕は急いだ。

沢山の青い鳥が群れを成して飛んでいた。一羽捕まえて、鳥籠に入れた。

意気揚々と、帰る途中で、青い鳥は死んでしまつた。これでは幸せを運んでくれない。

落ち込んだ気分のまま、僕は歩いた。

未来の国に着いた。

青い鳥の事を聞いたら、近くの森にいると教えてくれた。
青い鳥を見つけた。

でも、その鳥は、次々と色が変わつてしまつて、青のままでいくれなかつた。

これでは、幸せを運んでくれない・・・。

こんなに遠くまで來たのに。

青い鳥は見つからない。

逃げてしまつた青い鳥。

どうか、それを見つけたあなた、僕の所へ返して下さい。

それは、いつか幸せになる為に、僕に必要なモノなのです。

笑い声が聞こえた。

くすくすと、嘲笑うような声。

アンタには、何も無いのね。そう、何も無い。

思い出も無い。だって、アンタには、祈りを捧げる相手もいない。

くすくす、くすくす。

癪に障る笑い声。

石はみんな宝石だけど、アンタの世界には、一粒の石だって落ちちゃあいない。

だから、アンタには何も無い。

くすくすくすくすくす。

光は全てを見抜いてくれているけれど、アンタの世界にや、聞しか
ない。

だから、アンタには、何も無い。

煩い。

どんなに遠くへ行つたって、青い鳥なんて、見つけられる筈が無い
のぞ。

煩い。黙れ。

だって、アンタは

煩い。黙れ。喋るな。

耳を塞ぐ。

聞きたくなかった。

それでも、声ははつあつとい、僕に告げる。

だって、アンタは、檻の中にいるんだから。

高らかに響いた嘲笑が、僕の耳を打つた。

真っ暗な闇の中に居る事に、その時初めて気付いた。

ルオゾール

その男は、いつでも暗く重い空気を纏つて現れる。

亡靈の様な愛機と共に。

貴族の出身でありながら、破壊神、ヴォルクルスを奉じ、尚且つ、自らの足でもつて地に立つその男。

“魔神官”、“闇の貴族”。

いつしか、人々は男の事をそう呼び始めた。

男の名は、ルオゾール＝ゾラン＝ロイエル。

「シユウ様、如何でしたかな？」

卑屈そうに腰を屈めて、ルオゾールはしげがれた声を出す。

「封印の解放は終わりました。これで、残るはここだけですね。貴方の方は？」

素気なく答えて、シユウは辺りを見回した。

封印を解放したにしては、ヴォルクルスの氣配が薄い。

そんなシユウの様子に気付いてか、ルオゾールは言い繕う様に続けた。

「は・・・それが、サイバスターに邪魔され、完全に封印を解くまでには至りませなんだ。誠に以つて、お恥ずかしい次第です。」ルオゾールの後ろには、“呪靈機”ナグツィアートが、亡靈の様に佇んでいる。

アストラル界にその半身を置き、残留思惟を喰らつて活動する特異な機体。

オリハルコニウムでは無く、賢者の石とエクトプラズムとで構成された装甲。

どんよりと濁つた色の外装は、脚の無い形状と伴つて、不気味さをより引き立てていた。

「でも、もうサイバスターは居ないんでしょう。何で封印をそのままに？」

シユウに寄り添つていたサフィーネが口を挟む。

「封印の解き方が不完全だったのと、サイバスターめがヴォルクルス様の分身を打ち倒しおりましてな・・・。神殿内には邪気が渦巻き、『デモンゴーレム』が大量発生してしまつたのです。もはや、私めにもコントロールできませぬ。」

ルオゾールが忌々しげに神殿を見遣つた。

目の前にある物なのに、手が届かない歯痒さでも感じているのだろうか。

「今は結界を張つて、閉じ込めてはあるのですが、あの邪気の量では、あまり長くは持ちますまい・・・。」

「あら、でも、アナタにはあの“無敵モード”があるじゃない。それを使えば『デモンゴーレム』なんて、すぐじやなくて？」

「その様な下衆な呼び名はやめて頂けますかな。あの術は魔力を使い過ぎますでな、しばらくは使えませぬ。」

「・・・肝心な時に、役に立たないのねえ。」

溜息混じりに、サフィーネはナグツィアートを眺める。

戦う事を想定した魔装機と違い、呪霊機は魔術増幅機器の色合いが強い。

「ルオゾールの魔力と呪文とで賄われているが、それ自体の攻撃手段は、意外な程少なかつた。」

「祭壇への道は通れるのですか？」

暫く神殿の様子を見ていたシユウが口を開く。

「それは、何とか・・・。大丈夫かと思われますが・・・。」

「では、中の様子を見てきましょ。サフィーネ、テリウス、付いて来て下さい。」

言つて、シユウは踵を返す。彼らの背後には、グラソゾンを筆頭に、

全ての機体が居並んでいた。

「ぼくも行くの？」

ガディフォールの足元で、遣り取りを見ていたテリウスが、不満の声を上げる。

「つべこべ言わないの。」

すれ違い様、テリウスの肩を強かに叩き、サファイー・ネが笑った。

「・・・じゃ、じゃあ、アタクシも、『ご主人様と一緒に・・・。』

嫌な予感を悟り、チカが慌てて飛び去ろうとする。

そんなチカを、ルオゾールは素手で捕まえた。

「お前は、聞きたい事があるのでな、ここに残れ。」

予感的中。

チカは冷や汗一杯に、渋々頷く。

「・・・な、何でございましょ・・・。」

「まずは、あれだ。」

手にした杖で、ノルスを指しながら、ルオゾールは続けた。

「何故、モニカ王女が魔装機などに乗つてある。生贊に、その様な物など、必要あるまい？」

「え、えーと・・・それはー、ですね・・・えと、あの・・・。」

チカが「こによ」にょと言い淀んではいると、話題を聞きどがめたのか、

モニカがつかつかと歩み寄つてくる。

「変な詮索はしないで下さいまし。私はただ、シユウ様のお役に立ちたいと思われただけですわ！シユウ様のお役に立たれるのでした

ら、魔装機にも乗りますし、生贊にだつてなります！！」

凄い気迫でまくし立てるモニカ。言い終わると、ふんと顔を背け、ノルスの元へと戻つて行つてしまつた。

「ふむ・・・まあ、良いでしょ。」

若干、モニカの気迫に圧倒されながらも、ルオゾールは納得した様に呟く。

「・・・チカ、他に変わった事は無かったのか？」
チカが、ぎくりと、小さな身体を大きく震わせる。

「えつ！？」

チカの脳裏に、先日の“ヴォルクルス分身殺害（？）事件”が浮かぶ。

しかし、主人に口止めされてる以上、ルオゾールにばらす訳にもいかず、もごもごと口籠つた。

「何だ、変わった事はあったのか、無かつたのか。はつきり言つてみよ。」

あれだけのリアクションをした以上、無かつたですとも言えず、チカは右往左往する。

「え・・・つとー、ですねえ・・・。」、これは、ヒミツなんですけどね。絶対の、絶対に、ヒミツなんですけどね。・・・誰にも言つちゃダメですよ・・・。」「

「だから何だ？」

ルオゾールの言葉に苛立ちが混じり始める。チカは主人がまだ戻つて来ていない事を確認し、意を決した様に、ルオゾールの肩に飛び移つた。

「実は・・・。その・・・。」

「ごによ」によと小さな声で何事かを呟く。何を言つているのか、聞き取ろうと、ルオゾールが耳を寄せた瞬間。

「王様の耳は口バの耳ーつーーー！」

チカ、魂の絶叫。

ルオゾールが仰け反る。

しばらくその場を支配する、気まずい沈黙。

ゆつくりと、チカに顔を向けたルオゾールの額には、見事な青筋。

「・・・貴様は・・・いきなり何を言いだすかと思えば・・・耳

元ででかい声を出しあつて・・・！」

怒りに拳を震わせるルオゾール。冷や汗全開のチカ。

「だつて・・・だつて・・・。」

泣きそうな声で弁解しようとするが、ルオゾールは最早聞く耳を持つていなかった。

「チカ、大体貴様は使い魔のクセに自我を持ちすぎておるのだ！そのせいで余計な事を喋り過ぎる！！そもそも、使い魔と云う物はだな・・・。」

「・・・どうかしましたか、ルオゾール？」

ルオゾールのお説教がまさに始まる直前、チカにとつては救いの神の様に、シユウ達が戻つて来る。

「おお、シユウ様。如何でしたかな、神殿内の様子は？」

「ええ、儀式を行う分には問題無さそうです。」

「左様で御座いましたか。では、急いでヴォルクルス様復活の儀式を始めましょうぞ。」

足早にナグツィアートの元へ向かうルオゾールの背中を眺めながら、チカは安堵の溜息を吐いた。

「・・・助かつたあ。ルオゾール様のお説教は長いんだもの・・・。」

「デモンゴーレムの呻き声を聞きながら、グナインはナグツアートの後に続いて神殿内を進んでいた。

例外も勿論あるが、ヴォルクルスの神殿は基本的に全て巨大だ。ヴォルクルスが、古代ラ・ギアスに存在していた巨人族の怨霊と謂われている為かも知れない。

これも、殆どのヴォルクルス神殿に共通する事なのだが、装飾が極めて少なかつた。洞窟に、申し訳程度の燭台と祭壇を設けただけと、いう神殿も存在する。

「これが、ヴォルクルスの神殿？・・・思ったより、なんつーか、味気ないな。」

だから、イルムのそんな感想も、当然といえば当然だつた。

「まあ、どこもこんな感じですよ。祀っている神が神ですから。」全員が集まつた操舵室の中で、シユウは優雅に紅茶を飲んでいる。その後ろには、紅茶を運んで来たモニカ。

そこだけを切り取つて見たら、とてもこれから邪神復活の儀式に挑む様には見えなかつた。

「皆さん、これからお忙しくなれるようですから、今のうちにお茶でもお飲みになつて下さいまし。」

モニカが紅茶を配つて歩く。

ヴォルクルスの神殿は、その巨大さ故に、最奥にある祭壇までかなりの距離がある。

紅茶を楽しむ時間は充分にありそつた。

カップに注がれた紅茶の琥珀色を見つめながら、サフィーネは溜息を吐いた。

もうすぐ念願のヴォルクルス復活が叶うといつて、この憂鬱さは

何なのだろう。

ふと顔を上げたサフィーネの目に、地上人達と談笑をするモニカが映った。

「どうしました、サフィーネ？」

後ろからかかつた声に振り向けば、思い描いた通りの愛しい人。

「・・・シユウ様。いえ、何でもありませんわ。」

サフィーネは、また紅茶に視線を戻すと、そつと一口飲んだ。

美味しいと思う。

紅茶を美味しいと思うのは、モニカが淹れた物を飲んだ時だけだった。

もう一度、モニカを見た。地上人達に加えて、いつの間にかラテルとミラ、テリウスも、会話の輪に参加している。

アハマドは、つまらなそうに操舵室から見える風景を目で追つていた。

全員が、別々の方向を向いて、別々の目的の為に、今ここに集まっている。

それを、不愉快だとは思わなかつた。

「あの・・・シユウ様。モニカは、本当に生贊にはしないんですのよね？」

自分でも、何故今更そんな事を聞いたのかは分からなかつたが、何となく、聞かずにはいられなかつた。

「ええ。モニカは生贊には不向きですから。」

少し冗談めかしたシユウの言葉に、サフィーネは安堵の溜息を吐く。そん彼女の様子を見て、シユウは微笑んだ。

「安心しましたか？」

「え、あ、いえ、そんなんじゃ、ありませんのよ。」

慌てたサフィーネの声が聞こえたのか、モニカが振り向いて、不思議そうにこちらを見ていた。

「どうかなされましたの、サフィーネ？」

「何でもないわよ、モニカ。」

そう。と納得した様に、モニカは会話に戻る。
言葉の中に潜む、信頼。

男としか、関わりを持つて来なかつたサフィーネにとつて、初めての女友達。

そんな事を思うと、何だかむず痒い気分になった。

カップに残つた紅茶を飲み干す。

向けられた背中に漂つるのは、親愛の情。

「モニカ。」

呼ばれたモニカが振り返つて、ようやく自分が名前を呼んだ事に気が付いた。

「あ、えーっと・・・紅茶、もう一杯貰える?」
慌てて言い繕つて、空のカップを軽く振る。

「あら、それは気付きませんで、申し訳ありませんわ。」

紅茶のポットを持つて、モニカが小走りに近付いて来た。
サフィーネのカップに紅茶を注ぎ、ついでとばかりに全員のカップへ紅茶を足しに行く。

揺れる彼女の琥珀色の髪が、紅茶の色によく似ていると思つた。

ルオゾールは酷く不機嫌だつた。

それというのも、ようやく崇拜している神が復活する為の儀式が、一向に始まる気配を見せないからだ。

始めのうちは順調だつた。

祭壇を整え、燭台に灯りを入れ、さあ儀式が始まるといった段で、テリウスがいきなり「トイレに行つて来る。」と言つて駆けて行つた。

彼がやつと戻つて来て、改めて始めるぞと意気込んだ所で、モニカとサフィーネが「じゃあ私も。」と連れたつて用を足しに行つたものだから、その怒りも一入だつた。

「むむむむ・・・揃いも揃つて、緊張感が欠けてある！！」

地団駄を踏まんばかりの怒りに、シユウは、「まあまあ。」と宥めにかかる。

「そんなに焦る必要はありませんよ、ルオゾール。」

そんなこんなで、結局儀式が始まつたのは、それからたつぱりと一時間は後の事だった。

いつもの服ではなく、純白のドレスに身を包み、念入りに化粧をしたモニカが、ノルスを伴つて祭壇に登る。

「魔装機など要りませぬ！」

ノルスを祭壇に上げた事が気に食わないのか、ルオゾールが鋭い声を飛ばした。

「あら、ノルスは私の一部でしてよ。自分の一部を置いて行く事なんて、出来ません事でしょ？」

澄ました顔であつたりと返され、ルオゾールはいよいよ顔を赤くして怒り始める。

「こ・・・この・・・！」

わなわなと怒りに身を震わす彼を、シユウが静かな声で囁める。

「別に、それ位構わないでしょ？」

シユウに言われては、それ以上咎める訳にもいかず、ルオゾールは大きく息を吸い込んで、落ち着いて見せた。

「・・・良いでしょ。では、シユウ様、モニカ王女の前へ。」

全員が固唾を呑んで見守る中、シユウは厳かな空氣を纏つて祭壇を登る。

祭壇には、モニカとルオゾール、そしてシユウの三人が、小さな三角形を作る様に並んだ。

「これで良いのですね。」

確認するシユウに、ルオゾールは満足気に頷く。

「大変結構。・・・では、煉獄変断章第4段。」

シユウは、懐から装飾された短剣を取り出し、祈る様に掲げる。

「『全てに平等なるは、死と破壊・・・万物は無から生じ無へと還る・・・』」

言靈が神殿内に響き渡り、デモンゴーレム達の呻き声が強くなつた。

「シユウ様、生贊に刃を。」

ルオゾールの嗄れ声が、耳元で聞こえる。

花嫁の様に着飾つたモニカが、目の前で微笑む。

「痛くしないで下さいね、シユウ様。」

神妙な空氣を嫌つてか、それまで黙つて成り行きを見ていたサフィーネが一際明るい声を出した。

「あらあら、ガキねえ。私なんて、痛いのも好きよお。・・・それに、最初は痛くても、そのうちそれが・・・。」

「茶々を入れるでない、サフィーネ！」

ルオゾールに叱られて、サフィーネは肩を竦める。シユウが、モニカを生贊にはしないと言つたからには、彼女は犠牲にならないのだし、暗い空氣になる必要など無いと思つていた。

「さあ、シユウ様！」

ルオゾールが急かす様に声を出す。シユウは「分かっていますよ。」とだけ返して、またモニカに向き直った。

「モニカ・・・ヴォルクルス様の復活には、信頼していた者に裏切られた、絶望と悲しみが必要なのです。その感情が強ければ強い程・・・。」

シユウの言葉を、モニカは黙つて聴いていた。口元には微笑みを浮かべたままで。

「貴女に解りますか、モニカ。信じていたモノが崩される時の、あの絶望が・・・。」

シユウの瞳に冷たい光が宿る。見る者を凍えさせる様な、その眼光の前ですら、彼女は笑顔のままだつた。

「シユウ様、私には、その絶望は解りかねると存じます。何故なら、私の命はシユウ様の物ですから。」

モニカの言葉に、シユウも笑つた。

「シユウ様、さあ！」

焦れた様な耳障りな声がした。「そうですね。」彼はそれだけ呟いた。

反逆

誰もが、一瞬何が起きたのか分からずについた。

最初に声を上げたのは、サフィーネだった。

リンヒルム、そして、ミラとラテルは、何が起きたのか把握出来ないままぽかんとしていた。

アハマドは、下らなそうに、ちょっと鼻を鳴らしだけだった。

テリウスは、突然の事態に、呆然としていた。

モニカは、聖母の様に、優しく微笑んだまま、ただその様子を見ていた。

シユウは、静かに、眼に冷たい光を宿したまま、笑っていた。

ルオゾールは、我が身に起きた事を理解しようと必死だった。

彼の胸からは、装飾された短剣の、柄の部分だけが生えていた。

「ルオゾール！？」

サフィーネの声が、止まっていた時を動かす。

「な、何が・・・一体・・・？」

自身の左胸から生えた短剣の柄と、目の前の男とを、何度も交互に

見遣り、よつやく搾り出すように、ルオゾールが呟いた。
熱を感じる左胸に手を遣れば、やたら粘つく感触と共に、赤い液体
が伝う。

それが血だと理解するのに、随分と時間がかかった。

「シ・・・シユウ、様・・・？」

ぐらりと歪む視界の端で、名前を呼んだ男が笑っているのを見た。

「フフフ・・・どうですか、ルオゾール。信頼していた者に、裏切
られる気分というのは。」

楽しそうな、心底楽しそうな、その声。

ルオゾールが、その場に崩れ落ちた。その場所を中心に、ゆっくり
と赤い円が広がつて行く。

「い・・・つた・・・何、を・・・？」

「おや、まだ理解出来ていませんか？」と、さも意外そうな顔
をして、シユウはルオゾールの髪を掴んだ。

「せっかく、あれだけ信仰していたヴォルクルスの生贊にして差し
上げたのですよ。もう少し、嬉しそうな顔をしたら如何ですか？」
凶悪な、それでいて、どこか無邪気な子供の様ですらある、シユウ
の笑顔。

全員が、言葉を発する事すら忘れて、その光景を見ていた。
一人、モニカだけが、酷く落ち着いた佇まいだつた。

ルオゾールは驚愕に眼を見開いた。

「い、ま・・・ヴォルクルス様・・・の名、を・・・。」

「ああ、呼び捨てにした事ですか？」

何でも無い事の様に、シユウが呟く。「それがどうかしましたか。」

「そんな・・・ヴォルクルス様、と・・・け、いやく・・・を結ん

だ以上・・・逆らう事な、ど・・・。」

「ええ、貴方の御蔭ですよ、ルオゾール。」

シユウの言葉に、ルオゾールはようやく気付く。

未完成だった蘇生術。

消えた記憶。

不可解な行動。

テリウスの存在。

「ま・・・さか・・・。」

「感謝していますよ、ルオゾール。何せ、私とヴォルクルスとの契約も、白紙に戻つたのですから。」

静かに咳くシユウの表情には、しかし、様々な感情が発露していた。今までに見た、どの表情よりも、なお人間らしい、その表情。

「ああ、安心して頂いて結構ですよ。ヴォルクルスはちゃんと復活させますので。・・・貴方の命で、ね。」

「・・・ヴォルクルス様を・・・ふ、復活・・・させ・・・ビリ・・・
・と、い・・・だ・・・。」

言葉の合間に、時折血を吐きながら、ルオゾールは問い合わせ続ける。それは、意識を保つ為の手段なのか、苦しみから、少しでも逃れようとする足掻きなのか。

そんなルオゾールに憐憫の情の欠片も見せず、シユウは淡々と答える。

「ヴォルクルスは私を操ろうとしました。・・・私の性格は知っているでしょ。自由を愛し、何物も恐れない・・・それが、ようやく得た、私の誇りでした。」

ぎり、と奥歯を噛み締める音がした。

「それが・・・あの忌まわしいヴォルクルスとの契約で・・・私の自由は奪われ・・・この世界で、私に命令できるのは、私だけなのです！」

彼は高らかに謳う。十余年の時を経て、ようやく取り戻した“自分”で。

「・・・ヴォルクルス・・・許す事は出来ません。この手で復活させ・・・この手で、その存在を消し去つて差し上げますよー。」

自分の意思で踏み出す、第一歩。遅れに遅れた彼の“誕生”。

「おお・・・お・・・れ・・・お、おい・・・そ・・・。」

息も絶え絶えに、最早言葉にすらならない声を吐き出す足元の男を、

何か汚らわしい物でも見る様に睨む。

苦しいですか、ルオゾール。もう、碌に話も出来ない様ですね。

卷之三

「そう、楽になど死ねませんよ。貴方のその感情こそが、復活の鍵なのですからね。」

小野喜重著『日本書紀傳』卷之三。

「服が汚れますので、触らないで頂けますか。」

卷之三

喉から空気が漏れ出しているだけの様な、その声、癪に障る嗄れ声で、すらないその音は、何処か滑稽でさえあつたが、シユウは既に、彼の事など見ていなかつた。

声が飛ぶ。

今まで『突然と成り行きを見』にしていましたテ-レ-ヴ-ア-スは突然叫ばれた声に驚いた。

え！？

同時に、何がが挙げて書起されたのを知りて、悦て、小さなオリハルコニウムのプレート。呪文記憶素子。

一
斷章第4段2行!!

生きとし生けるもの皆その神はよ!

魔神官と恐れられた男の、余りに呆気ない最期。

それが合図だつた様に、怨靈達が、一斉に謡き出す。瘴氣が渦巻く。

「来ましたね
・
・
・
。」

シユウが、満足そうに呴いた。

ああ、そうか。

彼女はやつと理解した。

自分はずっと、試され続けていたのだ、といつ事に。

封印解放の時から不思議だつた。

完璧と言つて差し支えない程の彼が、どうしてあんな凡ミスを犯したのか。

自分を試す為だけに、彼はわざわざヴォルクルスの分身まで呼び出した訳だ。

あの時、戦う事を拒んでいたら、どうなつていただろう。

彼女は考える。

ルオゾールと同じ末路を辿つたのだろうか。

ああ、それでも。

彼女は、うつとりと彼に視線を向ける。

例えそうなつていたとて、何を構う事があつただろうか。

むしろ、光栄だつたのではないか。

これだけ、愛しく想う男に殺されるのであれば。

髪を撫でて貰つた感触を思い出す。

神に逆らう決意に、必要だつたのはそれだけだつた。

「・・・サフィーネ！」

思索に耽つていた彼女を引き戻したのは、やはり彼の声。

慌てて返事をすると同時に、非礼を詫びた。

「貴女は下がつていなさい、サフィーネ。」

「いえ・・・私も・・・私も戦いますわ！」

大気を振るわせる程の呻き声が聞こえた。

サフィーネは、ぎくりと身を硬くする。

呼ばれている気がした。

地の底から、引きずり込む様な声に。

「サフィーネ、貴女は正式ではないとは言え、ヴォルクルスと契約を結んだ身です。ヴォルクルスの本体を前に、正気を保つていられますか？」

彼が何かを言っている。

聞かなければ、と思う心と裏腹に、耳は違う声ばかりを拾う。

ワレ ハ カミ

オマエ ノ ネガイ ヲ カナエテ ヤロウ

煩い、煩い。

彼女は頭を振つて、その声を追い払つた。

何が神か、と。

私一人、助けられもしなかつたくせに、と。

「シユウ様、私も戦わせて下さい！・・・ヴォルクルスの名は、今を限りに棄てましょう！」

響く声を打ち消す様に、叫ぶ。

彼が、笑つた。

「・・・良いでしょう、サフィーネ。」

「シユウ様、もし・・・もし私が、ヴォルクルスに操られてしまつた時は・・・。」

ワレ ノ ナ ヲ ヨビステル カ ヒト ノ コ ゴトキ ガ

「その時は、シユウ様の手で・・・殺して下さいまし。
・・・御約束しましょう。」

サカラエル モノ 力

ワレ ハ カミ

嘲笑う様な声が聞こえた。
ぎくりとして、振り向く。

真つ暗な闇が、辺りを包んで笑っていた。

思わず舌打ちをした。

冷静な時だったなら、我ながら品が無い、とでも思ったのだろうか。それよりも何よりも、今、冷静さを欠いている事を驚いたかも知れない。

そう、確実に冷静さを欠いていた。

例え、傍目にはそう見えなくとも、だ。

ただならぬ事態が起きている事位しか、部外者には分からなかつただろう。

だから、何故、祭壇に男の死体が転がっているのかも、何故、サフィーネが震えているのかも分からなかつたと思う。

酷い静寂。

その静寂すら、たいした時間は持たなかつた。

地震。

次いで聞こえる、獣じみた咆哮。

背筋が凍る様な、その声。

その場に居る全員が、その声に聞き覚えがあつた。

聞いたのはつい先日。

場所は、ティーバ市。

「き・・・ききき・・・來たつ！」

テリウスが叫ぶのと、ほぼ同時だつたろうか。

神殿内に渦巻いていた瘴気の全てが、一箇所へと集まつて行く。祭壇のさらに奥、玉座とも見える裝飾を施されたそこへと。無機物と有機物とを、出鱈目に混ぜた様な、その姿。

もつ実際に見るものも、2度目だ。

1度目と違う点といえば、そう、分身が間抜けにも穴を開けていたそこに、美しい、不自然な程に美しい、女性の上半身が生えていた、という事位だろうか。

女性は、ゆっくりと伏せていた瞳を開く。

明らかに人間のモノとは違う、爬虫類のそれを彷彿とさせる、その瞳で、女性は緩慢に周囲を見渡した。

「・・・とうとう、姿を現しましたね・・・サーヴァ＝ヴォルクルス！」

完全に形を作ったそれを前に、シユウは喜びと憎しみとを吐き出す。それに気付いたのか、それともただ単に田に留まつただけなのか、女性 ヴォルクルスがその身を乗り出してきた。

シユウとヴォルクルスの視線がぶつかる。

途端、仮面のようだつたヴォルクルスの顔に、凶悪な、それでも、美しい、笑みが浮かぶ。

「・・・ワガ・・・ネムリ・・・ヲ・・・サマタゲ・・・ヨビオコシタ・・・ノハ・・・オエエ・・・タチ・・・カ？」

私の正体を承知の上で、それでも求める、愚か者共。

「ホウビヲ、ヤラネバ・・・ナランナ・・・。」

求めるのならば、与えよう。

「オマえたちの・・・のぞむもの・・・。」

我が名はサーヴァニ・ヴォルクルス。

「それは
・
・
・
・。」

我は、
申。

司るは

死だ！

走っていた。
逃げていた。

何から？

闇から。

私の、闇から。

「サフィーネ！ サフィーネ！ しつかりなさつて！」

素つ頼狂な言葉が聞こえる。

いつの間にここまで下りてきたのだろうか。 そんな下らない事を考
えた。

「サフィーネ……」

がくがくと、肩を揺すられる。いや、多分、ずつと揺すられていた
のだろう。気が付いたのが、今だつただけで。

顔を上げる。心配そうに眉根を寄せるモニカが居た。
バカねえ。こんな事で、そんなに大騒ぎして。

そう、言おうとした。

目が合つた。

アレと。

それが、笑う。

ネガイ ヲ カナエテ ヤロウカ ？

アノ オトコ ガ スキ ナノダロウ ?

オマエ ダケ ノ モノ ニ シテヤロウカ ?

ぐらりと、何かが揺れた。

それは、もしかしたら、彼女の気持ち。

「・・・ヴォ、ヴォルクルス・・・こんな、事・・・で・・・！」

ソレは笑う。

天使の様に。悪魔の様に。

「駄目よ、サフィー・ネ！ そんなのに、負けては駄目！！」

モニカの鋭い声が飛ぶ。

ナニ ヲ マヨウ ?

「貴女がいなくなられたら、シユウ様はどうなされますのー？私が貰われてしましますわよー？ それでも良いのー？」

モニカが泣いていた。

自分は今、どんな顔をしているんだろう。

「・・・シユウ、様・・・。」

愛しい人の顔が見たかった。

意外に近く、その顔はあつた。

長身と相まって、見下した様な、その視線。

オマエ ダケ ノ モノ ニ シテヤロウカ ?

「何をしているのですか、サフィー・ネ。」

予想以上の、冷たい声。

「シユウ様・・・？」

モニカが、不思議そうにシユウを見遣る。

「ヴォルクルスの僕である以上に、私の仲間でいてくれるのでは無かつたのですか？」

「あ、そうだ。そう、誓つた。

「・・・サファイーネ。」

呼ばれる。

応える。

「・・・あの場所に、貴女の居場所は見つかりませんでしたか？」

貴女の求めていたモノが、
貴女の欲していたモノが。

あの場所には、ありませんでしたか。

問われる。

答える。

何を迷つ。

迷う事など、一つだって、あつはしないの。

アレは、変わらず、こちらを見ていた。

睨み付ける。

「・・・アンタなんかに・・・アンタなんかに、負けるモンですか。
・・・・・・私はツ！シユウ様と・・・シユウ様と・・・ツ！」

傍から見たら、とても、感動的な光景だった。

「シユウ様と・・・
するのよーつ！—

この一言さえ、無ければ。

シユウは半ば感心したように、ほほ、と声を漏らした。

「ヴォルクルスの支配を跳ね除けましたか。・・・頑張りましたね、サフィーネ。」

子供がテストで百点でも取つてきた様な褒め方。それでも、サフィーネは満足そうだった。

荒く息を吐きながら「シユウ様の為ですもの、これ位・・・何でもありませんわ。」と笑う。

「サフィーネ様らしいなあ。」と、チカが感心したやら呆れたやら分からぬ声を出し、モニカは「お下品。」と完璧に呆れていた。

「おい。」

今まで、流れに完全に置いていかれていた外野から、低い声が聞こえる。

アハマードが、待ちくたびれたと言わんばかりに、一步前へ出た。

「もう、茶番は良いのか。早くアレと戦わせろ。・・・その為に、俺を呼んだのだろう?」

先刻から、口の中がアドレナリンの味で一杯だ。

そう続ける。興奮しているのだと、素直に言わないのが、何とも彼らしい。

「ええ、もう結構ですよ。」

その言葉を聞くやがて、アハマードはさつやと魔機の元へと行つてしまつた。

シユウは、そんな彼に構つ事なく、残つた外野陣を見渡す。

「さあ、皆さん。これは、完全に私の“私闘”です。参加するしないは各人に任せ致します。本々、そう言つ御約束でしたからね。ただし、と彼は言つ。

「一緒に戦つて頂けるのであれば・・・歓迎します。」

そう言つて、笑つた。

「つまり、アレだ。」

最初に口を開いたのは、イルムだつた。

「お前さんは、アイツに操られて“あんな事”を仕出かしたワケだ。

「ええ、そうなりますね。・・・多少、不本意ではありますが。」

あんな事。その括りの中に、ゼニまでの事が含まれるのかは分からなかつたが、シユウは頷く。

「つて事は、アレを倒しちまえば、地球にとつての脅威が一個、無くなるつて一事だな。」

「おやおや、買被つて頂いてますね。」

「出来るクセに。」

「否定はしませんよ。」

「なら、芽は摘んどくに限るな。何せ、俺とリンちゃんとの、ラブラブな生活がかかつてるからなー。」

なあ、リン。

そつ言いながら、彼女の肩に手を回すつゝあるが、途中であつさつ弾き落とされた。

「あいや、リンちゃん冷たーい。」

おどける彼に、リンは冷ややかな視線を送る。

「日頃の行いが悪いからだ。」

ふんと背を向け、リンが歩き出す。

「ラブラブかどうかは、明日以降の生活態度にかかつているからな。」

「言つてから、恥ずかしくでもなつたのか、彼女は足早にヒュッケバインに乗り込んでしまつた。

「・・・愛されてるねえ。」

「ほり、俺つて色男じやん?」

テリウスのからかい半分の言葉も軽く受け流し、イルムはゲシュペ

ンストの「クピットへと消える。

「さて、と。」

テリウスは、少し虚勢を張るように伸びをすると、サフィーネに視線を向けた。

「ね、今日の夕飯、メニュー決まってるの？」

「え？・・・まあ、まだ決まっているわけじゃあないけど・・・。」

「ハンバーグが食べたいな。」

サフィーネが吹き出した。

「ふ・・・おこちやまねえ。仕方ないわ、トクベツよ。」

「ぼくのは大きめにしてくれよ。」

「それは、約束できないわねえ。」

「ちえつ。・・・ま、いつか。」

そう言って、彼もまた、ガディフォールの操縦席へと向かって行く。

「やれやれ、皆さん物好きですね。」

悲嘆では無い溜息を漏らし、シユウは呟いた。

「・・・では、私達も、その物好き仲間に入らせてもらひつとじよう。

「

ラテルが笑っていた。

傍らにミラを伴つて。

「ヴォルクルスは、ラ・ギアスの脅威だ。我が名に戴く戦士の称号にとつて、これ程名誉な戦もあるまい。」

「・・・あら、私はてっきり、彼女の為かと思つたケド・・・。」

意地悪そうに、サフィーネが呟く。

今、彼にとつて、世界だの名前だのは、おそらく一の次だろ。大切なモノはすぐ近くに。彼の傍らに。

「守る為の戦い。ならば、迷いません。」

答えたのは、ミラだった。

「・・・そうね。その通りだわ。」

二人は、一緒にガディフォールへと乗り込む。

とても微笑ましい光景だった。

「さあ。」

シユウが呼びかける。

言葉の先にはモニカとサフィーネ。

「私達も、往きましょうか。」

私“達”と言つ。

当然の様に。

「ええ、勿論ですわ。」

「はい、往きましょう、シユウ様。」

一人が答える。

当然の様に。

「私達全員の、私闘ですわ。」

モニカが、そんな事を呟いた。

我先にと、勇んで出撃したアハマドの機体は既にボロボロだった。それにも構わず突撃を繰り返す様子を見ては「修理する身にもなれ」とサファイーネは怒鳴りつける。

そんなサファイーネを宥めつつ、さり気無く口説き文句を口にするイルム。

それを聞きとがめて、リンは不機嫌そうに棘のある言葉を吐く。その場のノリで出撃してみたは良いものの、今ではすっかりやる気を無くして、申し訳程度の援護射撃をするテリウス。

弟をどやしつけながら、戦闘用ではない機体で突貫していくモニカ。もう傍で見ていて恥ずかしい位にイチャついてるミラとラテル。何ともふざけた戦場だ。

そう思つて、シユウは笑つた。

「リン、サファイーネ、相手の腕を狙つて下さい。テリウスは一人の援護。モニカ、ソルガディに再生の呪文を。その間イルムとラテルは相手の注意をソルガディから逸らして下さい。」

シユウが指揮を執る。

思い思いの返事をしながら、全員がそれに従つ。

「それにしても・・・」と、今までずっと言葉を発するタイミニングを逃していたチカが、思い出したように喋り始めた。

「何と言ひますか、皆さん緊張感が無いですねー。相手はあの破壊神ヴォルクルスでございましょ。こんなノリで大丈夫なんですか、ご主人様？」

「フフフ、アレにしてみたら、こちらの方がずっとやり難い筈ですよ。」

「そーなんですか？」

「アレの糧は負の感情ですから。・・・本来、その顕現は恐怖と絶望とをもって迎えられるべきものなのです。」

はー。とチカが感心した様な声を出す。

「そこまで計算してらつしゃつたんですか、流石!」主人様ですね!」「いえ、これは私にとつても意外でしたね。全く、愉快な方々が集まつたものですよ。」

それでも、信頼に足る、仲間。

悪くない。

そう思つた。

獣の様な咆哮と空氣を切り裂く風の音。

金属同士がぶつかり合う硬い音、その合間を縫う様に砲撃の音。様々な音が入り混じる、戦闘の音。

「さて、御仕舞いにしましうか・・・ヴォルクルス。」

呟いて、シユウは相手から大きく距離を取るようにグランゾンを引いた。

シユウの指が、コンソールの上を踊る。チカが忙しなく動き回る。

「ブラックホールエンジン、出力全開つ! 対消滅エンジン異常なし!」主人様、いつでもオッケーです!」

「・・・ブラックホールクラスター、発射。」

静かにトリガーを引く。

心臓部に集つた闇が、標的を日掛け突き進む。破壊神が闇に喰われている。

何とも奇妙な光景だつた。

「終わった……のか？」誰ともなく呟いた言葉に、シユウは首を横に振る。

「いいえ、まだですよ。」

グラソゾンはゆっくりと、無残な姿を晒す破壊神の元へと近付いて行く。

方々を闇に喰い尽されたヴォルクルスは、それでもまだ肉体を再生させようと蠢いていた。

「……醜悪な。」

吐き棄てるように言い放つて、シユウはグラソゾンを降りる。蠢く破片が再び集おうとしているその中心。

そこには不気味な程に美しい、女性の身体が転がっていた。

女とシユウの視線がぶつかる。

不意に、シユウの思考が乱れた。

どこかで、会つた事がある……？

酷い概視感。

どこまでも広がる様な青い空。美しい縁。咲き乱れる花。

その中心で、微笑む女性

ダメ！

耳元で叫ぶ様な声に、引き止められた、気がした。

今、思い出しては、ダメ。

「ご主人様！」

二つの声が重なつて聞こえる。

「……チ……カ？」

気が付けば、傍らには青い小鳥。

「もー！ 酷いじゃですか、ご主人様！！ 勝手に降りて行っちゃうなんて……！」

「あ……ええ、そう、でしたね。いらっしゃい、チカ。」

手を差し出す。小鳥が止まる。ちょいちょいと腕を伝つて、小鳥は主人の肩へと納まった。

シユウはゆっくりと歩みを進める。もう、視線が合つても思考が乱

れる事は無かつた。

「た・・・高が・・・人間の、分際で・・・。」

ヴォルクルスが、吐き出す様に言葉を紡ぐ。破壊神としての威厳は、既に失われていた。

シユウが懐から短刀を取り出す。儀式に使い、生贊に突き立てた、その短刀。

「殺す・・・つもりか・・・神である、この、私を・・・。」

「何が神です？太古に滅びた種族の亡靈風情が・・・。亡靈は亡靈らしく、大人しく冥府へと帰りなさい。」

言葉と共に、シユウは女の胸に短刀を突き立てる。

女が、奇妙な叫び声を上げた。

「わ、たし・・・ワタシは・・・死なん、ゾ・・・私ハ、オマエ達・・・なのダから・・・。お前タチ、の・・・ミ・・・ライ・・・なの、だ・・・カラ・・・。」

事切れる刹那、ソレは確かに何処かを見て、そして、嗤つた。

確認する余裕も無く、ゆっくりとソレは崩れ落ちる。

「・・・例え、本当の神であろうと、私を操ろうなどという存在は、決して許しませんよ。」

短刀の汚れを払い、シユウは破壊神の残骸を背にした。

「それでは、戻りましょう。私達の在るべき、空の下へ。」

カーテンコール

嫌な夢を見た。

真つ暗な闇の中で、何かの声に急き立てられた夢。
早く、と。

声が急かす。

急いで、と。

ソレは私の手にナイフを握らせる。

さあ、早く。

ソレが囁く。

その人を殺せ、と。

そうすれば。

ソレが呟く。

どこかあの人によく似た、その顔で。
そうすれば、と。

夢見がちな少女の様に。

私はお家に帰れるのだから。

そう言って、無邪気に笑った。

確かに私を見て嗤った。

あれは、夢。

でも、本当に夢だったのだろうか。
確証が持てない。

何故。

あれは夢だった筈。

夢で無ければいけない筈。

じゅあ何で。

私はナイフを握っているのかしら・・・。

不明瞭な未来

かちやかちやと、モニカが茶器を扱う音が室内に響いていた。彼女の横顔に浮かぶのは至福の微笑み。

視線の先には愛しい人。

彼の為に選んだ茶器。彼の為に選んだ茶葉。

ただ一人の為だけに淹れる紅茶。

ひっくり返した砂時計が、穏やかに時を運んで行く。

最後の一粒が落ちるのを見届けて、モニカはそつと紅茶を注いだ。

「どうぞ、シユウ様。」

「ええ、有難う御座います。」

ガラステーブルを挟んで、相向かいのソファに、モニカは腰を下ろす。

「・・・良い香りですね。」

「シユウ様に良くお似合いになられると思いまして、選ばれて頂きましたの。」

「モニカ、また文法が変ですよ。」

シユウが笑う。

それが嬉しくて、モニカも笑つた。

「本当に、終わりましたのね。」

穏やかに流れる時間の中、ようやく実感したその事実を呴ぐ。

「・・・シユウ様。これから、どうされるおつもりですか？」

そう聞かれて、シユウは一瞬、ほんの一瞬だが、酷く困惑した顔になつた。

「・・・シユウ様？」

「え、ああ。そう、ですね・・・。」その後の事など、特に考えていませんでしたよ。」

そう言って、瞳を伏せる。

周囲に翻弄された幼少時代。

邪神の傀儡となつたその後の自分。

思考とは無関係に、全てが流れていつた日々。

宙に浮いた自我の中、考えていたのは、鎖を引き千切る方法と、相手への復讐だけだつた。

そして、鎖は解け、復讐は叶つた。

この後、自分がすべき事は何なのだろう。

シユウは考える。

未だ完全ではない自身の記憶の中に、その答えはあるのだろうか。分からぬ。

非常に不明瞭な自身の未来。

でも、何故だろ。その不明瞭さが、シユウにはとても愛しく思えた。

「しばらくな、ゆくつしまじょうか。」

焦る事は無い。

時間はこれから山程あるのだ。

「ええ、私も、そうされたいと思われますわ。」

モニカが満面の笑みを浮かべた。

美しい午後の一時。

こうやつて、のんびりと時間を過ごすのも悪くないかも知れない。そう思った。

絶叫

どうしてだろう。
何故なのだろう。

自分の行動が分からない。

どこかへ向かっている。
よく知っている道順。

ああ、向かっているのはあそこなんだ。

息が切れる。
胸が苦しい。

私は、泣いているのか。

どうしてだろう。
何故なのだろう。

分からない。分からない。

でも、一つだけ、確かに分かる事がある。

ずっと、声が、私にそう言い続けているから。

だから。

私は、あの人を殺しに向かっているんだ。

何の前触れも無く、扉が勢い良く開け放たれる。

崩れる様にして入つて来た人物を見て、モニカとシュウは目を見開いた。

彼女は泣いていた。

いつもは美しく化粧された顔を、涙で汚して。鮮血よりなお鮮やかな髪を振り乱しながら。

「サフィーネ！」

「いけません、モニカ！」

駆け寄ろうとするモニカを、シュウが手で制した。

「・・・あ、ああ・・・ああ・・・シュウ様・・・シュウ様・・・

！」

縋る様な涙声と共に、サフィーネはよろよろと立ち上がる。その手に、しっかりとナイフを握り締めて。

声がする。

声が聞こえる。

殺せ、と。あの人を殺せ、と。

だから。

「・・・シュウ様・・・お願ひです・・・私を・・・！」

呑まれてしまう。

呑み込まれてしまう。

だから。

「私を、殺してええええええ！――！」

私は、知つてゐる。

こんな光景を、私は、知っている。

でも、何故だろう。

思い出してはいけない気がする。

卷之三

モニカの切迫した声が響く。

サフィーネが緩慢な動きで顔を上げた。肩で息をしながら、虚ろな目でモニカを見つめる。

「やつよ、サフィーネ！ 一体、どうされましたの！？」

そこで、ショウははたと気がつく。

確かに、アレは黙った。何かを覗いていたアレ

視線の先に居たのは、もしかして……。

そして、嗤つた意味は・・・

・・・ヴォルクルス・・・。

シユウが苦々しげに呟く。

「……どこまでも、人を虚偽にしてくれますね。」

呴く言葉に滲む感情は、怒り。そして、僅かばかりの、失望。

「……サファイー・ネ……やはり、抗いきれませんでしたか……。」

「あ……ああ！……し……シユウ様……は、早く……私を殺して……！」

叫ぶ彼女に、シユウはそつと近付く。

「分かりました、サファイー・ネ。……殺してあげますよ。」

「シユウ様！？」

モニカが驚きの声を上げた。

「……モニカ、ヴォルクルスに操られてしまった者の苦しみが、貴女に分かりますか？」

「でも、シユウ様……！」

「……死より恐ろしい事を知っていますか。……自分が自分で無くなる恐怖が分かりますか。徐々に蝕まれて行く恐怖が。それすら理解できなくなる、恐怖が。」

シユウが懐から、短剣を取り出す。躊躇い無く、鞘を落した。それとほぼ同時に、サファイー・ネが叫び声を上げながら、シユウに飛び掛る。

「サファイー・ネ……！」

モニカの声が合図だつたように、一度、三度と二人の刃が交わる。「サファイー・ネ！ダメよつ！シユウ様、私が取っちゃうわよ！……それでも良いの！？」

モニカが叫ぶ。二人の刃が交錯する。

「……モニカ……アンタになら……。」

そこまで言つて、サファイー・ネが大きく目を剥いた。

絶叫が、室内に木霊する。

かくり、とまるで糸の切れた人形の様に、サファイー・ネがその場に崩れ落ちた。

一瞬の静寂。

ゆらりと立ち上がった彼女を見て、シユウが奥歯を鳴らす。

「フー···サフィーネ···完全に、操られましたか···。」

輝きを失った瞳が、ゆっくりと向けられた。口元には、歪な微笑み

「・・・今、樂にしてあげましょ。」

「…………シユウ…………。ねえ、シユウ…………。愁…………。

歪んだ口元から、言葉が漏れる。それに構う事無く、シユウはサブイーネとの距離を詰めた。

愁

その胸元に短剣を突き立てるにむけた瞬間だった

一生あれ変わったら、何になりたい?」

- 1 -

紡かれた言葉に、シニヤほひぐらと動を止めた。

ねえ、愁？

可愛らしく小首を傾げながら、サファイーはそつと手を伸ばす。驚

愕の表情で固まっているシユウの頬に、指先が触れる。

「ああ、そうだつたわね。・・・愁は、鳥になりたいんだつたわよ

ね。」

つう、とその頬に汗が滑り落ちた。

「愁は、ここが好き？」

誰だ。

これは、誰だ。

思考が乱れる。

映像が飛び交う。

りねせ、誰だ。

頭の中で青緑が交錯する。知つてゐる。この葉を、知つてゐる。

視界にサフィー・ネの赤い髪が映る。赤い瞳が映る。その手に握られ

たナイフが映る。虚ろなその笑顔が、映る。

私は、知つている。

こんな光景を、私は、知つている。

「私の為に、死んでくれるわね、愁。」

これは、誰だ。目の前で微笑む、この女は、誰だ。

視界が揺れた。一瞬後、景色が一変する。薄暗い洞窟。微かな松明の灯り。立っている男。目の前には、腰まで届く長い髪を揺らした女。

体が動かない。ここは何処だ。分からぬ。でも、知つている。

「さあ、私をお家へ帰して・・・。」

女が、ナイフを振りかざした。

こんな光景を私は知つていて。何時、何処で、誰と。ずきり、と左胸が痛んだ。何故。何故、左胸が痛むのか。そこは心臓。振りかざす刃が狙うその場所。

こんな光景を私は知つていて。知つていて。知つていて。知つている。

（・・・ダメ！）

過去。それは、多分、過去の出来事。

（今、思い出しては、ダメ！）

ばさり、と青い翼が舞つた。

「シユウ様！シユウ様！！」

シユウが動きを止めてから、モニカはずつと彼の名を呼び続けていた。しかし、何度も呼ぼうと彼は一向に反応を示さない。

まるで映画のワンシーンをスローモーションで見ている様に、サフィーネがゆっくりとナイフを振りかざす。何かを呟きながら。その言葉が、モニカには聞き取れなかつた。

「サフィーネ！目を覚まして！！」

思わず手を伸ばす。もう何度も目かになるその動作。その度に、見えない力に阻まれて、彼女の手は決して彼らに届く事は無い。自らの無力さに、モニカは唇を噛み締めた。口腔に、僅かな血の味が広がる。

(・・・モニカ・・・)

「・・・え・・・？」

一瞬、誰かに呼ばれた気がして、モニカは周囲を見渡した。

(・・・貴女は、あの子を、愛してあげられる？)

今度は、はつきりと、声が聞こえる。

(あの子が、過去にどんな罪を犯していくても、未来にどんな過ちを犯そうとも・・・貴女は、あの子を愛してあげられる？)

誰の声だかは分からなかつた。それでも、優しそうな女性の声だつた。強いて言つならば、母の声に近いかも知れない。モニカはそう思つた。

「愚問ですわ。」

強い口調で、モニカは言い放つた。

「過去も未来も、関係御座いません。私は、常に、今この瞬間の方を、愛しております。」

(やう。)

声は、少し安堵した様に呟いた。

(じゃあ、力を貸して。)

ぱさり、と青い翼が舞つた。

「そこまでです！――！」

全てを切り裂く様な、鋭い声だった。

モニカも、サフфи－ネも、そして、シユウも、その声の主を見ていた。

鮮やかな、空の色を身に纏つた、小さな鳥だった。

「・・・チカ・・・？」

誰ともなく呟いた言葉の先に、彼女は神々しく存在していた。

不愉快な名前で呼ばれた。
そんな気がした。

クリストフ＝マクゾート

確かに、そう呼ばれた。

呼びかけに、応える事はしなかった。

その名前で呼ばれた事に対するささやかな反抗なのかも知れない。
それでも、その名を呼ばれ続けた。

何度も目かになる、その呼びかけに、彼は憤りを以って応えた。

「その名で呼ぶのは止めなさい！」

自分でも驚く位、荒げた声だった。

「私は・・・私の名前は、白河愁です。」

噛み締める様に、吐き出す様に、彼が呟く。

「どうしてそんなにムキになつて否定するの？貴方はクリストフ＝
マクゾートでしょ。その名を戴いて、生まれ出でてきたのでしょ
う。」

「違います。そんな名など、とうに棄てました。」

「どうして棄てたの？どうして白河愁と名乗るの？」

「そんな事・・・あなたの知つた事ではないでしょ。」

「クリストフ＝マクゾートは誰にも愛して貰えなかつたから？」

「つ！」

「白河愁であれば、あの人が愛してくれたから？」

「黙りなさい！」

「あの人気が誰だかも覚えてすらいないのに？」

「黙れと、言つてゐるのです！」

「今、貴方を愛してくれている人達に背を向けて。下らない事にば

かり気を取られて！」「

「黙れ！！」

彼の叫びに、声は一瞬沈黙した。

「・・・それで？」

声は再び静かに語りだす。

「それで、私を黙らせた後、貴方はどうするつもり？」

「・・・つ。」

「私を殺す？あの、愚かなオイディップスの様に。私の問い合わせにすら答えられずに。私如きも服従させられず、殺す事でしか優位を示せない程、貴方は愚か？」

「・・・言いたい事を、言つてくれますね・・・。」

「可哀想なオイディップス。彼はスフィンクスの首に鎖を繋ぐ術を知らなかつた。背負いも出来ないモノを、背負つてしまつた哀れな子。」

「・・・では、貴方は？」

「・・・私、は・・・？」

「私を征服する事が出来る？私の首に鎖を繋いで、飼い慣らす事が出来る？」

「私は・・・。」

「クリストフ＝マクゾート、白河愁。貴方には、出来る？」

「私は・・・征服してみせましよう。愚かな先人の、一の轍は踏みませんよ。」

「・・・そうでしょう、“チカ”。」

「ええ、その通りですよ。“ご主人様”。」

全員が、ただ一点を見つめていた。
そこには、小さなちいさな、青い鳥。

「シユウ様！」

モニカが逸早く我へと返り、駆け寄つて来る。

「「」無事でいらっしゃいますか！？」

「・・・モニカ・・・」

どこか虚ろだが、何とか返つてきた反応にモニカは安堵の息を漏らす。

そのモニカの肩に、チカは降り立つた。

「・・・ご主人様、ガラスのコップに熱湯を注いじゃいけません。
お湯が冷めるまで、もう少し待つて下さい。」

チカが言つているのは記憶の事だと、シユウにはすぐに察しがついた。

だから何度も、彼女は内側で叫んでいたのだ。まだ、思い出してはいけない、と。

「・・・ええ、そうですね。まずは、目の前の問題を何とかする事にしましょうか。」

そう言つて、視線を向ける先。彼女はナイフを振り上げたまま、ぎこちなく固まつていた。

モニカが、シユウを慮つてかそつと彼の手を取る。ゆっくりと、彼女に向けられた瞳には、意志の光が戻つていた。

「感謝しますよ、モニカ・・・それに、チカ。」

「シユウ様・・・」 「「」主人様！」

二人の喜びの声が重なる。

「さあ、あの忌々しい化物から、大切な仲間を奪い返すとしましょ

う。」

「サフィー・ネ。」

名前を呼ばれてか、サフィー・ネはびくりと反応を示す。

「・・・私は、今思い出した事なのですが。貴女は覚えていらっしゃる、サフィー・ネ？」

特に警戒した風も無く、シユウはサフィー・ネとの距離を詰める。

「いつだつたか、私は貴女の名前を聞きましたね。」

ナイフを振りかざしたままの右手を掴み、そつと顔を寄せる。虚ろな赤い瞳が一瞬揺らめいた気がした。

「貴女は笑つて、まだ覚えてくれないのかと少し不平を言いながら、名乗りましたね、ヴォルクルスの姓を。サフィー・ネ＝ゼオラ＝ヴォルクルス、と。

でも、私が聞いたのは貴女の本当の名前。ヴォルクルスなどに身をやつす以前、貴女が生まれ出た時に授かつた名前。

覚えていらっしゃる、サフィー・ネ。貴女が名乗つた、貴女の本当の名前を。」

サフィー・ネの瞳から、一筋の涙が流れ出る。その涙が語つていた。覚えている、と。

「サフィー・ネ＝グレイス。」

からんと乾いた音がした。

それは右手からナイフが滑り落ちた音。ヴォルクルスの呪縛を脱した証。

本当の名前を、取り戻した瞬間だった。

あの出来事の後、倒れたサフイーネが目を覚ましたのは正午を少し過ぎた時間だつた。

事情を知らないメンバーには、連日の激務が祟つたとだけ伝えておいた。

唯一、テリウスにだけは真相を話したが、興味が無さそうに「へえ、大変だつたね。」と言つただけだつた。

案外、当事者になれなかつた事を拗ねていたのかも知れない。だから、目を覚ましたサフイーネの傍らに居たのはモニカとシユウ、チカだけだつた。

「ご気分は如何でして、サフイーネ？」

徹夜で看病していたのか、少し眠そうな目を必死に擦つてモニカが微笑んだ。

「・・・身体は凄くだるいわね。でも、心は晴々とした気分よ。有力な光が宿つてゐる。有難う。」

弱々しく笑い返すサフイーネ。表情は幾分やつれていたが、目には力強い光が宿つてゐる。

「・・・シユウ様・・・」

サフイーネが頭だけを動かし、彼の方を向く。

ベッドの横にある椅子に掛けているモニカとは違い、シユウは少し離れた所にあるテーブルセットの椅子に掛けていた。

「・・・シユウ様、お聞きしたい事がありますの。・・・よろしいですか・・・？」

彼女の位置からではシユウの表情は上手く読み取れない。下された沈黙を肯定と見なし、サフイーネは訥々と語りだした。

「私、操られている間、ずっと声を聞いてましたの。・・・女性の、声でしたわ。」

びくり、とモニカの肩に乗つていたチカの身体が震える。

「彼女は・・・多分、泣いていましたわ。ずっと、シユウ様を殺せつて言つてゐる間、ずっと・・・泣いていましたわ・・・。」

サフィーネは瞳を伏せる。思い出す。昨夜の出来事。殺せと、確かに殺せと、黒髪の女性は言つていた。そして、同時に泣いていた。ただ、帰りたかっただけなのに。

そう言いながら、泣いていた。そんな気がする。

そして、自分の中から彼女が去る時、彼女は一言、か細い声で「う言つた。

「「めんなさい。」

視界が揺れた。

ここは何処だ。

知つてゐる場所。けれど、思い出してはいない場所。

揺れる松明の光が、おぼろげに景色を映し出す。

真つ赤な空間。

白かつたのであらうドレスを真つ赤に染めて、女性が泣いていた。

ごめんなさい。ごめんなさい。

聞いてゐる者すら痛々しい気分にさせらる悲痛な声。

ごめんなさい。

真つ赤な手を見て、その手に握られた短剣を見て、彼女は泣いていた。

赤い円の中心にいる、我が子を見て、彼女は泣いていた。

ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。

途切れ途切れに咳かれる謝罪の言葉。

もう、永遠に届かない我が子への謝罪。

まだ名も無い青い鳥だけが、その言葉を聞いていた。

椅子と床とがぶつかり合つ音がした。

モニカが不思議そうここからを見ている。

「シユウ様？」

衝動的に立ち上がったのだと理解するのに少し時間を要した。

「シユウ様もお疲れておいでで御座いませんか。サファイーネの事でしたら」心配には及ばれませんわ。どうか、シユウ様もお休みになつて下さいまし。」

少しほつれた三つ編みを揺らしながら、モニカが微笑む。この少女の強さが、酷く羨ましく感じられた。

「・・・ええ、すみませんが・・・少し、休ませて頂きましょう・・。

・。貴女も、余り無理をしないで下さいね・・・。」

ふらつく足下を誤魔化す様にゆっくりと歩き、シユウは部屋を後にする。

「めんなさい。」

黒い髪の女性が、泣きながら繰り返し呟いたその言葉だけが、彼の頭を巡っていた。

廊下をぶらついていたのは暇を持て余していたからだつた。

ラ・ギアスに来た思い出に、とイルムがリンを誘つて出かけたのがお昼の少し前。

その案内をすると、さつ氣無くミラを伴つてラテルも出かけてしまつた。

サフィーネが元気ならば、そのダブルデートに意氣揚々と着いていつたで、あうが、残念ながらテリウスにそんな出歯龜根性は無い。アハマドは相変わらず必要な時以外部屋から出ようともしないので、モニカとシュウがサフィーネの看護に回つてしまつと彼は必然的に暇を持て余す事になる。

昼食は先刻済ませた。何ともつまらない食事だつた。ここに呼ばれてからの食事は常に賑やかだつた事を思い出す。

「・・・サフィーネ・・・目、覚ましたかな・・・?」

今朝、シュウから、昨日の夜に何があつたか説明を受けた。朝のテンションの低さと、何とも云えない疎外感が手伝つて、つい連れないので返事をしたことに、今更ながら後悔の念が湧いてくる。

「・・・どうしようかな。」

サフィーネの様子を見に行くべきか。

是非にも見に行くべきだと思う自分と、そんな事も面倒臭いと思う自分がいる。

よくもまあ、ここまで無精者に育つたモノだと我ながら感心した。今まで周囲に居た人間がいけなかつたんだ、と自分に言い訳をする。では、今はどうなのか。

僅かばかり逡巡した後、テリウスはそつと踵を返した。

彼がサフィーネの部屋に着くのと、シュウが部屋から出でてくるのが

ほぼ同時だった。

「おや、テリウス……ですか。」

今朝会つてから数時間しか経つていないので、更に疲れの色を濃くしたシユウを見て、連日の激務が祟つたのは彼自身なのではないかと思う。

「シユウ、酷い顔してるよ。」

「そうですか？」

自覚があるのか無いのか、蒼白い顔に眉根を寄せせて、シユウは首を傾げて見せる。

「もう全部終わつたんだろ、ゆっくり休みなつて。」

「ええ……そう、させて貰いますよ。」

氣休め程度の笑みを作り、やや覚束無い足下を誤魔化しながら、それでも助けを拒む空氣を背中に貼り付けるシユウに、テリウスは嘆息した。

「根深いんで御座いますよ。やっぱり、人間そつそつ簡単には、変われませんね。」

いつの間に現れたのか、廊下に等間隔で並ぶ窓枠の一つにチカが止まつていた。

テリウスが手を差し出すと、緩慢な動作で飛び移つて来る。

「……でも、少しずつなら、変われる。」

チカが腕を昇る感覚。肩まで回りついた所で、テリウスは彼女を見た。

「そうだろう、チカ。」

「ええ、そうですとも、テリウス様。」

「……ぼくはね。」

扉を見つめる。取つ手を掴んだ。

「ぼくは、変れた。きっと。変つた。」

「 ちいだり？ 」

「 ・・・ええ、 ちいですとも。 」

扉が、 ゆっくりと開いた。

弟と姉と小さな鳥

部屋の中は、昼間だと叫つのに薄暗かった。

窓を見れば、厚手のカーテンがかかつたままになつてゐる。開けようか迷つたが、視界の端にまどろむ姉と畠々と眠る仲間をつけ、手を離す。

うつらうつらと揺れる姉の髪が、綺麗に編まれた普段とは違う事にすぐに気付いた。

看病の邪魔になつたのか、椅子の背凭れにはぞんざいに外されたままの長手袋。

自慢のドレスは無残にも皺にまみれ、横顔を見遣れば田元にはうつすらと隈が浮いている。

テリウスは溜息を吐いて、モニカの肩を軽く叩く。

「・・・姉さん、看病する側が参つてちや、本末転倒もいいところだよ。」

テリウスの言葉にか、それとも肩に置かれた手の感覚にか、モニカが驚いた様に振り向く。

「あ、あら、テリウス。参つてるだなんて、そんな、なきにしも御座いません事よ？」

慌てて目を擦り、笑顔を作つて見せた所で、ボロボロの風体では説得力も何も無い。

「・・・後はぼくが見てるから、姉さんもちょっと休みなよ。」

大変だつたんだろう、昨日の夜。

少しの妬みを言葉に含ませれば、姉は赤ん坊でもあやす様に微笑む。

「・・・他の皆様は？」

「デートだつてさ。置いてけぼり喰らつたぼくは暇なの。」

「そうですの。良い思い出を作つて頂ければよろしいですわね。」

「夕飯の買い物もしてきてくれるつてさ。//リフが作るつて言つてた。」

「

「それは安心されましたわ。」「

夕食悩んでましたの。

言葉に髪が揺れる度、編まれた髪がほつれしていく。

「ま、そういうワケだからさ、姉さん。」「

姉の手をやや強引に引き、椅子から立ち上がらせる。驚いたモニカから小さな悲鳴が漏れた。

「はいはい、出てつた出てつた。」「

手袋を押し付け、そのままの勢いで扉まで連れて行つた。

「テリウスつたら、もう。」「

困つたように眉根を寄せながら、それでも、弟の成長を見て取り、モニカは口元を綻ばせる。

「モニカ様、アタクシも居りますんでご安心下さいな。何かあつたらお知らせに、それこそすつ飛んで行きますから!…」

テリウスの肩上で、チカが小さな胸を張つた。

ある武将の死〈前編〉

「カーラクスが死んだそうよ。」

目を覚ました彼女が、最初に口にした言葉がそれだった。

「……ああ、そう……ふーん、そうか、死んだんだ。」

「あら、驚かないのね。」

氣の無い返事を返すテリウスに、サフィーネは少しばかり驚きの表情を作る。

「まあ、戦争だからね。誰が死んでも、別に不思議じや無いぞ。」

「そうかも知れないわね。」

横たえたままだった体を、酷く億劫そうに起こしながらサフィーネが笑う。

化粧をしていないその顔は、普段よりもずっと、彼女を幼く見せた。そういえば、自分とそんなに歳が離れているワケでもなかつたなど今更ながらにテリウスは思う。

「何よ、人の顔、じろじろ見ちゃって。」

「ん、いや、化粧してない顔なんて初めて見たなって思つてさ。」

「……サイアクね。好きでも無いオトコにすっぴん見られるなんて。」

「酷い言われようだな、ぼく。」

「で、感想は?」

「……は?」

「『……は?』じゃないわよ。オンナの素顔見たんだつたら、感想の一つも言ひるのが常識でしょ?。」

どこの常識だよ。心の中で突つ込みながら、テリウスは少し考える仕草をする。

「そうだなあ・・・ぼくは、化粧していない顔の方が好きかもね。」
予想外の言葉だったのか、サフイーネは一瞬困ったように笑った。
案外、照れたのかも知れない。

「そう言えばサフイーネ様？」

今まで空氣の様だったチカが間隙を縫つて口を開く。

「カーネクス将軍って、いつ死んだんです？アタクシ、まだそんな情報掴んでませんケド・・・。」

「さあ・・・いつだかまでは聞いてないわ。ただ、殺したのは・・・
ヤンロンと、そう、リューネって言つたかしら、地上の口。」

「ヤンロンが？」

テリウスが上ずつた声を上げる。サフイーネが目を覚ましてから、
一番大きな反応だった。

「アレ、でも炎の魔装機神はカーネクス陣営に居ましたよね？」

テリウスの言葉の意図を汲んでか、チカが首を捻る。

「そ。内部分裂つてヤツかしら。カーネクスの息子も、ヤンロン達と一緒に戦つたみたい。」

「はー。お子さんにまで裏切られちゃったんですね。何だかなあ。」

「チカ、それはちょっと間違ってるわ。カーネクスが、裏切ったのよ。」

「カーネクスが・・・かい？」

テリウスが、眉間に皺を寄せる。

「そうよ。シユテドニアスをラングランから追い出した後、カーネクスとフェイルはすぐに激突したわ。」

「兄さんと、か。」

「確か、初戦でカーネクス将軍、コテンパンにされちゃったんですね。」

「フェイル軍の強さは、カーネクスの計算外だったみたいね。ミラとラテルは敗走して来て、あの街にいたのよ。」

ああ、それで。と、テリウスは頷く。そういえば、そんな事を言つていたかもしねり。

「・・・でも、何でヤンロン達はカーカスと対立したのさ？」

「簡単な事よ。ヤンロンの・・・魔装機神の敵と、手を結んだから。

」
チカが納得したように小さく声を出した。

「そういえば、ご主人様が言つてましたね。ルオゾールとカーカスが、秘密裏に、手を結んだって。」

「そう。カーカスは力を熱望したそうよ。それはそれは、大きな力を・・・。」

そこで一旦言葉を切つて、サフィーネは笑つた。呆れでも嘲りでもない。何とも複雑な笑いだつた。「そして、力に敗れた。・・・だから、死んだ。それだけよ。」

「・・・何で、カーカスはそこまで・・・？」

「さあね。・・・強いて言うなら、オトコだったから、じゃないかしら。同じオトコなら、アンタの方が分かるんじゃない？」

「無茶言つなよ。ぼくには分からないよ、きっと、永遠に、ね。」

そうかしら。

彼女は意味ありげに咳くと、髪を搔き上げた。

「じゃあ、軍人だったからかも知れないわね。どっちにしたって、同じ事よ。カーカスは死んだんだから。」

バカなオトコね。

どこか遠くを見つめるような眼差しで、サフィーネが小さく咳いた。その表情の真意に、テリウスが気付く事は無かつた。

ノルスに呼ばれている気がした。

自室に戻ったモニカは、シャワーを浴び、髪も乾かす事なく寝間着に着替えた。

倒れる様にベッドに横になつたのは、まだまだ口も高かつた時で、外出組が戻つてくる気配すらなかつた。

ノックの音で起こされてみれば、時計の針は文字盤を半周程している。軽く頭が痛んだ。

「姉さん、起きてる？ 夕食だつてぞ。」

扉板一枚分ぐぐもつた弟の声に、すぐ行くとだけ返した。

妙な癖が付いてしまつた髪を梳き、一括りにし、服を着替える。

鏡で自分の姿を確認する。少し顔色が悪い気がしたので、紅だけを薄く乗せた。

夕餉の席はとても平穏だった。

すっかりとデートを満喫したであろう四人は饒舌で、行った場所や起きた出来事を取り止めも無く話しては笑つた。

起き上がるまでに回復したサファイーネも、疲れは見せていたもの、上機嫌そうだった。

リンの首元に、朝までは無かつたペンダントを見つけた。ミラの左手には、中指ではあつたが、真新しい指輪が嵌つていた。

ああ、戦いは終わったのだ、と改めて実感した。

アハマドだけが一人不機嫌そうな顔をしていたが、思い返せば戦場

以外で機嫌の良い顔を見た事が無いので、案外とそういう顔つきなのかも知れない。

早々に食事を切り上げたシユウとアハマドに次いで、モニカも食卓を辞した。

廊下に出た瞬間に、ノルスの気配を感じた。

呼んでいるのだと思った。

モニカが着いた時には、既に火が入っている状態だった。
少し不思議にも思ったが、呼んだのだから当然だろうという気持ちもある。

コクピットのハッチも開いていた。

通信機が着信を示すランプを点灯させている。
誰からの通信なのか、モニカにはすぐに分かった。

「・・・お久しぶりと存じますわ、セニア。」
「ん、久しぶり。相変わらず変な文法ね、モニカ。」
エーテル粒子が結ぶ、もう一人の自分との対話。
「・・・でも、ちょっとびっくりしちゃった。」
「あら、どうしてで御座いまして？」
「だって、繋がると思わなかつたから。」

同じ声で交わされる会話。それでも、向こうから返つてくるのは、自分の声では無い。

「ふふ。ねえセニア、私達、双子で御座いましてよ。」
「うん。」

「双子には、昔から、不思議な力があると言われておりますわ。」

「うん。」

「だから、私には、何となくですけれども、セニアの事がお分かりになりますの。」

「・・・うん。」

「今だつて、ノルスに呼ばれてここまで参りましたのよ。ノルスも、双子でしたわね。きっと、ノルスは私達自身なのですわ。」

「そうかも知れないね。」

「セニア・・・お一人で、居たくなかったのでしきょう?」

「・・・うん。」

「でも、皆様とも一緒に居られなかつた。居たくなかった。」

「・・・うん。」

「私、多分、その理由、お分かりになりますわ。」

セニアが息を呑む。

返答は来ない。

沈黙が痛い。

でも、だからこそ、モニカは確信した。

瞳を伏せる。

ああ、やはり。

「お兄様が、お亡くなりになりましたのね。」

嗚咽が聞こえた。

望むモノ、望まぬモノ

兄は優れた人物だった。

常に周囲から期待され、常に周囲の期待に応えていた。

それは、王家の長兄に産まれた者の定めだったのだろうか。

その裏で、彼が常に血反吐を吐いていた事を知る者は、余りにも少ない。

そして、兄は死んだ。

「私のせいなの！」

悲痛な叫び声が響く。涙に濡れたその声が、痛々しさを増長する。

「私が、私が兄さんを死なせたの！私が殺したの！！」

押し殺していた泣き声が、次第に大きくなっていく。

彼女が大声を上げて泣き始めるまで、然程時間はからなかつた。

「私が・・・私、が・・・。」

姉の、血を吐く様な告白を、モニカは静かに聞いていた。

「・・・お兄様の死が、お辛かつたのですわね、セニア。」

兄の死を知つても、不思議と、モニカの心に悲しみは訪れない。

ただ、寂しかつた。

「・・・有難う、セニア。」

「え・・・？」

通信機の向こうから、戸惑いを含んだ声が漏れる。

そういえば、彼女は知らなかつた筈だ。

兄が、どれだけの苦痛を抱えて生きていたのかを。

彼が王家の生まれでさえなければ、否、長兄でさえなかつたなら、その苦痛は少しは和らいだのだろうか。

「・・・お兄様は、もう長くは御座いませんでしたでしょ。」

「知つて・・・たの、モニカ？」

「ええ、存じておられましたわ。・・・お兄様が、魔力のテストで不合格になられた、その口から、ずっと。」

すう、と瞳を伏せる。

あの日の王宮は、本当に馬鹿馬鹿しい程の騒ぎだった。すぐに事態は隠匿された。

兄の全ては、あの日から狂つていった。

後日、再び行われたテストで、兄は王位継承権を手に入れた。それは、兄の寿命と引き換えられた、余りに悲しい権利。権力はいつだつて、望む者の手を離れて、望まぬ者の手に転がり込む。

「お兄様は、苦しんでいらしておいでだつた。」

精神的にも、肉体的にも。

ああ、あの人は何故、今、この時代に生まれてしまったのか。

「最期の瞬間、きっと、お兄様は、安らかでいらっしゃった筈ですわ。」

「モニカ・・・！」

「セニア、お兄様はね、貴女が居たお陰で、最期に皆と同じ場所に立てた。そうでしょう？」

「・・・兄さん、言つてた。皆と同じ道を歩きたかったつて・・・」

「そうしたら、きっと、楽しかつただろうなつて・・・。」

「だからセニア、私達は、歩きましょう。お兄様が憧れた、その道を。そして、この日で、見届けましょ。お兄様が夢見た、未来を。」

「

セニアが、泣き崩れた。

「貴女にも、その涙を受け止めて頂ける仲間がいらっしゃいますでしょ。」

「うん、うん・・・！」

「だから、もう、独りで泣くのはお止めになられて。」

貴女は、望むモノを持っているのだから。

夕餉の食卓は和やかだった。穏やかに微笑み、時に声を出して笑い、今日出来たばかりの思い出を語る四人は眩しかった。心配していたサフィーネの容体も、思っていたよりずっと良かつた。少し疲れた顔をしていたが、しつかりと自分の足で夕餉の席に来た。その事だけでも、シユウの心は幾らか安らいだ。

それでも。

何故だか、その場に居た堪れなさを感じ、申し訳程度に出された料理に口をつけ、適当な口実をでつち上げて早々に席を立つた。

皆さんは、どうぞごゆっくり。

そう告げた自分の顔が、きちんと笑えていたか確証が持てない。誰も可笑しな反応を示さなかつたのだから、何とかなつたのだろう。部屋に戻り、扉に鍵を掛け、灯りも点げずにソファに身を沈めた。

「・・・ご主人様？」

影から顔を出したチカが、訝しげな聲音を出す。

「どうなさつたんですか、ご主人様？」

普段余り役には立たない使い魔だが、こうした時だけ、何故か妙な鋭さを見せる。

「・・・チカ、貴女は・・・」

ある朝、気が付いたら口レはソロに居た。
しかし。

当然在るべき疑問が浮かぶ。

記憶の有耶無耶に隠れてしまっていたのだとしても、何故、今まで氣付かなかつたのか。

「・・・チカ・・・貴女、は・・・」

嫌な汗が頬を滑る。

ある朝、気が付いたら、コロモ、ソコヒ、居た。

なりぢ。

いつから、どうして、コロモ、ソコヒ、居るのか。

じぐり、と胸が痛む。

右の手が無意識に押されたその場所。心臓の真上に在る、その傷跡。

「……貴女は、どうして、存在しているのですか……？」

存在の理由

小さな双眸がじつとこちらを見つめていた。

幼い頃、図鑑でその姿を見た時に「ああ、青い鳥だ」と思った。これを捕まえれば、幸せを運んでくれるのだろうか。子供心でそんな馬鹿げた事も考えた。

窓辺に飛んできたそれを、一度捕まえようとした事もあった。実行に移さなかつたのは、多分、怖ろしかつたから。

捕まえた青い鳥が、幸せを運んでくれる前に、死んでしまうのではないか。そうなつたら、自分は永久に幸せにはなれないのではないか。

そんな現実を見せ付けられるのが怖ろしかつたのだろう。

その鳥の姿をした使い魔が、自分の前に現れたのはいつだつたか。

「お早う御座います、『主人様。』

ある朝、田が覚めたら口にはソコに居た。

ぼんやりとした頭の中で、ああ、名前を考えなくては、と思つた事だけは、良く覚えている。

「・・・チカ、貴女は何故、ここに居るのです？」
繰り返された質問に、小さな双眸が揺れた。

「昔はどうであつたのかは知りませんが、私の記憶する限り、使い魔を必要とするのは神官か魔装機神操者位です。」

その神官ですら、最近は練金学の発達に伴い、使い魔よりもコンピュータを伴侶とする者が多くなつた。

当時、まだ王族であつた自分に、使い魔など必要であつた筈がない。ならば、何故。

「チカ。」

もう一度名前を呼べば、半ば諦めた様に、彼女は息を吐いた。

「・・・ご主人様、アタクシが誰の手で創られたかは、覚えていらっしゃいますか？」

「・・・いいえ。私が覚えているのは、貴女と初めて会つた朝の事だけです。それですら、一体いつの事だつたのか、定かではありません。せん。」

そうですか、とチカが小さく呟く。

「アタクシを創つたのは、ルオゾールです。」

びくりとシユウの眉が微かに動いた。

「・・・詳しい事は申し上げられませんが、ご主人様が“最初に亡くなつた時”にアタクシは生まれました。」

じくり。

傷跡が熱を持つのを感じる。

じくり、じくり。

「つまり・・・私は、少なくとも一回、命を落としている訳ですね。」

「じくりじくり。」

「そうです。」

じくり。

服の上から傷跡を押さえる。

ヴォルクルス。ルオゾール。儀式。契約。傷跡。青い鳥。

嗚呼。

「最初に蘇った時も、完璧では無かつた。」

「・・・はい。」

「それを補う為に、チカ、貴女が必要だつた。」

「その通りです。」

「そして、その理由を、私はまだ思い出してはいない。思い出してもいけない。」

一呼吸置いて、チカがふうっと息を吐き出した。

「流石、ご主人様で御座いますね。」

チカが笑つた。

傷跡に集まつた熱を逃がす様に、シユウも息を吐く。そのままする

するとソファに横たわつた。

「ご主人様、お休みになるならベッドで・・・。」

「チカ・・・。」

苦言を呈そうとしたチカの言葉を遮つて、シユウが呟く。

「・・・ヴォルクルスとの契約が成された、と言う事は・・・私は、信頼していた“誰か”に裏切られたのですね。」

言葉の内容とは裏腹に、妙に凧いだ声色。

「・・・ご主人様、お休みになるならベッドで。」

ええ。と気の無い言葉を返しながら、シユウはそつと瞼を伏せた。

風の精靈達の機嫌は、その日の天氣に表れる。そんな言い伝えが在る。

本当かどうかは疑わしいが、そうであるならば、今日はよっぽど上機嫌な日なのだろう。

雲の一つすら見当たらない、見事に晴れ渡つた空だった。

グナインの甲板には、朝早くからモニカが干していった真白いシーツがはためいている。

青すぎる空と純白のコントラストは日が痛くなる程で、その白がこの艦の所有物なのだと思うと、何だか可笑しかった。

モニカが洗濯物を干していった時から、甲板の一一番担当の良い場所に、テリウスは陣取つて寝転んでいた。はためく布と青い空とを眺め、大きく欠伸をする。

目の前を小さい鳥が通り過ぎて行く。平和だと思った。

微かに靴音がして、日が翳つた。

「平和ですね、テリウス様。」

「あー、ラテル？」

「ええ。お隣、宜しいですか？」

「ん。」

失礼しますと言つて、ラテルが腰を下ろす。翳つた日が元に戻る。

「ミラは、一緒じゃないの？」

「女性陣は皆で最後のお茶会だそうです。」

「ああ・・・そういうや、今日帰るんだつけ、二人。」

ええ、と肯くラテルを視線の端に捉えて、テリウスはもう一度欠伸をした。

「君達はどうするの、これから？」

「一先ず、ラングランに帰らうかと。」

「ふーん、大丈夫なの？」

「カーラス将軍もフェイエル殿下も亡くなりました。戦争が終わつたなら、国を守る事こそ戦士の役目でしょう。」

「真面目だねえ。」

テリウスの揶揄するような視線を受けて、ラテルは少し笑う。

「テリウス様こそ、どうなさるのです？」

「んー、僕かい。そうだね、どうしようかな。」

「王位を継いでみては如何ですか。貴方になら、心から仕えられそうな気がします。」

「冗談だろ。」

「冗談です。」

半分は、そう言つて、ラテルが声を出して笑つた。

「王位なんて、欲しい奴にくれてやれば良いさ。ぼくは、やりたい事があるからね。」

緩慢な動きで上半身を起こして、軽く伸びをする。白い布が映える空を見上げて、テリウスは口の端を吊り上げた。

「・・・シユウがこれから何をするのか・・・ぼくはそれを見届けよ」と思つんだ。」

「それでは、精々、退屈させない様に気を付けなければいけませんね。」

白い敷布の中に、黒い髪を靡かせて、彼は居た。

「お別れ会が、終わつた様ですよ。」

笑つた顔は酷く穏やかだった。

ヒュックエバインとゲシュペンストが並び立っていた。

「世話になつたな。」

リンの言葉には、僅かな名残惜しさが滲む。

「シユウ、お前はこれから何をするつもりなんだ？」

問われて、シユウは軽く首を降つた。

「さあ、まだ分かりません。案外、貴方々と同じ事かも知れませんね。」

「ふふ、そうか。・・・次も敵で無い事を祈る。」

笑つて、リンとヒュックエバインはゲートを潜つた。

恋人が地上に戻る様を見届けて、イルムは「さて。」と声を上げる。
「俺は、リンちゃん程甘くは無いからな。次に会つた時に敵だつたとしても、容赦しないぜ。」

「肝に銘じておきましょ。」

「んじや、そういう事で。モニカちゃん、サフィー・ネちゃん、ミラちゃん、今度会つたらお茶でもしようぜ。」

最後にウインク一つ残して、イルムとゲシュペンストもゲートに消えた。

「我々も、失礼しよう。」

「皆さん、お元氣で。」

二人で一機のガディフォールに乗り込み、ラテルとミラも其々の日常へと帰つて行つた。

別れの間際、サフィー・ネから「結婚式には呼びなさいね。」と言わされて、二人共大層慌てたのは余談である。

「アハマド、貴方はこれからどうするのですか？」

シユウに問われ、ムスリムは初めて笑いらしい笑いを浮かべた。

「戦いが無いのであれば、ここにも用は無い。俺は俺の場所へと帰

るや。」

「そうですか。また、今度も味方として、お会いしたいですね。」

青い鷹は滑走路を蹴つて空に舞つ。

「インシャー・アッラー。」

短くそれだけを言い残し、鷹は迷い無く空を駆けて行つた。

「アハマド、何て言つてた?」

素朴な疑問をテリウスが口に出せば、シユウは笑つて答える。

「神の恩召す儘・・・だ、そりです。」

Blue bird

青い鳥が飛んでいた。

きっとあの鳥は、誰かの所へ、幸せを運ぶ途中なのだけれど。

どうか幸せに。

何処の誰とも知らない相手に向けて、僕は祈りの言葉を口にした。

翼を持った少女が、僕を見て、微笑んで居る。

どうか幸せに。

彼女はそう言つて空に消えた。

青い鳥になつて。

神聖ラングラン王国第288代国王フュイルロード・グラン・ビル
セイア。

出来たばかりの新しい墓には、はっきりと読み取れる文字で、そう
書かれていた。

「・・・貴女は、毎日ここに来ているのですか？」

白い百合の束を供えながら、傍らの人物に言葉を向けるシユウ。

「気が向いた時だけよ。」

今所は、殆ど毎日だけ。そう答えたセニアに浮かぶ表情は哀しさと寂しさ。

「・・・そうだ、アンタにお礼言わなきや。」

「おや、貴女に何か差し上げた記憶はありませんが？」

「違うわよ、兄さんのお葬式。モークとテリウス、出席させてくれたのクリストフでしょう。」

ああ、と咳いてシユウは首を横に振る。

「本人達の意向ですよ。私は何もしていません。」

「ん、そういう事にしどぐ。」

セニアが少し笑う。風が、二人の間を通り抜けた。暫しの沈黙を埋めるのは、何処からか聞こえる、鳥の声。

「・・・フエイルは・・・苦しまずに死ねましたか？」

じつと墓石を眺めていたシユウが、ふとそんな事を口にした。

「うん、多分だけど。・・・クリストフは、兄さんの事、知つてたんだ。」

「ええ、まあ。」

「私は、知らなかつたの、兄さんの事。知りうとも、してなかつたと思う。」

「クリストフは、何でも知つてゐるのね。」

「そんな事は、ありませんよ。」

嘘ばっかり。口の中で咳いて、セニアがもう一度笑う。哀しげに、寂しげに。

「全部、アンタの言つた通りになつたわ。私はあの後、すぐにマサキ達と合流したし、兄さんは、私が造つたデュラクシールで暴走した。」

「それは結果に過ぎませんよ。」

「だけど、その通りになつたわ。」

「そうなつたとしても、貴女の所為では無い、と言ひませんでしたか？」

そこまで話してようやく視線を合わせる一人。

「・・・ねえ、アンタはどうして未来見でも無いのに色々な事が分かるの？」

「ただの推測ですよ。」

「・・・推測、か・・・。」

「貴女がモニカのすぐ後に救出されるであろう事は、簡単に考えられます。まず、モニカを失つたシユテドニアスは焦つて行動を起こす筈だ。」

その際には、残つたセニアが王女として使われるであろう。あの場所だと、カーラス軍よりもフェイル軍駐屯所の方が近い。

更に、あの時点でフェイル軍がシユテドニアス軍に負ける要素は殆ど無い。そうなれば、セニアは近い内にフェイル軍と合流する事になる・・・と言つ訳ですよ。」

「ふうん・・・そう聞いてみると、確かに納得するかもね。じゃあ、もう一つの方は？」

「ああ、あれはもつと簡単です。フェイルには時間が無かつたでしょうから、ちょっととした切欠があれば、すぐに行動に移す・・・そう考えました。」

その切欠をもたらす可能性が、最も高かつたのが貴女です。私は情報だと踏んだのですが・・・まさか、魔装機を造るとは思ひませんでしたよ。」

「・・・そつか。」

セニアが空を仰ぐ。青い空には、群を成して飛んで行く、白い鳥。

「ね、私はこれからどうしたら良いと思ひ?..」

「何故、それを私に聞くのですか?..」

「・・・分かんない。」

「では、私が何と答えれば満足ですか?..」

「・・・アンタって、やつぱり意地悪ね。」

「テリウスにも、同じ様な事を何度も言わされましたよ。」

笑つて、シユウは続けた。姉弟ですね、と。

「・・・誰しもが、自分の道を自身で切り拓いて進むのです。全ての責任をその身に被つて。」

自由である為に。自由であるが故に。

「それを放棄してはいけません。」

それは自分自身を棄てる行為だから。自分である為に。自分であるが故に。

「悩み、苦しみ・・・それでも、進むのですよ。前へ。」

「・・・前へ・・・。」

「時は止まつてくれませんから。」

「・・・そうね。」

ずっと空に向けていた視線を戻し、セニアは従兄弟を見遣つた。双子の妹が、命を賭けて愛する相手。

「・・・どうか、幸せに・・・。」

「・・・セニア?」

「昔ね、モニカが精霊に祈つてたの。どうか、の方を、幸せに・・・つて。ずっと祈つてた。」

「・・・そう、ですか。」

セニアが、少し笑う。つられる様に、シユウも笑つた。風が一人の間を通り抜ける。暫しの沈黙を、歌う風の音が繋いだ。どうか幸せに。

少女がかつて祈つた想いは、いつか届くだろうか。

「ご主人様ー!」

沈黙を破つて、甲高い声が響いた。現れたのは、小さな、青い鳥。

「ありや、これはセニア様ー!お会いするのは、初めましてですよー!」

ペコりと頭を下げる鳥に、セニアが目を丸くした。

「・・・アンタのファミリア？」

問われて、シユウは困った様に笑う。

「不思議な事に。」

「どう言う意味ですか、ご主人様！？」

「そつか。アンタのファミリア、ローションなんだ。」

何事が考えて、セニアはそつとチカの頭を撫でた。

「・・・迎えが来ましたので、私はそろそろ失礼します。」

「うん。モニカとテリウスによろしく言つておいて。」

軽い会釈をして背を向ける従兄弟。歩き出した彼の背中に、セニア
は言つ。

「ローションは、祈りを運んでくる鳥だつて、いつか母さんから聞
いたわ。」

どうか幸せに。

青い鳥が届けてくれると。

どうか幸せに。

幼い子供は祈りを託した。

「届くと良いわね。」

いつか願つた幸せが。

「・・・もう」

貴方の許へ。

「届いて、いますよ。」

僕の青い鳥。

全89話、長々お付き合いで頂き有難う御座いました。

魔装機神に出会つてから14年。当時子供ながらに魅力を感じたシコウ・シラカワを主役として小説を書くのはとても楽しかつたです。（お話のベースはSRWEXですが・・・）

捏造やら妄想やらが渦巻いて、中々綺麗な形には纏まりませんでしたが、少しでも読んで下さった方の心に残る物があれば、これ程嬉しい事もありません。

最後にもう一度、読んで下さった皆様にお礼申し上げて、後書きとさせて頂きます。有難う御座いました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6761m/>

Blue bird

2010年10月9日03時55分発行